



3

0011620-000

599-355

小説よりも面白い法律実話

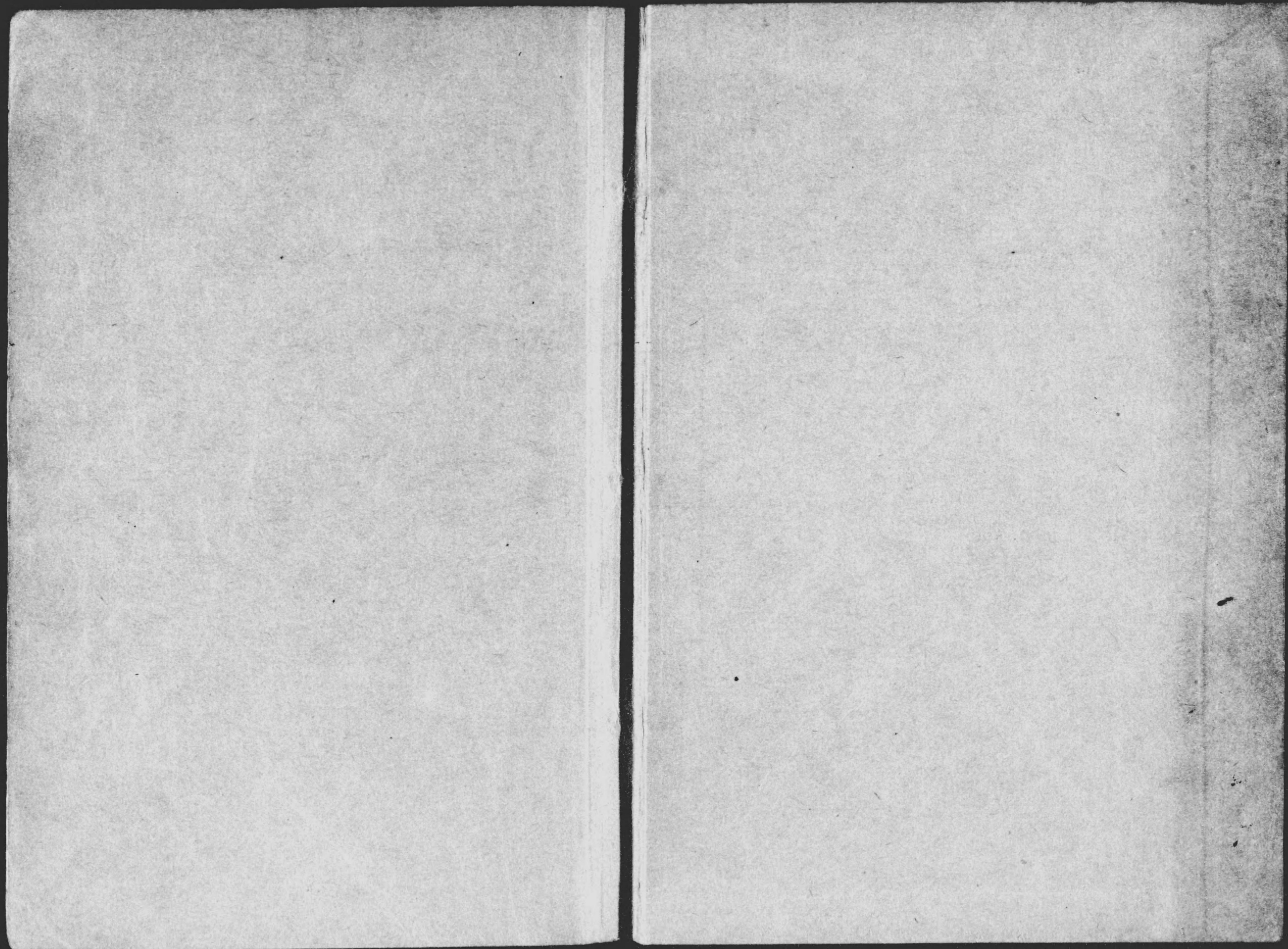
岩崎高敏・著

岡村書店

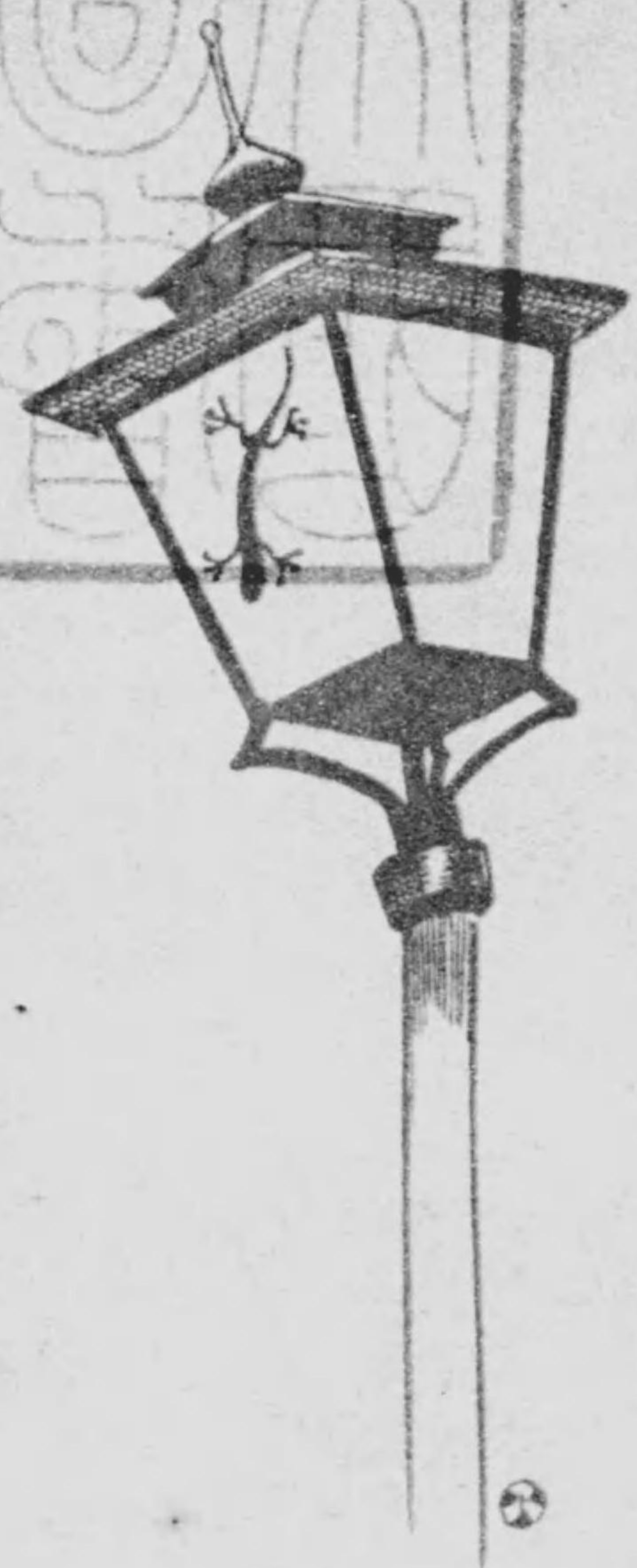
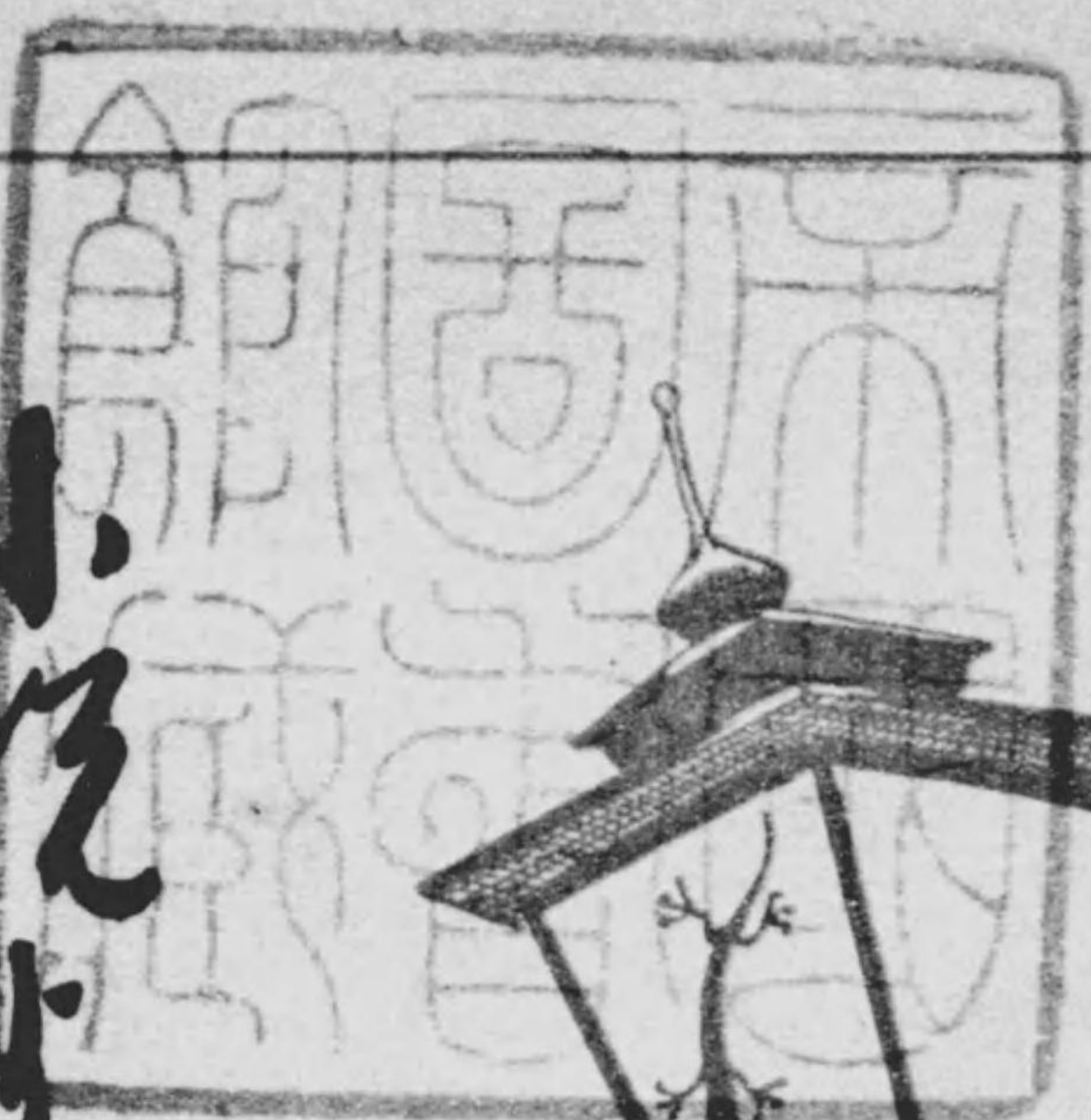
昭和6

ACA

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年5月15
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので



小説
法律実話
入



刊店書村岡



序

兎角理窟張つた法律問題を、面白可笑く説明するといふことは至つてむづかしい
 現在世に有り觸れた法律書を読んで見ると、いつとはなしに肩が凝る、面白くも可笑
 笑くもない無味淡白とあつては、自然と讀む氣が失せる、だが日常生活の上に、一
 舉手一投足悉く之れ法律に關聯せぬものはない、夫れを思ふと法律といふものを辨
 へて置かねばならぬ筈である、誰しもさうは考へて居るが、餘りに理窟張つた事を言
 ふと、往々人にさらはるゝ疑ひがあるのと、又一つには讀んで味もなく肩が凝るので
 必要とは信じ切つてゐても、いつしか夫れを等閑視してしまふ、其結果は意外の失態
 を招ぐのが今も昔しも變らぬ通弊である。

そこで著者は一苦心した、國民として其國の法令を知つて置くのが當然の義務であ
 る、夫れを知らぬでは義務に反する許りでなく、時に己れの權利を失ふ事になる、國

民一般がどうしても法律智識の一通り丈を、知つて置かれたい、夫れには小説本を讀むやうに、面白可笑く説明し、然かも其資料を實際の出來事から取るのが何よりである、かう信じたので、茲に始めて筆を執つた、民事々件もあれば刑事々件もあり、種々雑多の出來事を紹介して、其結果はどうなつたか、そして又之れを法律に照して其結末はどう付くものか、學理と實際とを併せて解決したのが正に之れ本書の特色であり、空前に類例なき本書の編成方である。

殊に本書の主要部分には、繪を入れて説いてあるので、何人にも又全く法律素養のない俗に素人でも、面白く讀んで行くうちに、法律の一般が通曉し得られるといふ寸法、思ふに此複雑な社會、世智辛い世の中に處して、本書の如きは確かに其必要有益を認むるものと、著者は斯く信じて之れを公にした、希くば多方面に興味多き本書の一讀を勸説する。

著者謹識

目次

總說

注目警戒すべき現下の世相……………一

 世智辛い世の中——頻々走る雜報記事……………一

死せる學問活ける學問……………四

 机上の空論は役に立たぬ——他人事で我事を悟る……………四

 失態を招ぐ動機は是れ……………六

 油斷と慾眼から飛んだ間違——色と慾との二つの邪道……………六

 本書によつて享受する幾多の利便……………六

 小説の材料と法律の材料——勸善懲惡の一大手本……………六

各說

一、紳士風の男が車の乗逃げ

目次

「詐欺の罪になるか、ならぬか」……………二
 丸の内の某會社の前で筒抜け——被告にめぐり合つて警察沙汰——裁判所で被告の振つた無罪の抗辯——遂に有罪の判決を下さる

二、放火事件悲劇と喜劇
 「一は聞く者悉く同情、一は滿廷哄笑」……………二七
 こは罰金僅か五十圓、彼は懲役一年——妻の心盡しに良人の藝者狂ひ——母への同情から長男の自殺——鬼の眼にも涙、滿廷無量の感慨——木賃ホテルで虐待されて憤激——又もや托鉢僧怒つての弄火——滿廷哄笑、結局一年の懲役

三、下宿屋の主人と下宿の學生との悶着
 「下宿料の滞納から信書開封」……………三三
 國許から書留郵便にほゝ笑む主人——信書を開披百圓の爲替券を確む——戀に絡んで女中お花が秘密を打明し——下宿の書生が赫怒して談判の末は告訴——告訴取下と未拂ひ宿料の帳消で鬼が付く

四、養子と實子との間に相續争ひ
 「裁判沙汰となつて噂とりく」……………三三
 何處からも美まるゝ程大當りの婚殿——實子が生れて養子への愛が薄らぐ——何

五、大岡山と千住の醬油屋六人殺し
 「稀代の殺人鬼が犯行の真相」……………三九
 三人を絞殺して金品を奪ふ——前の失敗を取返すべく今度は山田に——山田を連れ出して遂に絞殺す——引返して更に妻と小僧を絞殺す——夜釣に化けて屍體を放水路に——相被告田中の取調——證據調べと五味辯護士間の問答——峻烈を極めた検事の論告——辯護士と五味の最後の大見得——死刑を言渡され即時執行を希望す——五味の感想と田中の最後觀

六、剛情な金借の手代が御腰を据える
 「退去せぬので妻女が交番へ訴へ」……………五四
 家宅侵入罪にならぬか——交番での問答に花が咲き——歸宅した主人公交番指して駈け付ける——罪になるかならぬかの法の解釋——論より證據此最近の判例

七、止めを刺された會社荒しの悪重役
 「代行者外の登記申請は受理罷りならぬ」……………六〇
 登記所に假處分とは——悪重役が頻々重役變更の登記——近頃あつた此實例——拂込の強要に株主の大災難

八、姦通宥恕で司法界空前の事件

「大審院と検事局の大争ひ」……………六五

第一審では不起訴——検事から大審院に上告——該當する法文と其解説——宥恕にはならぬと検事の談話

九、投票焼却の一騒動

「世間への見せしめに重く罰せらる」……………六九

管理者選挙で前代未聞——焼却當時の模様真相——次の府議改選の前哨とも噂さる——如何なる法條に該當するか

一〇、土地收用に依る借地人の損害請求

「借地人の利益擁護の新判例」……………七四

道路改正に地所も家屋も取拂はれる——借地人にも各別に損害賠償——東京にも同様の實例があつた

一一、養子縁組後實子が生れて家内紛擾

「相続権は養子實子何れにあるか」……………七七

養子縁組を爲す要件に付て——實子が生れて養子の身上に不安起る——妊娠の時期と實際上の注意

一二、遊廓吉原で勘定事から大立廻り

「ブツタクリ放題の法外もない代金」……………八二

番頭に交渉愈々登樓——途方もない高い勘定に喫驚——評議の結果不當代金に異議——番頭の暴言借は交番に駆付ける——警官の裁きにやつと解決

一三、借金通れに財産を處分隠匿した債務者

「詐害行為で取消された實例」……………九一

家財道具其他の隠匿に債権者立腹——不動産處分に詐害行為としての訴へ——真相を正せば假想の賣買

一四、私を自由な體にして下さる

「涙ながらに裁判所へ訴へ出た藝者」……………九七

實父から六十圓で藝者に賣らる——養女に嫁がせて贅澤三昧——藝者の爲の養子縁組は效なし

一五、慾張の地主と温厚な隣の地主の争ひ

「境界きつちりに種々の建設」……………一〇一

雨水が流れたり糞臭紛々——勘忍袋の緒が切れて訴訟沙汰——法文には何とあるか其見解——最後の勝利と判断

一六、病弱で若隠居をしたい素封家の主人

「公務も十分に勤められぬ境遇」……………

一七、失業者が交番で査公と一口争

親父に代つて俸が一切の處理——法規の上から執るべき手續

「氣の毒にも留置場に勾留」……………

巡查の横暴に相手の頑抗——蚊軍と南京蟲に攻めらる——正式裁判の申立てに付て

一八、先取特權に馬鹿を見た債權者

「先取權で此方へよこせと配當要求」……………

信用で金を貸した者の權利は無い——先取特權にも一般と特別とある——先取特權が競合つた時——本件の場合配當を受ける順位

一九、金持老婆の遺産は誰に落ちたか

「奇篤な青年と好運の娘の結婚」……………

ケチン坊の考婆が孤獨生活の淋しさ——病床に藏した風呂敷に巨額の財寶——親族會で相続人に選ばれし福運娘——日頃老婆の愛せし武雄さん問題——美恵子嬢の婚殿に武雄さんの配合

二〇、運轉手を電柱に縛り自動車を奪ふ

「横濱に現はれた二人組の強盜」……………

暗がりに自動車と現金を奪はる——被害當時の狀況を語る——どの位の懲役を受けるか

二一、貸金も打棄てし置くと時効に罹る

「時効に罹る年限と罹らぬ算段」……………

賣掛代金請求の訴を起した——被告は何處迄も時効を楯に取る——時効で失權する債權の年限——時効に罹らぬ算段をする——時効で敗訴した一例

二二、前住者の電燈料滞納と現住者

「現住者は支拂ふ義務あるか」……………

むさしやの主人が社長以下を訴ふ——現住者に拂はせたり量器計算の胡麻化し——東電の所長の言ひ分は——聞かれよ著者の處信

二三、うば櫻が結納金を詐取

「華族の令嬢と稱して三萬圓を」……………

結婚しては間もなく姿を隠す——時に結婚媒介所も共謀——毒婦の處分と被害者の主張

二四、花合せの最中不意の夜嵐し

「何んな場合に有罪無罪か」……………
刑事に踏み込まれて珠數繋ぎ——身柄引請で一時出場を許さる——一人は其場を
逃走他は判決を言渡さる

二五、買戻しの特約と登記せなんだ失態

「地方の名望家が千慮の一失」……………
買戻す積りで低價に賣渡した——買戻しの口約はしたが立證に困つた——亡父の
したことで一向知らぬとの答辯——悪奸暴慾に罹り被告にしてやらる

二六、家主が變つても敷金は借家人へ

「當然請求権ありとの新判例」……………
新家主に返還の義務がある——舊家主との権利義務を承継する

二七、盗品又は遺失品と知らずに買った場合

「被害者遺失者から只取されるか」……………
金時計と金縁眼鏡と割安く買った——刑事の話に意外にも盗品と分つた——司法
主任に調べられ有の儘を陳述——法律上から見て何うなるものか——物を買ふに
も斯く注意せよ

二八、黒装束の村民が役場駐在所を襲撃

「公金不明から千葉在で騒動」……………
寺の鐘を亂打して村長宅へ侵入——犯行者を檢舉訊問——騒動の原因と村長の辯
——結果は如何に處罰されるか

二九、地所書入擔保で貸金の紛擾

「其地所を内證で他に賣渡し」……………
債権者と買受人との問答——登記をして置かなかつたのが大の失策——其代り刑
事問題として膺懲してやる

三〇、慾張者の死に絡る遺産のごたごた

「大運が轉がり込んだ放蕩息子長の長男」……………
弟妹にも遺産分配方を相續人へ交渉——親戚の主張に飽たらぬ長男の意地——法
律論と道義論との解釋——徳義の上からすれば平和の解決

〇三一、妊娠娘の親爺が相手に難題

「其癖數人の情夫を持つてゐた」……………
先づ名望家の俸を目指して——頑として自説を枉げぬ双方——執るべき法律上の
手續と子の始末——關係男片端から攻めて金を取る

三二、若後家の亂痴氣に親權の剝奪

「家産を危くし子の教育を缺く母の不仕鱈」……………一九六
亡夫を忘れ三百代言の情夫を持つ——情夫に唆されて家産危殆——斯る場合に法の保護見解——最後結末はどうなるか

三三、他人の畑地を通らねば自分の畑地に入れぬ

「一寸した不和から通り抜け拒絶」……………二〇三
飛んだ處で仇を打たれて面喰つた——話合で纏らず裁判沙汰——或る法律家の鑑定と處置——通行の主張が叶つた代りに損害賠償

三四、親爺の借金を伴が返す義務あるか

「現在の戸主と死んでしまつた前戸主」……………二〇七
多額の借金では子孫が浮ばれぬとの心配——法律は双方を保護して居る——跡相續をする方々の注意

三五、強盜を殺傷して何れも無罪

「一は日本刀で斬下げ一はピストルで射つ」……………二一一
渡り合ひ賊は斬られて昏倒——西洋料理店での賊の動靜——恒石師範が當時の模様を語る——裁判の結果罪は如何に——三人の賊にピストル發射——判檢事の檢

三六、血液による親子關係の確實を實證

「法醫學上の鑑定を判決に採用」……………二二二
第一審も控訴も被告の敗訴——第一審での被告が抗辯の數々——私の兒だと申出した男の言分——血液型と體質と精蟲の活動を認定——先きは見えたのと物好きな佐藤

三七、偽證を頼み頼まれて共々有罪

「人情で誤り易き此實例」……………二二六
證人は見た儘聞いた儘を陳述する——借金の世話から義務が絡つて——偽證罪と偽證教唆罪に落ちる——刑法の規定と其解釋

三八、注文の解約から問屋との争ひ

「荷送の發信後電報で断はり」……………二三〇
問屋では他店から買つて迄品を間に合はせた——注文した時と値に開きがある——裁判となつたら双方の主張點——民法には如何に規定しあるか——斯く判断するが正當

三九、借金の保證した許りに飛んだ災難

『家屋敷を競賣されて一家離散』……………二六六

ウカと口先に乗つて保証人となる——債務の不履行から保証人の財産差押へ——
連帯保証と聞いて喫驚——債権者は首尾能く回収して赤い舌

四〇、遺言證書は何うして作られるか

『遺言執行上の様々の心得方』……………二四二

遺言を爲す方法に付て——危篤に迫つて遺言する場合——遺言證書の檢認と執行
する人——遺言の取消を爲し得る場合

四一、忬の借金に親が辨償の義務あるか

『道樂の一人息子處々から莫大の借金』……………二四七

若旦那と持上られ有頂天となる——親父の名を利用して借金——高利貸が親父へ
催促の奇劇——親戚會議を開いて漸く落著——法律上から判斷する場合

四二、妻を離婚する數々の世相の夫れ

『實際の上起つた色々の原因』……………二六〇

三つの重なる出来ごと——家風に合はぬとの事で離婚——ヒステリーの嫁の離婚
騒ぎ——多辯で夫を侮辱し母を虐待する妻——離婚訴訟を起す場合の條件

四三、檢事が涙の論告に滿廷の人皆啜泣く

『白痴の妹を絞殺した村の模範青年』……………二六九

第一審の判決に檢事が控訴——控訴審での檢事は被告に大の同情——何れから見
ても適正の判決

四四、家出の道樂息子に扶養の義務あるか

『警察署から本人を引取れとの通知』……………二七三

異郷で大病内縁の妻が扶助——親族者が寄り集つての協議——扶養義務者と扶養
の順位——扶養義務の範圍に付て——最後の解決方法は是れ

四五、手附金だ内金だと双方の主張

損害に付て何れが勝つか……………二八一

手附金流れと手附倍返し——一方は内金だと抗争した——二者の相違と効果の判
断

四六、酒酔に乗じて亂暴したへボ記者へお灸

『其筋の嚴重處分に地民大喜び』……………二八五

交番の巡查をからかつて引張らる——悪口雜言の果は查公の脚を蹴る——二十九
日の勾留で見る影もなき衰弱

四七、家は競落したが地上権はどうなる

「前借地人も地主も貸地を断はる」……………三九〇
税金の滞納から遂に競賣——家は取壊はすか安く賣戻すか——法は何れを保護するか——新所有者の執るべき対策は

四八、賀川豊彦氏再び町長に當選

「有効か無効かの資格問題」……………三九六
民政政友の争に無産派介在——民政派の伊藤氏當選に反対——當選に對する資格上の争論——如何に法律上の解釋が正當か

四九、亡妻後遊女に迷ふた老戸主

「蕩産豫防に一族の心憂」……………三〇一
遊女を身請して妾宅に入浸り——準禁治産宣告の申立に及ぶ——準禁治産者となつた法律制裁——老戸主の最後と一族の努力

五〇、醫師の罰金二百圓が無罪

「業務上の過失致死事件の判例」……………三〇〇
血と涙ある判決言渡し——技術未熟の爲の内部裂傷——味ふべき無罪言渡しの理由——結末はどうなるか著者の見解

五一、コートから現はれた現金千圓

「女中を連れて大膽に稼ぎ廻はつた美人スリ」……………三二四
堂々たる門構への住宅——二十圓金貨二枚の出所から遂に自白——刑の定量と他との比較

五二、贈與と遺産の不公平な分配に一採め

「遺留分権利とはどんなものか」……………三二八
長男には僅かで他の弟妹に多い——遺留分に付ての規定の説明——遺留分を算定する方法——贈與遺贈の減殺と償還

五三、差押へられた品を處分した請負師

「結局は懲役刑に處せられる」……………三三四
警官の説諭でやつと納得——巧みに封印を剝いで衣類を持出す——公務執行妨害と横領罪が成立

五四、どうすれば天下晴れての夫婦になれるか

「男は家督相続人、一方は女戸主」……………三三八
傑作の美人畫から戀慕の情——同棲して子迄儲けたが故一つ——婿にはやれぬ嫁には行けぬ——斯く手續すれば公然の夫婦

五五、地主と小作人との争議起る

「一方は小作料滞納に一方は小作権消滅主張」……………三四

小作人の現状と地主の苦痛——無理難題に地主の決意——裁判沙汰と法の適用——無産黨や浮浪輩の教唆に乗る——地主の訴求と小作人の憐れな最

五六、兩親の意思に添はぬ夫婦契約

「家柄が違ふカフエー女給」……………三四二

添ふからには廢嫡も厭はぬ——死を堪しても夫婦の誓ひ——結婚を爲す手續條件は——一時的かうするがよい

五七、抵當物を賣つた人と貸貸した人

「債權者を苦しめる爲めの巧策から」……………三四七

抵當に入れた後に他に貸貸し——抵當物が勢ひ安くなる——抵當後に法律が許す貸貸期間——結局はどうしてどうなるか

五八、長男が行方不明で跡目相續に心配な家庭

「失踪宣言の申立の手續をする」……………三五三

永年生死不明の二つの實例——老親戸主の心配も察せられる——失踪者が生存してゐた場合

五九、職人風情の娘と戀に落ちた大家の息子

「違約した場合何うなるか」……………三五七

倅の長男に嫁擇びの兩親の苦心——情婦との熱情に飛んだ證文一札——叔父への自白とさばけた話——叔父の理詰に漸く悔悟決心——圓滿解決と法律見解

六〇、取得時効で所有地を奪はる

「後年經つて驚いて騒ぎ出し」……………三六八

祖父の代から他人の地所を占有——始めから自分の所有と信じて使用——訴訟の形式と法文の適用——何れが勝つか敗けるか此一點

六一、美貌と口前で淫賣婦に賣飛ばす

「性來怠け者の資産家の總領」……………三七三

散々に兩親親戚を困らす——若奥様の野望から男の爲に身賣り——惡計露見で女から續々告訴——彼は如何なる罪に處せられるか——親の慰安と武雄廢嫡

六二、獵師と船長の大失態

「誤つて人を死に致した此實例」……………三八〇

石地藏が倒れて赤ん坊壓殺——兩親の方は納まつたが罪の方は——蒸汽船が衝突して乗客の溺死

六三、近頃起り易き警察犯事故

「呉れくも注意して欲しい」……………三八五

處罰される重なる犯行——金錢強要と怪しい治療者

六四、相場が因で良人に迷惑を掛けた某夫人

「外國人の妾にだまされて借金の山」……………三八九

損の埋合せが段々深水に——吳服屋から反物を掻き上げて約手での借金——法律

問題としてどう解決されるか——良人が思ひ切つて最後の處置

六五、偽辯護士出廷の裁判遣直し

「空々しくも法廷に起つて辯論」……………三九七

片付けた七件は當然棄却——實在の辯護士の名をかたる——私文書偽造行使罪に

問はる

六六、歌舞伎座の見物席へ蛇投げ

「鹽田博士や婦人客の頭へ」……………四〇〇

舞臺の左團次は泰然最後迄——如何に處罰されるものか

六七、貞操問題で女に不利な判決

「慰藉料を請求出来ぬ」……………四〇五

法律手續で解決せんとする傾向——夫婦契約を反古として他の女と結婚——被告の
答辯と是非の見解

六八、一高生の母が颯田博士を訴ふ

「亂暴な手術から遂に息子を殺したと」……………四〇六

一萬五千餘圓の損害請求——颯田博士患者の症狀を語る——鑑定を俟つて是非の

判断

六九、小學兒童の墜死事件

「監督の任に當れる女教員の責任」……………四〇九

問題となつた過失致死罪——兩國署清水司法主任の談——起訴されたら教育界の

問題——掃除問題は校長の意思——責任の歸趨と講究すべき三燒點——不起訴と

した理由に付て——女教師の立場に同情

七〇、熱過ぎたお湯に浴場主敗訴

「小供を火傷で死なせた親から訴へ」……………四一九

二千圓の請求に四百圓を言渡し——湯槽に轉げ落ちてお陀佛——浴場の主人と浴

客への注意

七一、強制執行して我子を引取る

『母性愛の勝利』……………四三二

嫁は虐待に堪へず實家に逃げ歸る——實子引渡の訴訟でよしの勝訴——執達吏
同伴通學中の二兒を引取る——親權後見の權利は實母に在り

七二、町議院に事務員の報酬は違法

『衆議院議員選舉の場合と違ふ』……………四三六

藪蛇となつて共に有罪——事務員なるものは法律が認めぬ——著者の經驗に付て
只一言

七三、本場大島の椿油似物賣り

『だまされ易い彼等の扮装と口先』……………四三〇

巧みに銀行會社員の家庭に入り込む——憎むべき脅迫手段で賣付ける——被害者
は豫め御用心

七四、カキ澁の報い

『罰金四萬八千圓』……………四三二

仰天したもぐり酒商——正式裁判でも通るまい

七五、名士を顧問に多額の強請

『物凄いいん器をズラリ並べて』……………四三四

流れ込んだ家と因縁——麗々しき表看板と驚くべき内幕——監禁の上に亂打され
た被害者

七六、瓦斯漏洩に會社が責任を持つ

『ガス設備不完全による損害』……………四三七

瓦斯中毒で五名窒息假死——會社は損害賠償すべく敗訴す——法規の上から當然
の事だ

七七、手を觸れずとも損壊罪成立

『立入禁止を無頼の小作人に痛い訓令』……………四四〇

司法側の意見統一の必要から——地主は助かり横暴の小作人へコタレる

七八、迷信から我子の生贖を良人に飲ます

『良人を全快させたさに此鬼心』……………四四三

朝鮮人仲間にだまされる——罪惡の苛責に堪へず其筋へ自首——犯した者と教唆
した者の罪

七九、十數名の入夫に家財道具を投げ出さる

『借家人が敗訴した結果』……………四四五

執達吏立會の上立退と取壊し——妻の半狂亂と彌次馬の喧騒——法律上と人情上

八〇、足らぬ移轉補償金

から觀察して
「營業權の損害を認めらる」……………
履物問屋が市長を被告に——營業權利の價格に大誤算——之れでこそ權利擁護の
實擧る 四四八

八一、木製の盆にのせても洋食に變りないぞ

「名判決に恐れ入つた嵐山」……………
カフェト取締の珍劇——何故に處分されたか 四五二

八二、選舉應援の演説で違反

「利益利用で誘導と見らる」……………
控訴院で無罪檢事上告し——法規に照して正に違反 四五三

八三、色男を持つた恨みの放火

「一方保險金の請求で會社の敗訴」……………
彼女ば芝居から駈付けて泣きの涙——動産保險金請求の訴を起す——會社側の主
張と敗訴した譯 四五六

八四、南京チャボと愛犬の珍訴訟

「振つた慰藉料の請求」……………
被害者が却つて犬の飼主に突飛さる——理窟は双方に五分々々——著者の見解は
かうだ 四九九

八五、菁バスの大痛事

「預金を差押へらる」…………… 四六三

八六、二戸以上戸別訪問相成らぬ

第二審共會社側の敗訴——斯の如き事件の内容…………… 四六五

八七、人殺しをして自首した借家人

「殺されたは家屋管理人」……………
從來の見解を打破して——上告が理由になつてない——法文の解釋上當然 四六七
毎夜うなされて良心の苛責に堪へず——當にならぬ犯人の自白の数々——兩人の
關係と殺される前夜——被害者の妻の物語りと問罪

八八、震災の際に保險せし家屋の焼失

『東京と大阪とで違つた判決』……………四七三
關東大震災の時には——北但地震で會社が敗ける
の八九、白髮染が剝げて女二人卒倒

『浦島法廷ナンセンス』……………四七四
靈學士の美男に惚れ込んだ——亭主の知らぬ間に離婚届を出す——黒髮が白髮と
變つて吃驚仰天——今成の内縁の妻も惚氣たつぶり——二人は如何に罰せられる
か

九〇、支拂保證した小切手の責任
『誤解されぬが肝腎』……………四七六
振出す者と受取る者との内心——混み入つた此實例——原告の主張と判決の理由

目次終

小説よりも
面白
法律實話

總 說

注目警戒すべき現下の世相

世智辛い世の中 借も何とマ——世智辛い世の中ではあるまいか、例の歐洲大戦亂が禍ひして、世界的不景氣といふ風が吹き捲つた其上に、我日本では民政黨の濱口内閣によつて、金解禁を斷行した揚句、緊縮政策が我々の家庭や事業の上に迄も及ぼしたので、層一層不景氣となつてしまつた、さうなくとも我日本人は生殖力に於て世界に冠たりともいふべきで、ドシ／＼子供を産む、此驚くべき人口の激増は、勢ひ生活難を叫ばざるを得なくなつた、飯が喰へるか喰へぬかの破目に陥つて見れば、自然と人間が薄情になる、徳義なるものが輕視されて人情を缺くといふ結果になる、論より證據、近頃賣掛代金の不拂やら、家賃地代の不納は殆んど軒別にあるといつてもよい位、家主から滞納家賃は棒引にするから、何處へでも引越して呉れると要求すれば、借家人の言ひ分が面白い、「家賃を滞らして申譯がない、一日も早く他に引越したいと思ふが、困つた事には引越すだけの費用

注目警戒すべき現下の世相

が無い、だによつて此費用の都合が出来ると待たず、夫れとも待てぬと仰しやるなら、引越料の五十圓も貸して呉れる」

との反對の要求、之れには流石の家主も躊躇する、處で夫れはいかぬといへば、「ソソなら引越費用の出来るまで此家に居るより外はない」といつて、家賃を支拂はず其儘平氣の平左で頑張つて居るといつた風、幾月経つても家賃は取れず、他人の地所でも借りての貸家なら、地主の方からは遠慮なく地代の請求をされる、家賃は取れぬから地代の方は待つて呉れるといつた處で、地主の方では待つて呉れる譯もない、無理算段をしても支拂ふといふ鹽梅式である、併しさういふ正直な家主許りもない、家賃の方は嚴格に取立る一方には、地主に對しては「不景氣で家賃が全くあがらぬ」と嘘八百を並べ立て、地代を拂はぬ算段をしたり、乃至は地代の値下を強要する、詰り不徳にも地主を苦めて其間に己れの利益を計らうとする慾心に外ならない。

斯ういつたやうな事は敢て珍らしくないので、殆んど徳義人情を度外して、世を渡つて居る人間が世間にとの位多い事か知れぬ、これも矢張り生活難が斯くした結果で、此世智辛い世の中には、幾多の悲劇が其處彼處に演ぜられて居る、既に道徳では支配して行けなくなつて來た、爲に法の保護を受

け、一方には法の制裁を興へねば、解決が付かなくなつた此世相を見るにつけても、決して油断は禁物である。

頻々起る雜報記事

毎日出る新聞の雜報中に、耳新しい所謂珍妙な記事が掲載されてある、

夫れには民事事件もあれば刑事に關する事件もあり、然かも上下階級に涉つての事が、無遠慮にも書き立てられてあるので、讀者は興味を以て迎へて居ると同時に、一面には如何に世の中が變つて來たかといふこと、此事件は如何に結末が付くかといふ點に至大の注意を拂ふ事になる、詰り新聞の記事は處世の上によい参考ともなる譯で、又此手本によつて研究判断をする事は、手取り早くもあり且分り易くもある、併し研究し判断するにつけても、兎角法律の素養がなければ、果して此問題は何れに權利があり、義務があるか、或は罪となるかならぬか、如何にすれば有利に解決し得るか、これを一々其該當する法令に照し合せて、其上で始めて正確なる判断を試むることが出来ない、夫れには適格な指導教書の必要を痛感せざるを得ない、問題に當つたとき事件が勃發した其都度、辯護士の處へ駆け付けて、一々鑑定をして貰つたり、乃至は家庭に法律顧問を雇つて置くといふが如きことは、大資産家大事業者でもなければ到底不可能事といつても宜しい、さあ此不便を一掃する爲めに、本書が

出現に及んだ、然かも従來の法律書は如何とも説明がむづかしいのと、例示が片苦しく書かれてあるので、法律素養のない方が之れを讀むと、何となく苦痛を感じる、處が面白お可笑しく説いてあれば、自然と後を續けて讀破するといふ氣にもなる、従つて又記憶にも残る、元來が四角張つた肩の凝る様なゴツ／＼した法律書は、前の様な譯で勢ひ讀書研究する氣も起らねば、よし起つても中途で之れをやめてしまふ、そこへ持つて來て本書があれば、小説本を讀むよりは層一層面白く、讀んで居るうちにいつしか法律通になつてしまふ、況してや事實あつた事を土臺として、之れに詳細の説明を加へたもので、絶後とは言はれぬが、着眼點に於て空前奇抜な著書なることは、其内容全體に現はれて居る。

死せる學問活ける學問

机上の空論は役に立たぬ 何事も應用を專一とする當今の世の中に、机上の議論などして居られぬ、何處迄も役立つといふ事が肝腎であり、又萬人の要求する處である、専門的に法律學者にもなるといふ希望目的であるならばいざ知らず、さうでない限りは奥深く法律上の學理を論究する要

もなければ、又其餘暇もない代りに、日常の事柄に就て起り易く、若くは起りたる問題に對し、如何なる處置方法を執れば權利利益を擁護し、損害を未然に防止し得るか、之れを直ちに解得し且實行し得るだけの法律智識を求むるの心念は、何人も持つて居るに相違ない、又日進月歩の今日の時代に於て、其職業と地位を問はず、此點に無頓着であつたならば、決して自己の權利利益を主張擁護して、幸福を迎へる譯には行かない、徳義や人情にのみ依頼し難い世相に遭遇しては、勢ひ法の支配に俟つ外はないと同時に、どうあつても法律の一般的智識が吾人生活の上に、最も大切であることが首肯される、机上の空理空論は之れぞ死せる學問で、實際に當つて直ちに實行し得るものこそ、眞に活ける學問でなければならぬ。

他人事で我事を悟る 斯くの如く本書掲ぐる處のものは悉く之れ活ける學問である、一讀忽ち應用の出來る法律智識の指導書である、然かも本書は一々實例を問題として、これに對し解答を與へて居る、最近我國内に行はれた實際實例を掲げ、之れを面白可笑しく説いて行つた處は、俗に謂ふ事實小説である、さうして最後に法律上より見てどうするかといふ解決を下して居る、讀者は他人の出來事を読んで、儲己れが家庭に於て、又は取引先に對し、或は今後起るべく豫想し得る事柄に向つ

て、忽ち法律上の推理解釋が付く、他人事で我事を悟るの一大便宜を得るのである、之れが實に本書
獨得の長所であり、本書が普く世の歡迎を受けねばならぬ所以である。

失態を招ぐ動機は是れ

油断と慾眼から飛んだ間違 を起す例は乏しくない、何事も大事の前の小事で、兎角コンナ事
位はの積りで軽く見て居る結果、夫れが何時しか大事となる、殊に法律問題に於て然りで、日常の
事柄は一として之れ法律に關聯せざるはなしだ、其處にお氣が注かないのは、詰る處法律智識に乏し
いからで、いつも結果は法律問題になつてから、始めて騒ぎ出すといふ譯になる、若しも其時でも結
構な善後處置がつけばよいが、つかぬ場合は飛んだ馬鹿を見る、對手方の思ふ壺に嵌まつて、マンマ
と損をしましてまつたり、乃至は罪科に問はれて科料拘留罰金懲役なんかに處せられるといつたやうな、
意外の不名譽と苦痛を招ぐ場合も起る、して見ると油断は大敵である、さあ其油断をせぬやうに、豫
め本書を一讀して、法律の一般的智識を養つて置くのが肝要である。

色と慾との二つの邪道

兎角世の中を見渡す處、失敗事は色情と物慾の此邪道が導いて居る、

色戀の爲には盲目となり易いもので、従つて常識を失ふ事になる、男が女色に迷ふて父祖傳來の家屋
敷何から何迄も、蕩盡してしまふ至愚憫むべき實例も多々あれば、女は地位身分をも顧みず、詰らぬ
男に惚れ込んだ揚句の果は、終生苦界に沈淪する者もあれば、情死をする者もあるといつた風で、諸
君も豫て御承知の通り、伯爵の令嬢が自動車の手と戀仲となり、仕舞には父伯爵の忌諱に觸れて
其家を追ひ出され、件の運轉手と眼も當てられぬ悲惨な二階間借暮しをして居るといふ實例もある、
如何に「戀は格別」とか申す俚言あるとは言へ、之れも色情の爲に盲目となり、常識を失ふた結果、
飛んだ災難不幸を招致する、夫れも己れ一人の損失不幸だけで済む事なれば、身から出た錆とやらで
致方ないと諦められようが、往々色戀の闘争が嵩じて、人を殺傷し社會に害毒を與へるの悲劇を演ず
るに至つては、決して不問に附せられない、本書に紹介する幾多の實例、夫れによつて動機を知り得
べく、又其結果は如何に成り行くかも首肯し得らるゝと共に、お互ひが萬事に警戒を加へる事が出來
る。

次は物慾の事で、之れも人間としての八百八病のうちの一つとすれば夫れ迄だが、併し當人は其多
慾暴慾を戒めざるを得ない、俗に謂ふ慾深の爲に却つて損をしたり、國法を冒すやうな事が起る、凡

そ人として慾のない者はないにきまつて居るが、只吾人は暴慾の罪惡を憎むのである、暴慾の人は徳義も人情も思はない、時には己れの慾を満たさんが爲に、法網を潜つても尙慾望を達せんとする結果、却つて馬鹿を見たり不幸の境遇に立つ事がある、暴慾が一の動機となつて、恐るべく驚くべき結果を産み出す實例は、蓋し本書の上にも之れを發見するに苦しまない、して見ると本書は此邪道に入らぬ警戒燈であり、安全地帯であるといつても宜しい、斯の如く本書は獨り日常必要法令の説明によつて、法律通人たらしむるのみならず、廣く社會世相を研究知悉して、以て處世の秘道を解得せしむる處の、偉大な利便を提供する點に於て、他書と卓絶して居るのである。

本書によつて享受する幾多の利便

小説の材料と法律の材料 近頃小説書を読む人が大分に殖えて來た、併し小説の材料は多くは想像に過ぎぬのと、又一つには猥褻に類する事柄を何れも材料中に取り込んで居る、成程讀んで一寸は面白味を感じるが、そは一時的で讀者に取つて何等の利益を享受しない、却つて悪い事を教ゆるやうなものである、風教上より見て今日の小説本は悉く害があるといつても宜しい、處が本書の材

料は想像ではなくして残らず事實である、世間に現はれた出來事を材料として、之れを法律に照してどうなるかといふ點を説明してある、夫れが又讀んで小説よりも面白く、一として身の爲にならぬ事はない、殊に前にも述べた通り、人の一舉一動は悉く之れ法律行爲で、殊に日常生活の上からして、各自の利害損益に關係を及ぼすのである、従つて本書を讀んで居るうちに、知らず／＼に處世上己れの執るべき處置方法に付て、幾多の利益を發見する事が出来るのみか、一面には法律知識を涵養するを得て、何等の仕損じもないようになる、吾人は敢て法學の大先生となることをお勧めしない迄も、日常起り易い問題に付て、如何に之れを善處すべきか位の法律知識を有つて欲しい事を切望する、夫れに近頃は徳義によつて解決する事は至難となつて、何れも法律手段によつて解決せなければならぬやうな、世情となつて居るではないか、夫れを思ふといよ／＼益々法律素養の必要を感じざるを得ない、法律を知らぬ爲に詰らぬ事で、罰金や科料に處せられたり、さては二十九日の勾留を喰はせられたり、乃至は貸金家賃を踏み倒されたり、甚だしきは祖先傳來の家屋敷迄も、只で取られてしまふやうな馬鹿を見る者がある、後悔は先に立たずとやらで、其時になつては間に合はない、騒ぎ廻はつた上に三百代言や辯護士の厄介になつて、損の上塗をするといふのは何事か、之れ畢竟法律知識の

缺乏せる結果である、茲に於てか切に本書の一讀を勸説せねば止まぬ。

勸善懲惡の一大手本 殊に本書に掲げたるの實際問題に付て、裁判所は如何に判決を言渡したか、警察署では如何に之れを處分したか、著者は如何なる見解を持つて居るか、忽ちにして諒解する、兎角善を勸め惡を懲すといふのが文教の大本眼でなければならぬ、其處へ行くと今日の小説本の如きは何の役にも立たない、却つてよくない事を教ゆる事が多きに引換へ、本書は實に勸善懲惡の手本である、従つて本書により豫め不正事を抑制し、時に不法不當の行爲を豫防排斥する事が出来る、之れ本書が小説よりも面白くて、身の爲になるといふ點に於て、誇張する所以である。

尙本書の讀者に對しては、あらゆる法律上の問題に對し、無料を以て質問鑑定を求むるの特典を與へる、されば本書外に不明の點は遠慮なく質問せられるがよい、著者は喜んで親切に之れが應答を約する。

各 説

一 紳士風の男が車の乗逃げ

「詐欺の罪になるかならぬか」

丸の内の某會社の前の胴抜け

「オイ車や」といつて車夫を呼びつゝ横路からやつて来た役人風の男に、氣が付いた車夫は其男の傍に来て、何御用かと尋ねると、何處其處迄何程の賃銀で行くかとの話に、車夫は七十錢を頂戴したいと挨拶した、すると件の男は「宜しい、茲迄車を持つて來い」と命ずる、車夫は命ぜらるゝが儘に客を乗せて、一生懸命に駆け走りつゝ目的の場所に着いた、そこで車夫は件の車賃を請求に及ぶと、客は今細かいお金が無いから、其處の會社に行つて持つて來るによつて、暫らく待つて居れとのこと、車夫も信じて待つてゐるが、一時間餘り経つても音沙汰はない、情變だわいと思つて、會社の受附に

紳士風の男が車の乗逃げ

行つて、人相や風彩から、事の次第を詳しく物語ると、ソ、ソ、ソ、客は本社の誰にも面會を求めない、受附の者も變な客が来たと感じたが、本社をよく知つて居るかの如き挨拶振りをしたによつて、其儘尋ねもしなかつたが、其うちに奥に入つて裏口の方へ行つた様である、多分裏口から何處かへ逃げてしまつたのであらうとの話。

車夫も之れには驚いた、彼は彼れに一ぱい喰つたかと思ふと残念至極である、折角汗水垂らして一里以上も乗せて来て、車の乗り逃げとは酷い奴もあるものだ、早速最寄の交番所に此旨を届出ようといつて、其處を立つて棍棒を引すりながら、悄然として交番所の方へ行かれた、そして巡査に事の次第を訴へると、巡査は一々手帳に書きつけて、何れ犯人を捕へたら報らせるによつて、其時は警察署にやつて来いと、極めて親切に教へて呉れた。

被告にめぐり合つて警察沙汰

兎角悪い事は出来ないもので、四五日経つと其車夫が突然途上で件の客に出會つたから堪らない。「先日のお客待て、車の乗逃げ、今日は助けちや置かねいぞ、詐欺野郎」

と大聲あげて怒鳴つたので、

附近の彌次馬連が何事ならんと集つて来た、車夫は切りに車の乗逃げとか、詐欺野郎を連發するので、彌次馬連も切りに騒ぎ出した處へ、折柄巡行の巡査がやつて来る、何事かといつて車夫に尋ねると、之れ／＼然かじかと車の乗逃げ次第を述べると、兎も角兩人とも交番に来いといつて連れて行つた。

交番所で車夫の陳述に對し、車の乗逃げ客は抗辯する、其抗

紳士風の男が車の乗逃げ



辯の理由に、實は會社へ行けば友人もあるので、五十錢一圓の金は必ず借りられるによつて、此車夫の車に乗つて會社迄行つたが、折悪しく友人は出社しないので、止むなく其儘失敬してしまつたが、事情は前の如くだによつて、二三日待つて願ひたい、さすれば乾度車賃を支拂ふ故、夫れ迄車夫にも猶豫をと求めたが、車夫は今車賃を貰うか貰はぬかといふ問題でない、否さ七十錢位の車賃はいらネー、其代りコンナ悪い奴はどうか相當の處分をして載きたい、必らず他にも同様の悪い事をするに相違ない、將來のために又餘人の爲に臭い飯を喰はしてやりたいといつて容易に肯き入れなかつた、併し巡查も之を裁斷すべき權能を持つて居ないので、更に兩人を連行して所管警察署に赴き、上官なる署長に之を報告した、署長は司法主任に命じて双方對立の上で訊問を試みた結果は、詐欺の罪として事件を檢事局に送付した、裁判所は如何に之を裁斷するであらうか。

裁判所で被告の振つた無罪の抗辯

檢事局は矢張り之を詐欺の罪として起訴した、やがて公判は開かるゝ事となつた、型の如く取調べが終つて、檢事は詐欺の罪として四ヶ月の懲役に處するを至當とすべく求刑した、被告の辯護する處

は却々振つて居る。

「只今檢事は被告を詐欺の罪として求刑したが、何處に詐欺をしたか、刑法の第二百四十六條には人を欺罔して財物を騙取したる者は云々とあるが、成程被告は車屋を欺罔したと言はるゝかも知れぬが、被告は決して欺罔するの意思はない、被告は其會社の社員には何十圓の時賃しがある、被告が行つて會見すれば全額の金を返されずとも五圓十圓の金は乾度返済して呉れる、全く夫れを當にして車に乗つたのである、初めから車賃を倒すといふ意思で乗つたのではない、然らば全然惡意のなかつたといふ事實を立證し得られる、第二に被告は決して車屋の財物を騙取した覺えはない、只此方から車代を拂はぬ丈のことである、刑法には他人の財物を騙取したる者とある以上は、必らず現實的に他人即ち車屋の財物を騙取しなければ此罪は成立しない、車屋にやるものをやらぬ丈のことである、詐欺を以て論ずべきものでない、従つて無罪である」と辯駁した、一方檢事の方では懷中に一文も無くして人力車に乗るといふのは、若被告の言はるゝ如く、會社の友人が居らなかつたとき又は金が無くて返済せぬといふ場合には、車屋に如何にして車代を支拂うといふ積りであつたか、結局は拂はれぬ事になる、之をも豫想して車に乗つたものと見る

べく、而して又拂はれぬからには、乗逃げをする意思であつた事も推測される、次に被告は車賃を拂はぬだけで、車屋より財物を取つた覚えはないと主張するが、然らば車代は何によつて支拂ふものか、又車屋は何によつて車代を取るべき権利が発生したか、申す迄もなく労力の提供である、汗水を流して被告を車に乗せて走つた此努力は、即ち七十銭といふ財物に化したのではないか、被告は努力を財産と思はぬか、被告は賃金を渡す如く欺いて努力即ち財物を騙取したのである、故に詐欺ならずして何であるかといふのが主張の要點にあつた、果して何れの主張が正當であるか。

遂に有罪の判決を下さる

裁判官は被告の主張と検事の論告とを聴取したが、事實は明白なりで別に被告からも證人喚問の申立も無く、辯論も終つて後直ちに次の如く判決を言渡した。

「被告の所爲は刑法第二百四十六條に該當するものと認め三ヶ月の懲役に處す」

詰りは詐欺罪を以て論じたのである、判決理由は矢張り努力を騙取したもので、努力は民法上に於て之を財産と見る、刑法の精神は強ち金錢物件を被害者より現實的に騙取するのみを意味したのでなく、財物を廣義に解した譯である、詰り努力も一の財産権である以上、此權利を詐取したので、従つて詐欺の罪に問ふべきであるとの理由であつた、斯く言渡されて見れば何とも致方はない、せめて執行猶豫位にはなるかと思つたが、被告は相當の學問もあり常識に備つて居る、従つて一般警戒の爲にも刑の執行猶豫を與へぬといふ趣旨らしい、車夫も之を聞いて満足したといふ話

二 放火事件悲劇と喜劇

「一は聞く者悉く同情一は滿廷哄笑」

こは罰金僅か五十圓彼は懲役一年

此不況ドン底の世の中に、放火といへば必らず超過保険金を詐取せんが爲にするのが殆んど原則のやうに思はれる、自分の家なり近所に火を放つて、そして自家を焼失させて保険金を會社からマンマと取らうといふ恐るべき慾心を企てる、處が茲にはこれと全く別な放火事件で、最低五年から無期刑死刑迄ある放火の判決に、これはまた僅かに罰金五十圓といふ同情ある判決を言渡され、然も聞く者

をして、悉く同情の涙あらしめたといふ女の被告と、これとは反對に裁判長から検事傍聴人まで終始頭の外れる迄、哄笑せしめた托鉢僧の放火被告とか、近頃東京地方裁判所刑事第八部中野裁判長、黒田検事の前に同一法廷で珍らしき悲喜劇を展開した。

妻の心盡しに良人の藝者狂ひ

悲劇の主人公は白髪の混つた本郷根津八重垣町四三牛肉商關甚十郎の妻いそといふので、夫の甚十郎は一昨年十一月末大病に罹り、其際いそは懸命に看病した甲斐あつて快癒し、家内一同喜んでゐたのも束の間、妻の心盡しを當然のこのやうに考へた甚十郎は、かねて馴染の龜戸藝妓に狂ひ、毫も家庭を顧みなかつた。

長男の勲や、小學校で教鞭を採つて苦勞してゐる娘に對しても、申譯ないと考へたいそは、自殺する積りで昨年三月十五日午前零時過ぎ、自分の蒲團に揮發油を注いで端坐合掌したが、パツト火が燃え移るのを見て後悔し、慌てゝ消し止めたので事なきを得た。

母への同情から長男の自殺

長男の勲は母親の此思ひつめた様を見て、父のふしだらを何とかして改心させたいと願つた、同人は醫科大學まで入つたが、自分さへ犠牲になればと一途に思ひ餘つた揚句、遂に父のふしだらを憤慨し、母に對する同情から一通の遺書をして自殺してしまつた。

「生意氣な倅だ、死ねるなら死んで見ろ」
と剛情を張つてゐた因業な父甚十郎も、母の放火に懊惱の結果、餘りにも尊き犠牲となつた勲の死に直面しては、流石に翻然と悟らざるを得なかつた。

鬼の眼にも涙滿廷無量の感慨

去りながら妻いその犯した放火の罪は、其儘に葬むる譯には行かない、管轄警察署からは警官が來て現場を臨検し、被告始め關係人を夫々取調べて事件は閱見書類と共に検事局に送られた、やがて公判は開かれる、如何に鬼の如き検事でも事情を聞いて見れば同情禁じ難き事であるに相違ない、と

いつて法の明文を如何にせんで、いざ論告ののち、幸ひにも自己の物を焼却したに過ぎない場合の法條（刑法第百十條一年以下の懲役若しくは百圓以下の罰金）を適用して、懲役一年を求刑した、これに對し裁判長は更に僅かに五十圓の罰金を言渡したとは、如何にも同情ある此判決に、聞いて居つた被告始め血族の喜びと、傍聽人の感慨は無量であつた。

木賃ホテルで虐待されて感激

次に現はれた被告は、佛道を逆に歩んだ托鉢僧、青森縣は北津輕郡長橋村の土岐初太郎（四四）といふ者で、一寸憎めない程の尖端的ユーモア振りを發揮した話。

抑も同人は國を出てから何年目、昨年十一月二十五日午後六時通りついたので、神奈川県高座郡上溝町の木賃ホテル片野カネ方であつた、素寒貧の托鉢僧には大枚の金二十錢也を投じて宿を乞ふた、寒いので宿の娘に炭を二錢わけてくれといつた、處が娘は五錢以下は賣らぬといふ、夫れを大まけにまけてわけて貰つた、僅か二錢許りの炭故忽ち焚いてしまつたので、又も二錢分を要求したが、娘は此托鉢のズルイのを見抜いて、今度は少しやつた、すると彼れは隣りの人の分迄盗んで焚いた揚句に

「こゝの娘は怪しからん」と憤慨し、出かけに残つた炭火を二階三疊の布団にくるんで出て來た。

又もや托鉢僧怒つての弄火

其翌日府下南多摩郡原町田へ着いて、木賃宿の野村らく方へ泊めて呉れといつたが、「満員ですか」と断はれた、すると夫れを見た親切なバリカン屋が、自分の席を譲つてくれた——と思つた途端隙を狙つてゐたピツコが其空席を占領してしまつて動かない、托鉢僧怒るまいことか、僧侶を階下の出入口におくとは怪しからんと、憤慨はして見たものゝ仕方がない、其夜袋の中から一掴みの米を出して小さな鍋でお粥を煮て、その女中にしやもじを貸して呉れといつた、すると女中はどう思つたものか鍋の中へ入らぬやうな大きなしやもじを持つて來た、これで又もや憤慨、こゝの家でも出かけに炭火を布団の中へ包んで來たもので、くすぶつただけで發見、大事に至らずして消しとめた。

滿廷咲笑結局一年の懲役

彼方からも此方からも放火はあの托鉢僧であるといふ訴が出た、彼れは遂に捕はれて検事局送り

となつた、彼れは法廷で裁判長の間に對し、

「私は空いてゐる寺を見つけて庵主になり度いと思つてゐまして」

と述べ、放火の動機に付ては、

「あの時は二日も續けて運の悪いことばかり、何だかむしゃくしゃしてなりませんでした、何卒御寛大に」

とペコ／＼頭を下げる可笑しさに、滿廷哄笑、さしもの檢事も思はず破顔一笑、結局懲役一年を求刑された。

三 下宿屋の主人と下宿の學生との悶着

「下宿料の滞納から信書開封」

國許から書留郵便にほゝ笑む主人

或る神田の下宿屋に下宿して居る法學書生、月々國許からは相當の學費を送られながら、根が道樂

の青年のこととて、兎角カフエーや吉原なんかに行つて可惜學費を放蕩費にしてしまふ、夫れが爲に肝腎の下宿料が滞る、一月位の延滞ならまだしも三月も停滞たので、下宿屋の主人も黙つて居られない、折々法學生の室へ行つては頭を下げて下宿料の請求をする、然かも強く出た日には理屈やの玉子丈に食料が粗悪だとか、待遇が悪いとかいつて、却つて逆襲を喰ふ始末で、流石下宿屋の主人も頭を掻いて引き下る。

彼れ法學生が下宿料の支拂へぬ一つの理由としては、いつも都合があつて國許から送金が遅れると言ふが、其實は書留などで毎月一回は國許から手紙が着く、然るに送金しないと送金が遅れるとは虚偽も又甚だしい、夫れにしても變だわいと思つて居る矢先、郵便配達が突如「書留」といつて下宿の入口に這入つて來たので、早速主人が奥から出て來て、其書留郵便を本人に代つて受取つた、恰度此時本人の法學生は學校に行つて不在の際であつた。

信書を開披百圓の爲替を確む

下宿の主人心切かに考へた、あの下宿人はいつも國許から送金がないといふが、今日の書留郵便に

は確かに學費として爲替を送金して來たに相違あるまい、果してさうであるか否や、若し爲替が入つて居るとすれば金額はどの位か、念の爲にソツと開封して見ようと、計らずもよくない精神を起した恰度國許から送られた手紙の封表の絨個所が糊を以て十分に封緘して無かつたので、これは多く其個所を唾で管めて封じたものらしい、爲に他を損せずとも其儘難なく開封し得られた、開封して見ると中に百圓の爲替券があつて、更に親元からの文面を讀み下すと、病氣の模様であつたと送金もするから、十分に名醫によつて治療するがよい、此上下宿で療治が不便と思つたら病院に入院するがよい、入院費は特に家人を上京させると同時に持参さすといふ如何にも子を思ふ親の心情の深さが明かに記されてある、流石の下宿やの主人も感心した、之れ程に両親が心配して居るのに、病氣でもない彼れが病氣だと詐つて、多額の送金をさせて居るのに、其金でカフェー遊びや遊女買をする、其揚句は生命を繋ぐ下宿料を拂はぬとあつては不届千萬、彼れが學校から歸宿したら、此書留の手紙を届けると同時に、下宿料を嚴重に催促してやらんものと待ち構へてゐた。

斯る事とは露だも知らず、法學生も學校から歸宿すると、下宿屋の主人公、待つてゐたと許りに彼れの室に行つて、件の書留を差示すと同時に、どうか此の通り爲替が届いた以上は、下宿料を支拂つて貰ひたい、夫れ迄は手前が之れをお預り致しませう、あなた様の時間の都合を見計つて、御一所に郵便局に行つて爲替金を受取つて、是非共下宿料を頂戴したいと、嚴重な談判に流石の法學生もこれには暫し返事も出ななんだ。

戀に絡んで女中お花が秘密を打明し

だが其處は法律家の玉子文に、他人の信書を其儘讀んで本人に渡さぬといふのは誠に以て不都合極まる話、斯る不法の事は法律が許さぬによつて、一先右の信書は自分に渡すがよい、其代り爲替が入つて居れば今度こそは屹度下宿料を支拂ふ故、心配するには及ばぬと頗る穩便に話をしたが、下宿屋の主人肯かばこそ、いつも其手は喰はぬといつて其儘下宿生の室を出て、階下なる己が部屋に戻つて來た、後を見送つた法學生は、困つた下宿の親爺だ、第一に國許から着いた手紙を其儘握つて自分に渡さぬといふ不法には驚き入つてしまつた、併し何にせ下宿料の未拂分が恰度三分、自分に於ても深く責任を感じて居るが、徒らに弱い音を吐いては、下宿人待遇、食料改善を實行せしむる點に不利益であるによつて、若し如何に説き聞かしても件の信書を一先我手に渡さぬからは、横領

罪』を以て告訴してやるといつて、一つ驚かして見ようといふ氣も起つた、流石法學生丈に一切萬事法律上の主張の根據を得べく、其日は六法全書を繰りて研究おさ／＼怠りなかつたのも至笑千萬。處が意外にも茲に一大問題が突發した、それは下宿の主人が該信書を無斷に開封したといふ事實の第三者によつて立證された事である、第三者とは誰れあらう、其下宿屋の女中お花が主人の該信書を開封して精讀したこと、金壹百圓記入の爲替券が封入してある事を主人が獨語してゐたのを、窃かに隣り部屋で目撃してゐたのであつた、一體此お花は却々の美貌で、夫れ相當に文字を解して居り、夫れに下宿人の法學生も却々の好男子で、加之に氣前もよい處から、折々女中などにも御馳走や土産などといつての贈り物もするので、同じ下宿仲間の學生中でも一番評判がよかつた、殊に女中が感胃でも引いたと聞けば、藥でも買つてやるかとか、或は活動寫眞の入場無料切符なんかを呉れては彼等を喜ばせる、こんな事で彼等女中朋輩は何れも法學生の何々さんは親切だなぞといつて、切りに譽めそやしたものであつた、夫等から女中のお花さんもいつしか法學生に戀慕の情を起した、折さへあれば法學生の部屋に来ては、何にかにと話をしては氣を引いて見るが、未來は法學博士か大臣かと夢想する彼れ書生、下宿屋の女中と情を通じた結果、妻にするやうな事が出来たら、郷里の家柄にも

關係するし、同じ學生仲間に対しても巾が利かない位の事は承知して居る、だによつてお花さんの話を風に柳と聞き流して居る、お花さんに取つては益々悶々(もんもん)の情に堪へない、何とかして法學生さんの心を動かしてやらんものと思案を凝らして居る矢先、件の書留郵便問題が下宿の主人と法學生との間に勃發したので、此際使はれて居る主人には相済まぬが、日頃思ひ焦るる法學生の何々さんに味方したならば、定めて我意中を察して我思ひを宥るして呉れるであらう、よし此内通したことが主人に知れて、此下宿を追ひ出されたとしても、戀し男と一緒になれる機会に會ふならば、何を否む處があらうぞと、斯く決心した彼女は、或夜法學生の部屋に行つて、國許から貴方の處へ來られた書留郵便は、何日の何時頃此家の主人が窃と開封して讀んだ上に、百圓記入の爲替券が入つてゐたことを獨語したのを、隣室にて立聞した次第を打明けた、之れを聞いた法學生、満面朱を帯びて赫怒した、いよ／＼問題は大きくなつて來たのである。

下宿の書生が赫怒して談判の末は告訴

法學生は、コナ事を獨語した、『太い親爺だ、如何に下宿料の未拂があるからといつて、爲替入の

書状を渡さぬといふ不都合は恕し難い上に、信書の秘密を侵して居る、刑法の第三百三十三條に規定しある如く、故なく封緘したる信書を開披すれば、一年以下の懲役又は二百圓以下の罰金に處せられるのだ、然るを何たる事ぞ、此罪を敢て犯すに至つたとあるからは、到底此儘には済まされない、下宿料の未拂は單なる民事上の問題に過ぎぬ、彼れが我に對する行爲は以上の犯罪の外に刑法に所謂横領罪が成立する、彼れがよし爲替券入れの書状を我れに戻すとしても、尙前示の信書の秘密を侵したる罪は免かれべくもない、此上は下宿の親爺を我部屋に呼んで嚴しく談判を試みて見やう」と決心した彼れ法學書生、直ちに手を打つて女中を呼び付け、

「下宿の主人に用があるから早速來いと傳へよ、若し來なければ直ちに告訴するからとさう言へ」女中も聞いて喫驚仰天、何事かと早速二階を降りて主人の部屋に赴き、法學書生からの右の命令を傳へた、告訴と聞いて見れば黙つても居られない、法學書生の部屋に行くや否や、彼れ書生は下宿の主人を顧みて、爲替入の信書を早速我れに戻せ、戻さねば横領罪を以て直ちに警察署に告訴するぞ、夫れに其身は信書を開披して讀んだであらう、其證據もちやんとあがつて居る、之れも正に重大なる犯罪である、下宿料の未拂は否認せぬ代りに、以上の犯罪に對しては必らず刑務所にブチ込んで、奥

い飯を食はしてやるぞと大喝叱聲、下宿の主人も之を聞いて戦々競々、如何にして己れが信書の秘密を侵したといふ證據があるかと反抗したが、此方は證據がなくて堪まるものか、汝は百圓の爲替券が入つて居ること迄自らが獨語したではないか、壁に耳ありでちやんと知れる、汝が開封した事實は信書の封じ目を見しても分る、今直ぐに爲替券入り信書を竝へ出せよ、余は郵便局より現金を受取つた上で、下宿料も支拂ふてやるが、其代り汝が犯した罪に付ては、如何に始末をつけ如何に申し開きをするか、豫め覺悟せよと、諄々六法全書を繕いて條文を讀み聞かせ、法學者氣取りで犯罪を構成する旨を論破した。

元來頑迷な下宿屋の親爺の事とて、法學書生から彼程に説明されても、三文書生が何を言ふんだ位に思つて、却々其罪を謝すればこそ、只下宿料の未拂のみを口にし、コンナ事になつたのも貴方が下宿料を拂つて呉れぬからだと許り、其責任を轉嫁して容易に埒が明かない、然かも爲替は同行して郵便局に行つて受取るのではなければ、承知が出来ぬとあつて、何處迄も爲替券入りの手紙の引渡を拒むので、今はこれ迄と法學書生が其足で管轄警察署に赴き、横領並に信書秘密侵犯の告訴を提起した、司法主任が兩人を其室に呼んで對質訊問に及んで見ると、成程下宿料の未拂も學生としてはあ

る間敷き事だが、だといつて他人の信書を開封したり、爲替券を横領して渡さぬといふのは正に刑法上の犯罪である、下宿料のかたに爲替券を差押ふるなら、法律上正當の手續を経て爲すべきであるに、勝手に斯る所爲に出るのは不都合である、若し強ひて爲替券を渡さぬなら、此儘勾留に處し然る上で検事局に送致するがどうだと叱り飛ばされた、流石の頑固親爺もかくなつては致方はない、其場で早速爲替券入れの書状を差出した、司法主任は本人の希望によつて爲替券丈は引渡し、信書の方は別に信書の秘密を侵した事實に基く告訴あるによつて、此證據は暫し預つて置くといつて其儘手許に保管され、借兩人に向つて、

「本件は内輪に出来る事ならば、成るべく示談にした方が相互の利益ではあるまいか、若し示談が出来ればよし、さうでないとなれば事件を裁判所に送らねばならぬ、さうなると被告は罪の明白なる事なれば、到底無罪では濟さるまい、又告訴人も下宿料の未拂などは、學生として有るまじき事だによつて、早速支拂をするが得策である」

と懇々説諭を加へられた、そこで兩人は司法主任の情理ある中渡しに厚く禮を述べて、兎に角下宿に戻つて能く話し合つた上で、何分のお願に出るといつて兩人共一先づ下宿に引あげた。

告訴取下と未拂ひ宿料の帳消てけりが付く

早速告訴人の法學書生と、被告訴人の下宿屋の主人との間に交渉談判が開かれた、告訴人側は告訴を取上げる代りに未拂下宿料は、自分が信書の秘密を侵されたり、爲替券を横領された有形無形の損害賠償を相殺する事といふ條件を持ち出した、下宿の主人も之を承知せねば告訴は繼續されて、検事局に送られねばならぬ破目に陥るし、さりとて告訴人の主張通りに自分の下宿料帳消しも之れ以て苦痛である、苦痛ではあるが如何に考へ込んだとて、下宿料を取つたり告訴を取下げさせたりといふ自分のみ利益の主張は通されない、かうなつては告訴人の法學書生の方が鼻息が荒い、そこで告訴人側も下宿料全部の帳消しは餘りに氣の毒と思つたか、

「夫れではかうしやう、下宿料の幾分を支拂うこと、其額は自分の意思に任せること、夫れにて下宿料の請求権を消滅せしむること、之れが最大讓歩である、夫れでいやなら此儘告訴を繼續する」と最後の挨拶、下宿屋の主人も今は身から出た錆び、飛んだ事を仕出かしたと思つても後悔先きに立たずで、彼れの主張に屈伏して茲に示談は成立し、共に警察署に赴き司法主任の前に示談成立の旨

を陳述し、一方も告訴を取下げ、無事に本件の落着を見るに至つたが、之れも詰りは下宿屋の主人の輕率からで、下宿料を取りたさに眼前の慾に迷ふて、知らず／＼斯る罪を犯したのが身の失敗、コナ例は世間に能くある事として、下宿屋仲間への此評判が、一般警戒の種となつたさうである。

四 養子と實子との間に相續争ひ

「裁判沙汰となつて噂とりどり」

何處からも羨まる程大當りの婿殿

茲には其家の體面を思ふて明かに其氏名を紹介し難いが、地方で相當資産があり店も立派な商人の家庭に起つた此問題、抑も夫婦の間には四十何歳にもなるといふのに生憎子供がな、夫婦も諦めて他から適當の養子を貰つて、之れに相續をさせる覺悟で養子探しを始める、某得意先から極眞面目に働いて又至つて温順の申分ない養子があるによつて、貰つてはどうかとの話に、聞いた夫婦はそは何よりな話、一應本人にも會つて見たいし、又其親御にも會つて話もして見たいとの意嚮を漏した、

媒介人は早速これを先方に取次ぐと、そんなら何月何日が吉日でもあるによつて、當日會見をとのこ

とに、やがて其日に夫婦揃つて養子たるべき者の實家に赴いた。
養子の家も村内では相當の財産家と知られ、信用も聲望もあつた、本人にも會ひ兩親の意見や世間話を聞くと、成程と感服しないことはない、夫れに其親御夫婦は七人の子福者で、夫々相當の教育を施し、よい養子口でもあれば呉れてやるといふ考へを持つて居た矢先の事として、資産信用や血統迄も探つて見ると、貰ふ方も申分なき家庭とあつて、目出度茲に縁組が成立する段とはなつた、併し養子本人の兩親からは何等條件といつたやうな、野暮な問題は持出なんだにも拘はらず、却つて養父母たるべき者の方では養子の人物に惚れ込んだ。

『手前夫婦も一二年のうちには養子に嫁を貰ひ受ければ、店の方の財産權利は一切を養子の名義に書換へて、手前は隣りの隠宅に引移り副業の金貸の方でもやつて暮す積りです、夫れに身體も餘り丈夫でないによつて六十歳になつたら全くの隠居で戸主權も養子に譲り、氣樂に老後を送る積りですから、此事は特に本人は勿論親御さんにも篤と御承知を願ひたいのです』
とスツパリ明言して置いて、やがて養子縁組の式は舉げられ、伴は養家先に引取られた、何を申す

も根が伶俐の青年であり、學校から歸つて來ると父に従つて商賣の實習をやる、養子になつて養家の商ひに當つても何一つ抜目はない、夫れに商業學校は卒業して居るので教育は十分であり、加之に眞面目によく働いて、養父母には忠實に仕へる、恰度實父母の如き親しみを持つてゐた、養父母も非常に喜んで何事にも養子と相談をするといつたやうな、極めて圓滿な家庭を見たので、近所でも何々屋の養子は當つたものだ、養親も嘸満足したであらう、養子を貰ふならあゝいふ養子が欲しいものだといつては、到る處で評判されたのである。

實子が生れて養子への愛が薄らぐ

處が故に一つの問題が起つた、昔諺にも『月に村雲花には嵐』とやら、咲いた家庭にふと雲がかゝつたといふのは外ではない、其後造化の妙技か不思議にも養親夫婦の間には子供が生れた、夫婦になつて二十餘年も経つて始めて子を持つたといふのは、これが前申した如く造化の妙技でなくてはならない、實子を持つて見ると其愛も又格別である、一年二年と無事に成長して行く、やがて學齡に達し小學校に入學させると、どうも物覺がよい、俗に一を聞いて十を知る程の伶俐者、小學一年から中學

卒業迄級長でブツ通したといふ位、兩親も非常に喜んだが、更に其一面には並ならぬ愛慾が起つた、夫れは相續問題である、子なき爲に養子を貰つて、然かも其際に養子には嫁を貰つたら店の一切を譲ること、六十歳になつたら樂隠居して財産の大部分を譲ること迄も、養子の實親に公言した前もあり、さればといつて實子を分家させたり、他に養子にやつて、他人の子に家督を譲るといふのも忍びないといふ精神が起つた、一方養子の方でも實子が生れて見れば自分の將來の地位に不安を感じられて來て、毎々鬱々として仕事に勵む氣もなくなつた、既に嫁を貰つたにも拘はらず、養父は約束通り店の營業一切の權利だに養子に譲つて呉れない、そこで養子も一日暇を見て實家に赴き實親に相談して見ると、夫れでは實父の方から養父に約束の履行を催促して見る事にしやうとなつて、或日實父が養父に交渉に及ぶと、養父も最早昔時と打つて變つて容易に履行しやうとも挨拶しない、何れ考へての上でとのみの返事で徒らに日を送つて行く、そのうちに養父の方では養子を分家させて、實子に家督を譲るといふ決心を明かにした、養子及び其實家の方では約束が違ふからいかぬといつて抗議を述べ、此時は既に愛着の念は實子にのみ注がれて、養子には極めて情がなくなつてしまつた、養子も懸命に家業に精を出し大分に金も儲け、店の信用も倍加する位に稼いだが、養父が此先實子に家督を相續さ

せて、僅かの財産を養子に與へて分家さすとなつたのでは、養子の希望も全く水泡に歸してしまふ譯である、茲に於てか相互の感情は疎隔して、愈々相続争ひといふ事になつて、媒介人其他の仲裁人が努力も圓滿解決を見るに至らずして、相続問題が法廷といふあかるみに、突出される羽目に陥つたのである。

何れに相続の権利あるか

此問題の勝敗は何れに決するか、先づこれを判断するに先ちて、研究せねばならぬことは、養子に行つた際に養母は既に妊娠してゐたか否やといふ事實である、實際の處妊娠してゐても、月が早ければ、本人にも夫れが分らぬ事もあるが、妊娠して六月にも七月にもなれば明白に知れる、知れて見れば何も養子を貰ふ決心も起るまい、必らずや斯る事實が分らなかつたによつて、全く子を儲けられぬものと思つて養子を迎へたに相違ないと信ずる、又養子を貰つて三年も経つて實子が生れたからとて、此時は最早養子が實子と同様に養嗣子たる権利を獲得して居るので、養子に家督相続権ありと判決例がちやんと認めて居る、之れに反して養子を貰つた際に妊娠して居れば、胎兒は相続に關しては既に

生れたものと看做すとの規定が民法第九百六十八條に明白に規定してある、胎兒に此權利を與へ法律が之を保護して居る、されば此邊の事實の真相はどうであるか、之れが本件を解決する焦點となつて居る、今本件を察するに、養母は養子を迎へて三四年も経つてから、實子が生れたものと認め、然らば如何に實子が生れて可愛くとも、夫れは法律が實子に相続権を與へぬ、尤も戸籍面には實子として長男と記載される譯である。

本件に關して養子の方は戸籍面に如何に記載してあるかを念の爲に調べる必要があり、又前申す通りに養母の懐妊時期を調べる必要がある、其結果によつて何れに相続権があるかは自然と明瞭する、だが困つたことには養親は何でもかでも養子に相続させたい精神で、財産なんかを實子の名義に早くも書換へぬ限りはない、かふなると後日養子が相続しても財産を貰はれぬ場合が起る、相続人が三分の財産を貰つて分家する實子が七分の財産を取るやうな不公平な事が起りはしないか、否これが往々見受ける事實である、さうなると家督相続人の權利を害する、一體全體家督相続人は、遺留分として被相続人の財産の半額を受ける権利がある、併し此權利とても家督相続の際でなければ發生しない、故に養父が戸主權を譲らぬうちに、其財産を遣ひ果してしまつたら致方はない、養父は固定財産にし

置いては後日面倒だとあつて、一々賣却してしまつたり、夫れを抵當に金を借りて、其金を隠して置いて、後日實子に與へる事にする計略があるかも知れない、養子には假りに家督相続の権利があるとしても、養父が元氣で居る間は何ともしやうがない譯である、茲が即ち養子の弱身である、そこで隠居もしないうちに養父が實子名義に財産を書換へたり、又は公然と家財道具の多分を譲るような事があると、後日権利の實行に容易ならぬ問題否心配が起るによつて、若し養父は他に贈與でもする場合、遺留分として當然受くべき財産の半額に達する迄は之を保全する必要上贈與を減殺すべしと請求する事が出来る、だが民法の第千百三十二條には、贈與は相続開始の始前一年間に爲したものに限つて、相続財産の價額に算入すとあるによつて、三年も四年前に贈與したのでは相続財産の價額に算入されぬ事になる、さうなると假りに五年後に養父が家督を譲つた場合、實際の現有財産が一萬圓とすれば、若し養父が隠居面に其内五千圓を残して置くといつたら、相続人は異議は言はれぬ事になる、何となれば遺留分権利は財産の二分の一で半額となつて居る、處が三年前に實子に與れた分を加へると、養子の取り前は二萬圓にもなるといつたら、茲に大したくるひが生ずる、これは甚だ以て不都合で、結局相続人の遺留分権利を害する行爲なるが故に、例へ一年前の贈與でも又遺贈でも、之を

爲す當時の總財産の二分の一の一文になる迄、贈與遺贈を減殺する請求が出来るものと規定してある。之を要するに、本件は養子縁組とした時に養母が懐胎して居らず、二年も三年も経つて後に懐胎したものなら、既に養子は相続人たる権利を有して居るから養子の方が勝利と見るべきである、従つて實子たりとも次男として、分家なり何なりするが至當で、徒らに裁判で争ふとも結局其家の損失となる、コンナ事で裁判を續けて、身代を棒に振つた例も往々あること、注意して然るべきであらう。

五 大岡山と千住の醤油屋六人殺し

「稀代の殺人鬼が犯行の真相」

三人を絞殺して金品を奪ふ

大正十四年九月四日の朝から晩にかけて、市外大岡山女優中山歌子方で、己れの妻やすえの弟徹三と其妻中山ぬい並に養女の英子(九つ)を殺害した事件の真相に付ては、豫て歌子が溜め込んでいた銀行貯金と現金を奪はんと計畫した五味鐵雄の相棒は、後の千住醤油屋殺と共犯であつた田中を説い

大岡山と千住の醤油屋六人殺し

て同意させ、愈々四日に決行すべく中山方に赴き、先づぬいの頸の前後をしめ、ぬいが土間に倒れた上に五味が馬乗になつて強く絞めると息が絶えた、夫れから田中と兩人で雨戸を閉めて死體を押し入れた、一方田中は臺所の方で英子を絞め殺した、そして屍體をぬいと同じ所へ押込んだ。

すると九時半頃徹三は歸つて来た、彼れ兩人は素知らぬ風をして居たので、徹三もぬいと英子が殺されたとは夢にも知る筈はなし、先づ田中と話を始めた、すると此時こそ五味は後から手拭で徹三を絞めた、徹三は不意を打たれたので如何ともする術もなく、忽ち倒れると直ぐに息が絶えた、夫れから三人の死體を寝かせて蚊帳を吊り、強盗にやられたやうにして、家捜しをして二階で三菱銀行の一千圓の定期預金と「財産はぬいに譲つてくれ」と認めた歌子の遺言状を發見し、階下では六百圓の預金通帳と認印とを田中が見付け出し、茲で一仕事も済んだので彼等二人はかねて携へて来たウキスキーなどを飲んで二時間程夜の明けのを待ち、翌日の朝四時半頃中山宅を出た、夫れより品川で湯に入り朝飯をたべ、預金拂戻しの相談をして田中が眼鏡をかけて變装し、東京貯蓄目黒支店に行き五百二十圓を受取り、小川町迄来て半分づゝ分けた、彼は「中山方でどの位の金が取れるかと思つた」と裁判官の問に對し、五六萬圓は取れると思つてゐた、取れたら暮しが助かると思つた丈ですと答へ

た、彼は二週間程経つて中山方へ尋ね来て、

「犯人を早く捜してくれなくては困ると怒鳴つてやりました」

と白々しくも喋つたとは、其大膽不敵の行爲には驚かざるを得ない、其後其筋の搜索の結果は、此嫌疑者となつて豫審中獄死した田宮頼太郎は、世間でも正に之れが犯人に相違ないと思つてゐた處が、意外にも醤油屋殺しの犯人前記市外杉並町一四、自動車運轉手の五味鐵雄(三八)、市外本田町立石三〇三、之れも自動車運轉手の田中藤太(四三)の兩人であつたとは、愈々之れから醤油屋殺しの經過の段に移る。

前の失敗を取返すべく今度は山田に

彼れ凶悪其類を見ざる稀代の殺人鬼五味鐵雄は、太岡山で目算外れの失敗から、今度は五味が真正十三年十月から昭和二年二月迄、千住中組の俗に橋戸といふ所に住んでゐて、然かも其長屋は醤油屋の山田角三郎が所有であつた、ソナ工合で山田から彼の父がなくなつたとき、百三十圓といふ借金もした事があり、夫に折々出入してゐたので、山田が裕福に暮しをしてゐた事も知つてゐたので、山

田の財産を強奪する悪心を起した、殊に大岡山事件が失敗してからは、つまり金が思つた程になく、田中に對しても氣の毒でならなかつたので、今一度大きな仕事をしようと考えた末、山田に白羽の矢を立てたことも首肯される、そこで昭和三年七月盆頃であつた、その頃都タクシーに居た田中と濱町公園へ一緒に行き、計畫を打明けると、田中は餘り氣乗りしてゐなかつたが、八月月上旬田中と二人で山田の家の前を通つて夫れとなく様子を見た、處が田中は此時も『近所の家が近すぎる』といつて反對した、それで山田を誘ひ出して、田中の家へ連れて行き、そこで殺さうといふと、田中は最初、『夫れは困る』と反對したが、結局は同意した。

山田を連れ出して遂に絞殺す

さあ山田を誘ひ出すには一工夫をせねばならぬ、そこで彼れには豫てから借金がある、此借金を返すといふ偽手紙を出したが、どうも其時はうまく連れ出せなかつたので、更に第二回目の計畫として、兇行前日の八月十八日五味は田中と會見して、『今度は手紙でなくて直接誘ひ出しをかけよう』と相談一決、其夜山田方を訪ね、階下の居間で山田夫婦に會見し、

『自分に金主がついた、この人(田中)が拂つてくれるから、十九日午後四時押上驛へ行かう』

と約束した、同日三時頃押上驛で待合はしてゐると、山田は四時頃やつて來たので、一緒に電車に乗り本町字立石三〇三なる田中の家へ連れ込んだ、田中の家では四疊半の部屋で、山田と對談し山田は證文など出して全く油断してゐた、すると田中は突然五味を呼び出して、

『どうも面白くないから俺はやめる』

といひ出した、田中の眞意が分らなかつたが、とにかく殺してしまへば何とかなるだらうと思つたので、夫れから部屋に入ると同時に、山田の後から手拭で頸を絞めた、山田は伏したので馬乗りになつて絞めながら田中に、

『早く玄關の方をよくしめてくれ、こつちは大丈夫だ』

といつたが山田は絞められた時鼻から大變出血したので、田中は雑巾で疊の血を拭かうとしたと、五味は裁判長の前で平然として語つた。

引返して更に妻と小僧を絞め殺す

次で死體の跡始末に入る、五味は田中を促して行李を出させ、兇行に使つた手拭は證據になるからといつて、これを取り去り、所持品五圓入り墓口と電車回数券、銀側時計を奪つてから、田中と二人して行李に詰め、其上を毛布に包んで十文字に結び運び出し、表の藪中へ捨て後片付をしてから、田中の家へ歸り二人で酒を飲みながら、之れから山田の家へ行つて細君を殺して金を取らうと話し合つた、これは豫ての計畫なので、田中は今更いやとは言ひかねてゐた、さうかうしてゐる間に田中の妻子が歸つて来たので、一寸用が出来たからといつて立ち出た、先づ雷門で仕専用の手拭二本を買ひ、田中は別にサラシを一丈と足袋を買つた、サラシの方はわけが分らなかつたが、足袋は兇行後足袋のあとをやたらにつけて犯跡を晦まさうとした計畫であつたと答へる。

かくて途中兇行に用ひた手拭や墓口を捨て、同夜十時頃山田の家へ行つた、そこで妻君に向ひ、「今日四時まで押上に待つてゐたが来ない、どうしたか」といつて家へ入つた、細君は非常に心配し出したので、「馬橋の家（五味の住居）へ行つたかも知れぬから、電話をかけて見やう」として三人して自働電話をかけ、田中が臨機應變にかけた振りして、「山田は暫らく待つてゐたが九時頃歸つたといつた」

と告げたので、細君は安心して家へ歸つた、實は電話などかけなかつたのである、いよ／＼山田の家へ上り込んでみると、そこに思ひがけなく十五六の小僧がゐたので、これは大變だ、無論これも片つけなくてはなるまいと決心した、間もなく小僧は二階へ上つて寝たので、三十分ほど雑談の後、自分（五味）は便所へ行き、その歸りに手を拭きながら細君の後へ廻つて、不意に其頸を絞めた、すると一分位で絶命した、其間に田中は玄關をしめに行つた、夫れから二階へ小僧を殺しに上つて行つた、後日發覺の恐れがあるので、可哀さうだが止むを得なかつた、二階は眞闇だつたので、電氣をつけて見ると、小僧は蚊帳を釣つて寝てゐたので、起すと小僧が寝ぼけ眼で龜の子のやうに首をあげた所を手拭で絞めると、一二分小僧は絶命したので、田中と共に押入れに入れ、次で階下八疊の間に死んでゐる細君を隣室の押入れに入れて上から蒲團をかけた、夫れから家探しをして、用ダンスや机茶ダンスといろ／＼調べた、金はアチコチから集めて結局四十圓程しかなく、女持時計ニッケル懐中時計を奪つたが、肝腎の銀行の預金通帳はなく、其うちに夜があげたので午前五時頃同家を立ち去つた、仕入れて行つた足袋は殆んど用を爲さず終へ、兩名の間に往復した手紙は全部捜し出して持ち歸つたと述べ、

「二三萬とる積りだつたのが、こんな端した金しか取れず、大失敗しましたよ」と裁判長を仰ぎ見て、如何にも残念さうな身振を示す、満延只五味の不敵な態度に驚きあきれる許りであつた。

夜釣に化けて屍體を放水路に

山田の家を出る時は田中と別々に分け、千住大橋で落合ひ、吉原へ行つて朝飯をくつたが、あんまり癪にさはるので、其足で洲崎遊廓で晝遊びをして、取つた金は全部使ひ果して分れた、品物は自分が銀側時計を後は田中にやつた、山田の死體は片づけが残つて居るが、夫れは翌二十一日鰻の夜釣りをやるから、十二時頃になつたら田中に出て来いといつてやつた、死體は舟で海に沈める積りで、當日夕方から舟を借りて田中の家の前へ行つて釣つてゐると、十二時頃田中が出て来たので、行李を運び込み、海迄持つて行く積りだつたが、臭氣甚だしく海迄は持つて行けぬので、荒川放水路の合流點に捨てた、行李は沈むと思つたのに沈まない、然し面倒だつたので其儘にして置いた、死體は直ぐに發見されるであらうが、發見されたとして誰のしわざかがわかるまでには、なか／＼容易なことではあ

るまいと多寡をく／＼つてゐたが、一週間後に檢査されてしまつたから考へて見ると、これより先き友人の細谷貫一の妻に、
「僕は一寸した事である嫌疑を受けるかも知れぬ、さうしたら十九日は自宅へ泊つて居たといつてくれ」
といつたが、これは失敗のもとだつたと述懐し、奪つた懐中時計は淀橋の質屋へ入れたと述べ、之れで五味に對する審理は終つた。

大岡山と千住の醤油屋六人殺し



相被告田中の取調べ

五味の取調べが済んで、今度は田中の取調べになつたが、矢張り五味の陳述を認められた形であつた、如何に金が欲しいからとて、人六人迄も殺すといふいと惨忍極まる行爲を敢てし、然かも五味の如きは人を殺すのを何とも思つてゐないこと、否寧ろ數に於て餘りに少なかつたのを残念として居る如き陳述をば、白々しく爲すに至つては、一點の情狀酌量すべき所はない、裁判長は果して如何に判決を下されたか。

證據調べと五味辯護士間の問答

三月廿五日(昭和六年)東京地方裁判所陪審二號法廷で、刑事第一部小林裁判長、酒巻検事係、佐々木(亮)、小野(賢一)兩辯護士立會で開廷された、此日は午前九時半迄に既に二百五十枚の傍聽券は奪ひ合ひで消えてしまつたといふ人氣、やがて裁判長から一應證據品を示される毎に、五味ははつきり「左様です」と答へ、田中は無言でうなづいてゐる、これでも兩人の性格がはつきり現はれて面白い、

證據調べが終つてから兩辯護士と五味との間に問答があつた、五味の答は如何にも大膽不敵で、「死刑などは恐れてゐない、隠すだけ隠し、判ればまゝよと思つてゐた」とか、「死といふものはそんなに苦しいものぢやない、殺されたものだつて考へる程苦しんではゐない」とか「生死は絶對である、誰を恨むところはない、だから死んだ人に對しては何とも思つてゐないが、自分故に困つてる田中や妻子には氣の毒と思つて、田中は何とかして生かしたい」といつた風に、何處迄も獲度胸が据つてゐる、彼は死刑の免かれぬ處と觀念してか、刑務所にいつ迄も居るのが嫌で、早く死にたいと答へた。彼れが犯罪の動機は、大正九年今の乗合自動車が東京市街自動車と言つたとき、ストライキが起り、遂に彼れは首になつた、其結果燒葬になつたと、不満を堂々とまくし立てたとか。

峻烈を極めた検事の論告

午前十一時いよ／＼検事の論告に入つた、然かも極めて峻烈で、毫も同情の餘地なしと斷じた。

「五味田中兩被告に關する本件は大岡山女優中山歌子方三人殺しと、千住醬油商山田角三郎一家三人殺しの二つに分類する事が出来る、大岡山事件には田宮頼太郎が豫審中刑務所で死亡してゐるが、

後に至つて五味、田中が眞犯人である事が判明して、田官の爲に氣の毒である、兩事件とも證據品、證人並に兩被告の當公判廷等の自白によつて、眞犯人である事は一點の疑ふ餘地はない』
次いで一轉情狀論に入り、

「本件犯人は五味が主犯で田中は従犯ではあるが、田中がなければ五味も敢て此の兇行を執行し得なかつたものである、例へば能樂といへばシテが五味でワキ役は田中であらう、何れがなくても演じられないものである、又法律上から申しても共謀で行つたもので、何れが重く何れが輕いとは云へない兩名とも五分五分である、本件は實に惨忍を極め且計畫的に殺人強盜を働いたもので、安寧秩序の保持、正義觀若くは人道前から目しても、毫も考慮の餘地なく、極刑を科し、刑法第二百四十一條に則して、兩名共死刑に處すべきが至當である」
と堂々四十分に亘つて論告求刑したが、其間豫て期してゐた五味は泰然自若として、眉一つ動かさず、田中はサツト顔面蒼白となつてしまつた。

辯護と五味最後の大見得

終つて辯護士の辯論に入る、先づ小野辯護士は、
「被告五味は如何にも惨忍性の如く目されてゐるが、被告自身の大悟と一方犯行に對する責任感から見れば、その點、寧ろ立派なものである、檢事の立場から論ずれば、勿論論告通りであらうが、辯護士の立場からいへば、如何に其の犯行が惨忍でも、舊幕時代の遺物ともいふべき死刑を廢すべきだ」

と死刑廢止論を眞向に振りかざして、無期懲役を主張し、田中の辯護人佐々木辯護士は起つて、五味田中兩被告の性格論から、大岡山事件の眞犯人として獄死した田官頼太郎を引き出し、警察當局の捜査失態を痛論した後、

「檢事の「田中なかりせば、五味はかゝる犯行をしなかつたであらう」といふ論告を駁し、「五味なかりせば田中はかゝる犯行をしなかつた」と論じ、田中は誠に悪き運命の下に生れたものである、薄志弱行の田中は利を以て誘はるゝまゝにかゝる大罪を犯すに至つた」
と、刑の輕重に五味と田中とを區分すべきだと強調した後、裁判長は兩被告を立たせ、「何か言ひ残す事はないか」と問ふと、五味は、

「私の死刑は寧ろ安いと思ふが、田中はどこ迄も手傳ひで、同罪にするのは酷だと思ふ、智識階級には懐ろ手をして大泥棒をしながら、無罪又は執行猶豫になつてゐるものがある」と豪語した後、裁判長から判決は追つて言渡すと宣し、午後一時半閉廷した。

死刑を言渡されて即時執行を希望す

四月二十日はいよいよ判決言渡の當日となつた、小林裁判長は酒巻検事の求刑通り、五味田中の兩被告に對し、死刑を言渡した、飽く迄不敵の五味は判決後、

「私のみは即時執行を願ひます」

と申出たので、裁判長は「まあ一週間の控訴期間があるから考へるがよい」となだめると、五味は、「大體日本の裁判は遅くなつて困る、私も昭和三年から足かけ四年もかゝつてゐる、コンナ状態では國家的大損害である」

と捨てせりふを残して退廷した、此日裁判所は判決日を公示せず、出し抜けて判決を言渡した爲め、傍聴者は非常に少なかつたのを、五味は淋し氣に見廻はした、然して五味は第一審の此判決に服従し

て控訴は勿論せなんだが、田中丈は控訴に及んだ。

五味の感想と田中の最後観

之れより先五味は死刑の求刑後、係り小野辯護士に宛て、左の如き感想を寄せた。

「前略 凡そ人の一生程複雑なそして不可解なものはありません、人は或程度まで運命に支配されるのは事實であります、人はこの世に生れて各々その因縁を果し終つて、あの世に歸るのも事實である、であるから生死は絶對なものである、その意味に於て被害者の人々も又自分も同じ運命に倒れるのも、皆自然の法則だと考へます、その意味で自分の犯した事は何んとも思つてゐませんし、又人々の様に罪を悔悟する様な氣にはなれません、しかし現在自分のために苦勞してゐる人々に對しては、誠に申譯はないと思つてをります。

田中に對してはどうか一命だけは助けたいと存じます、私は大正九年八月に東京市街自動車に運轉手を解雇されてから、以來常に社會問題を考へる様になりました云々」以下略

殺人五味の惨忍極まる犯行に對しては、死刑は勿論である、然かも悔ひ知らぬ彼れは實に憎さも憎

しといはざるを得ない、只田中の控訴に付てはどうか、或點から見れば、情狀酌量すべきものがあるが、こは五味との比較論で、大岡山の女優中山歌子方に於ける養女英子を自ら手を下して絞殺した點と、山田一家三人を絞殺するに當つて、よし五味が手を出したにせよ、共同正犯たるに於ては何等不思議はない、従つて檢事が兩人に死刑を求刑したのも茲に存する、詰り一二審判決通り田中も死刑は免かれぬものと見るが正當の解釋である。

六 剛情な金貸の手代が御腰を据える

「退去せぬので妻女が交番へ訴へ」

家宅侵入罪にならぬか

或日のこと、金貸の手代が債務者の宅へ貸金の請求に出かけた、處が債務者本人は不在の爲めに、其妻女は右の次第を告げて主人が在宅の時に來て呉れよと斷はつた、すると手代は今日許りでない今迄に三度も請求に來て居るのに、いつも不在で折悪しく面會が出来ない、手前共は遠方ではあるし、

さう頻々とやつても來られないによつて、主人の歸宅する迄此所でお待ち申すといつて、御腰を据えてしまつた、妻女も之れには閉口したが、併しいつ主人が歸宅するかわからない、夫れを歸つて來る迄待つて居るといつて頑張られた日には、仕事をすることも邪魔で困る、夫れ故さう頑張つて居られては迷惑だによつて、一先退去して呉れると請求した、然るに彼れ手代はなか／＼以て肯かばこそ、無言の儘に坐敷の中央に坐つて、ブカ／＼煙草を喫つては、

「金を借る時は決して期限には違約せずにお返し申すと誓つたにも拘はらず、今となつては此違約、利子も入れねは勿論元金も拂はない、コンナ鹽梅ではいつ返済して呉れるか分らぬによつて、今日こそは主人の確答ある迄例へ夜があけても、歸られる迄お待ち申さう」

との挨拶、妻女も聞いて赫とした、永く迄も此處に居られては困るといふのに、夜のあける迄も居ると頑張られては黙つて居られぬ、此上は交番所に訴へて退去して貰ふ外に途はないとあつて、早速裏口から出て交番所に駆け付けた。

交番ての問答に花が咲き

交番所に着くや否や、見張つてゐた警官に一揖し、件の事實を陳述して、どうか高利貸の手代を退去させて戴きたいと嘆願に及んだ、警官も聞いて其儘放つては置けない、彼れ妻女と共に妻女の宅に行つて金貨の手代に會ふた。

「一體其方は貸金の催促に來たのであらうが、主人は今不在で、いつ何時歸宅するか知れぬによつて、一先退去して呉れると妻女からの申出であるのに、何故に退去しないか」と言はれた時、手代はさも傲然たる態度で次の如く述べた。

「手前は主人の代理で何回此家へ参つたか知れませんが、其度毎に今日は用があつてたつた今外出して、いつ歸るか分らないとか、乃至は主人が宅に居られれば、今日都合が悪いから明後日は他から入る金があるので、乾度お返済し申しますとかいはれるが、いつも要領を得ないので、手前は宅へ戻つて主人には又も小供の使ひかと叱られます、何も手前とても人様の宅に主人の歸られる迄ぼんやりと待つて居たくはないが、お貸し申した金を返済して貰ひたい許りに、遅く迄も頑張つて居る譯です、お神さんでは用が足りません故、主人の歸る迄は何といつても退去する譯には参りませんので」

と答へた、成程無断で人の家宅に入つた譯でもないが、併し一旦退去して呉れると要求したら、退去すべき義務があるではないかと、怒々警官が注意したけれども、一向に肯き入れない、手前に取つては主人が大事で、主人の命令を果さんければ自分の飯の喰ひあげだといつて應ぜぬので、之れには警官も當惑した。

歸宅した主人公交番指して駈付ける

兎角するうちに主人は宅に戻つて來た、先づ家人から高利貸の手代の話を聞いて、夫れは不都合な奴だ、成程借金したのは相違ないが、之れ正に高利の金、其上に返済期間が遅るれば、更に手数料何程を拂へ、さうなければ直ちに家財道具を差押へるとおどかす、其冷酷なるには驚かざるを得ない、餘りといへば餘りに憎い高利貸、之れが感情づくともなつて、返済さうと思つても返済す氣にならぬ、其上自分の不在中にやつて來ては家内を脅かして返金を迫るなど、不都合も亦甚だしい、此上は「家宅侵入の告訴」を正式に爲すといつて、其足で交番所指して一目散に駈け出した。やがて交番所に着くと、件の手代と妻女が交番に口争して居るので、彼れは警官に一禮し、自分は

何々高利貸の債務者であることから、一份四什を陳述に及んで、妻女の陳述を補足した、警官の前では猫の如くおとなしい手代も、債務者の宅へ来た際には債権者風を吹かして切りに威張り散らす、僅かの金を借りて高利に手数料は天引され、期限に金が返へせないからとて、更に手数料を取られたり、加之に彼れが来る度毎に何にかにと馳走迄して歸す、丸で人の血を吸ふ高利貸奴、かふなつたからには此場で家宅侵入の告訴を致すといつて警官に訴へ出た。

罪になるかならぬか法の解釋

果して家宅侵入罪となるかどうか、近頃の大審院の判決例では、相當の用があつて人の家に入つたとて夫れは家宅侵入罪とはならぬとしてある、だが、よし相當の用があらうとも、一旦退去を申出たからには、前にも警官に説諭された如くに、同時に其處に居る權利はなくなつてしまつた、況して主人の歸宅する迄夜があけても、其處に頑張つて居ると主張するからには、之れ正に家宅侵入罪は構成する、家宅侵入の罪を論ずるは、家庭の安寧秩序を害する所以に基くので、刑法には、

第三百十條 故ナク人ノ住居又ハ人ノ看守スル邸宅、建造物若クハ艦船ニ侵入シ又ハ要求ヲ受ケテ

其場所ヨリ退去セサル者ハ三年以下ノ懲役又ハ五十圓以下ノ罰金ニ處ス

と規定してある、故なくとは權利なくしてと解すべく、例へ貸金の催促といふ權利があつても、既に妻女から退去を迫つたにも拘はらず、退去せぬとあらば、退去請求と同時に彼は其處に留まるの權利はない、處で斯る事件に對しては、警察署へでも訴へて出ると、事情によつては十日とか二十五日の勾留處分位で済まされる事もあり、又検事局へ行つても不起訴處分となる事もあるが、其處は其時の被告の犯意の状態で、酌量される事もあるが、刑法を眞正面から解釋すると、正に家宅侵入の罪が成立する譯である、従つて彼れ高利貸の手代は以上の理由によつて、相當處分されたものと思はれる。

論より證據此の最近の判例

何よりの證據として次の如き判決例が公示された、岡山縣兒島郡八濱町の繩手慎三郎、鳩谷長吉、山本九平治の三名が、同町長逸見靜雄氏から告訴され、住居侵入に問はれた事件が、大審院中西裁判長、南部檢事係で審理中、「何人の承諾を受けても建物内に居る管理者が、退去を命じた場合は夫れ

止めを刺された會社荒しの惡重役

に應ぜざるときは、住居侵入となる」といふのである。

此事件は町會閉會後、役場事務室に止まつた居る被告三名をば、翌日午前零時頃逸見町長が發見して、早速退去を命じた處、彼等は書記の許しを得て居るといつて、遂に之れに應じなかつた。町長も止むなく告訴に及んだのである、役場の如き處であつてすらもさうであるのに、況して普通の住家に置いては尙更のことで、家庭の安寧秩序を維持する上に於ても、一旦退去を迫つた以上之に應じない場合は、住居侵入の罪の成立するは論を俟たない。

七 止めを刺された會社荒しの惡重役

「代行者外の登記申請は受理罷りならぬ」

登記所に假處分とは

近年惡重役がプロカーなど、結託して、會社を食つてしまふことはよくあることで、株主の被害迷惑は一方でないが、これは畢竟登記手續の不備からで、いつ迄經つても此弊害は除かれず、徒らに惡

人の跋扈を許してゐた形であつた、處が昭和六年の二月十日東京地方裁判所では、英斷を以て登記所に對し假處分の形式で決定を與へ、惡重役に乘ずる隙を與へないやうにしたとは、翌日の東京日々新聞が報導して居る。

惡重役が頻々重役變更の登記

そは外ではない、是迄株主が惡重役を排斥する場合は、其重役に對して職務停止の假處分をかけ、裁判所から職務代行者を選んで貰ひ、其代行者が改めて株主總會を開き、正式に惡重役解任の決議をするのだが、現行の規定では此代行者を登記することが出来ないことになつて居るので、惡重役は之を奇貨として逸早く重役の變更届をして登記を済まし、相變らず惡事を働くと、登記所も惡人とは知りながらも、形式に捉はれて其變更の届を受理する、これを見て又株主が新しい重役に對し、職務執行停止の假處分を申請するといった工合で、争ひはいつ迄も繰返へされ、其うちに會社は轉々所在地を替へられ、遂には會社の財産は勿論株主には拂込を強要して、また残らず重役共が喰つてしまふといふ有様、これでは登記所が惡人の手先となつてゐるやうなものだといふので、東京地方裁判所民事

止めを刺された會社荒しの惡重役

第四部の及川裁判長と、執行部の谷井裁判長とが協議の結果、登記官廳たる東京區裁判所に對し、「裁判所が選んだ代行者以外の一切の登記申請を受理すべからず」といふ裁判所が裁判所を假處分するといふ畫期的決定を與へ、法曹界にセンセーションを捲き起した、これこそ確かに会社荒しには一大痛棒で、社會的にも問題である。

近頃あつた此實例

抑も夫れに付て事件となつたのは、第一商業株式會社といふ元福島縣小名濱にあつた資本金二十五萬圓の金融會社で、重役連は株主が同地方在住なので、株金拂込請求訴訟や失格手續をするには、會社が地元にあつたのでは工合が悪いとあつて、昭和二年十二月之を東京府下戸塚町に移し、失權株を處分し、九百株を重役連が競落したが、これに目をつけた會社喰ひが、其株に金融してやるとて株を強奪し、これを悪用して重役の改選を勝手に登記し、夫れから三週間許りの間に五回も總會を開き、度々重役の改選を勝手に登記し、東市淺草橋場町に會社を置いて居るが、岡山重喜外數名の株主は藥谷、横川兩辯護士に依頼して、例の重役職務執行停止の假處分を申請したが、悪重役側が應戰するの

で、ケリがつかず、止むなく東京區裁判所を相手取り、悪重役の申請にかゝる登記は、受理すべからずとの登記禁止の假處分申請を提起し、前記の決定を與へられた、一方此新例によつて、從來の如く最低三千圓の保證金を積んで總會決議無効の訴訟を起し、ゴタ／＼してゐる間に、會社を喰はれてしまふなどといふ虞れもなくなつた譯である。

拂込の強要に株主の大災難

殊には最近の不景氣に、株主相手の各會社から未拂込の訴訟が目立つて多くなつて來たのも道理で、第一回の拂込みがあつた許りの會社が、經營立たずして總會毎に損失無配當といった工合、最初なつた重役も辭職して新たに重役が出来る、夫れでも事業をやつて居ればだが、例の泡沫會社では正に事業は中止で何にもしない、何にもしないからとて會社としては日々金が要る、そこで悪い重役は茲に第二回の拂込を株主に要求する、だが如何とも創立以來損失で、一毛の利益配當もないといった程であるから、株主とても第二回の拂込みを躊躇する、中には既に第二回の拂込迄をしても、尙損失を續けるといふ會社や、事業を中止して殆んど空家同様になつて居る會社に、いくら金をつぎ込んだから

止めを刺された会社荒しの悪重役

止めを刺された会社荒しの悪重役

六四

とて、恢復する筈もないとあきらめて、夫れよりは寧ろあと株金の拂込をせぬ方がと逃げる、殊に全額拂込済でない場合は、例へば一株五十圓と定め、第一回の拂込が四分の一即ち十二圓五十錢とすれば、あと三十七圓五十錢丈の拂込をせねば全額にはならぬ、此間会社が存続して他に借金でもあれば、勢ひ株主にあと金を拂込ませて、其金で借金を辨済せねばならぬ破目に陥る、とても見込のない会社なら、一日も早く解散してしまふ方が株主の損失を尠なからしむる道理だが、其處が悪重役の会社喰ひ株主殺しの集まり丈に、事業も經營しないで、会社を存続しつゝ株主からあと金拂込みをさせ、其金を喰つてしまふといふ目算であるから恐ろしい、夫れにしても只眼前の慾に迷ふて、無闇矢鱈に新会社の株主などにならぬがよい、若しするしたら有力にして信望高き發起人の創立する株式会社の株主たるべきで、殊に政黨屋などの創立せる会社は、先づ以て不安危険が多いものと知られたい。

八 姦通宥恕で司法界空前の事件

「大審院と検事局の大争ひ」

第一審では不起訴

此頃大審院の刑事第一部長倉裁判長、溝淵検事係で開かれた姦通事件の裁判は、司法界空前の重大事件で、大審院始まつて以来のものと思はれてゐる、此事件の起りは、石川縣河北郡中條村中村嘉一(四二)が、近隣の中村清一(三三)及び金澤市醒ヶ井町三七小田黨(三六)を相手取り、姦通罪の告訴を昭和三年三月十五日、富山地方裁判所に提起した事で、其理由は黨は戸籍上嘉一の妻であるにも拘はらず、大正十四年三月より昭和三年二月迄精一と姦通してゐたのを、近所の者の密告によつて嘉一は同年十月頃知り、姦通の告訴をすると共に、昭和三年一月富山地方裁判所に黨を相手取つて離婚訴訟を起し、此訴訟が九月二日離婚が判決となり、十月十三日確定した、處が富山地方検事局は該事件を取調べの末、「良人に宥恕の念あり」といふ理由の下に不起訴としてしまつた。

姦通宥恕で司法界空前の事件

六五

検事局から大審院に上告

嘉一は無念遣る方なく、姦通の不起訴決定不服の抗告を名古屋控訴院に起したが、茲でも棄却となり、更に大審院へ再抗告をした爲め、前記瀧淵検事主任となつて取調べをした末、小山總長と協議の末「宥恕」の點に不審を懐き、嘉一の再抗告を理由ありとして、改めて大審院より富山検事局へ該事件の起訴命令を發し、正式に起訴豫審に付せられ、薫は有罪と決定、富山地方裁判所で開廷の結果やはり「宥恕」の點が認められ、公訴棄却となり、第二審名古屋控訴院でも控訴棄却となつた。

大審院瀧淵検事は之れに服せず、名古屋控訴院検事局に命じ、上告の手續を取らしめ、遂に最終審たる大審院で明確に裁かるゝ事となり、いよいよ最終の判決が下された。

該當する法文と其解説

抑も刑法の條文によれば、其第八十三條に於て、有夫の婦が姦通した場合には、一年以下の懲役に處し、其相姦したる者亦同じと規定しあり、其第二項に前項の罪は本夫の告訴あつて、始めて之を

論ずるものとした、詰り親告罪である、本夫の告訴がなければ検事は之れを取りあげないといふのは斯る犯罪は被害者が本夫のみで、他には及ぼさぬことと、又一つには本夫の訴なきに勝手に検事を起して公訴を起さしめたならば、本夫は之を欲せざるに、此不名譽が社會に公けに暴露さるゝ事になつて、却つて其方の被むる損害が多くなるかも知れない、そこで果して害を受けたかどうかは、本夫の意見を俟つて論ずる外はない、今本件に付ても本夫は之を起訴した、只前條第二項の末段但書に「本夫姦通を縱容したるときは告訴の効なし」と規定してある、果して本夫は妻が或男と姦通するのを知りながら、云はゞ黙つて宥して居たか、世間には本夫と喋し合はせて、或男と姦通させ、其男から財物でも奪ふやうな悪計を企てる者もある、俗に之を「筒持たせ」と稱へて居る、亭主が姦夫に借金とか或義理がある爲に、妻と姦通するのを知りながら、忍んで苦情も何も言はずに居るといふ者もあるなど世は様々なもの、此場合は本夫は所謂姦通の事實を縱容したもので、従つて告訴の効はないといふのである。

宥恕にはならぬと検事の談話

姦通宥恕で司法界空前の事件

六八

そこで溝淵大審院の検事の談に、自分は全國裁判所を指導する意味に於て、特に重大性があるといふ事を、検事上告の趣旨に述べたが、要するに被告側清一、姦は嘉一から宥してやるといつたと供述してゐるが、夫れは嘉一が「宥してやる」といふのは言葉の端で一寸位言つたかも知れぬが、既に姦通罪の告訴提起前に離婚訴訟を出し、立派に黨を離別して別居生活をして居り、又嘉一は清一に對して慰籍料三千圓の附帯私訴を出して、「千圓を支拂ふべし」との判決が清一に下つてゐる位である、此點を見ても姦通を「宥恕」したといふ事にはなつてゐない、元來姦通宥恕の事實は、一度び訴を起しても宥恕してやつて、元の如く夫婦共同生活を續けるに至るもので、離婚して別居生活を爲し、現實姦夫姦婦の行爲を憎んで居ながら、宥恕は當らないと某新聞記者に語られたとか、如何にも道理と思はれる。

九 投票焼却の一騒動

「世間への見せしめに重く罰せらる」

管理者選舉で前代未聞

東京府下の隅田町二二〇六同町會議員で、南葛飾病院町村組合會議員の田中物吉、同瀧澤逸平、大島町の町會議員で前記病院の組合會議員たる竹内四郎の三名は、青山新太郎辯護士を代理とし、總戸町會議員中西菊雄外三十餘名の同病院組合會議員を公務執行妨害に選舉妨害、公用文書毀棄罪で、昭和六年二月十九日東京地方裁判所検事局へ告發したと、當時の東京諸新聞に報導された。

焼却當時の様相

告發の内容は南葛二十ヶ町村からなる南葛飾病院町村組合管理者選舉の爲め、管理者職務管掌たる東京府屬山田三千男氏が、十八日午後一時前記組合會を同組合事務所なる小松川町役場に於て、

投票焼却の一騒動

六九

選挙會を開いたが、出席議員は三十四名で前管理者右川慶治氏と田島長三郎氏が候補に立ち、各々敵味方の議員が競争した。

漸く投票は終つて、やがて開票に移り、投票函を開いて卓上に出した處、突然參觀席から三十名餘の暴漢が會場内に飛び込んで、投票全部を強奪し、順次手渡して中西菊雄の面前に運んだ處、彼は直ちに之れを火鉢に投棄して焼却してしまつたといふのである、そこで告發となつた、檢事局では重大視し、直ちに黒田檢事を主任に任じ、地元の小松川署から報告を取つて、然る上之れが取調べに着手した。

次の府議改選の前哨とも噂さる

事件の原因となつた南葛飾病院は、南葛二十ヶ町村の組合病院で、各町村から選ばれた組合會議員三十五名によつて、組合長たる管理者を選び事務を行つて居るので、前管理者たる右川慶治氏は、病院の改築も成り、豫算も通つたので去る五日辭職し、爲に後任管理者の選挙となつた、そこで十八日の選挙會では前記右川氏と鹿本村長田島長三郎氏の二名が候補者に挙げられ、遂に投票の焼棄事件まで惹き起す程深刻の原因はなく、只兩氏ともいづれも政民兩派から推され、勢力は殆んど伯仲の間にあるといつた風、何れになつても大したことはないが、其處が夫れ選挙心理と、兩氏は次の府會議員改選の前哨として競争をよぎなくされ、とう／＼前記のやうな大騒ぎを引き起したもので、其結果選挙會は無効となり、再び選挙會を開く事となつたとか。

如何なる法條に該當するか

其後檢事局では中西町議を市ヶ谷刑務所に收容して、更に黒田檢事等は連日小松川署に出張され、暴行者を取調べられたが、立憲自由黨の田邊英之助とかいふ者が暴行者の首謀者と判明し、廿八日暴力行爲並に公用文書毀棄罪で起訴收容したさうである、其當時南葛飾病院では管理者が辭職してゐた爲に、東京府から事務管掌として行かれた山田屬が、此暴行に對し兩手を以て投票用紙を覆ふて奪取を防止したが、力及ばずして暴行者は該投票用紙を一握みとし、傍らに居る同味方の暴行者に順次手渡し、やがて中西議員が之を受取るや、其側にあつた火鉢に投棄して焼いてしまつたと風聞して居る、之れが果して事實か否やは分らないが、假定的に事實なりとすれば、如何なる罪に落ちるものか、茲

が研究問題である。

然らば如何に判断してよいか、刑法の第九十五條には、公務員の職務を執行するに當り、之に對して暴行又は脅迫を加へた者は、三年以下の懲役又は禁錮に、又公務員をして或處分を爲さしめ、若くは爲さざらしむる爲め又は其職を辭せしむる爲め、暴行又は脅迫を加へた者も、前同様の罪に處すべき旨を明示してある、公務員たる山田屬が選舉といふ職務の執行に當り、之を



爲さざらしむる爲に暴行を加へたのであるから、之れ正に公務執行妨害の罪になるは當然である、管に右の罪に該當する許りではない、刑法の第二百五十八條には、公務所の用に供する文書を毀棄したる者は、三月以上七年以下の懲役に處すと規定してある、又次の條文には權利、義務に關する他人の文書を毀棄したる者は、五年以下の懲役に處すとある、處で投票用紙は公用文書か私文書かといふに、之れ又普通個人間の契約證文などと違つて、選舉といふ公事に用ゐられたもので、従つて公文書であると解する、之を燒棄すれば以上の罪の外に本罪が併發するものと解せられる。

處で其暴力者一人での暴力ではなく、多數の者が選舉場に行つて、計畫的に斯る暴行を企てたので、これは大正十五年四月十日法律第六十號を以て公布せる「暴力行爲等處罰に關する法律」といふ規定の第一條に該當する事となる、従つて之れによつても犯罪が構成する譯で、結局は前述べた幾多の犯罪が具發して居る、而して右法律の第一條によれば、三年以下の懲役又は五百圓以下の罰金に處すとあるによつて、以上の犯罪の重きによつて處罰される事になる、果して裁判の結果は如何なる處分を受けるか、殊に斯る犯行が頻々發生するに於ては、社會の秩序維持上大なる影響弊害を及ぼすが故に、一般警戒的にも當局は重く罰するといふ方針を取つて居るかに窺はれた。

一〇 土地収用に依る借地人の損害請求 「借地人の利益擁護の新判例」

道路改正に地所も家屋も取拂はれる

或人が某地主から地所を借受けて、其處へ家を建て、商店を張つた、處が誠實と親切と勉強とが信用を博して、店の繁昌は非常であつた、高い地代を拂ふ位はお茶の子、此分で十年も續いたら巨萬の富を作り出さうとの評判は近所界限に傳はつた位。

然るに其處が道路の改正とあつて、従來の四間道路が今度は十二間道路となるといつた譯で、どうしても其土地は収用されねばならなくなつた、従つて其店舗も他に引越すのよぎなき破目に陥つた、此場合に土地を収用される結果は、地主は當然相當價格を以て其土地を買収さるゝ事になるが、然らば借地人はどうなるか、借地人も其處で店舗を張つて築きあげたる得意を失ふのみか折角立派に普請をした店舗も取り壊はして、何處なりと立退かねばならぬ大損害を招ぐ、之れに對しても夫れ相當の

保償をしてやらねばならぬ譯である。

借地人にも各別に損害賠償

夫れに付て近頃之れと同じ様な問題が起つた、そして大審院の民事第四部須賀裁判長審理の下に公表された、従來土地収用法によつて、地主が其所有土地の収用契約を爲した場合に、収用價格が少なかつたので、自然と借地人に支拂ふ移轉料も少ないのであるが、第一第二審裁判所では、

「土地収用の價格は其土地の借地権損失による損失も包括するものであつて、之を別に切り離し、借地権消失に因る損失は獨立して認める理由はないとして、其請求を却下したのは不當である」

との理由で原判決を破毀し、借地人に勝訴の言渡をした、事件は姫路市東納屋町十五番地日山まささが、大森廣吉所有の土地同市驛前町を借りてゐたが、地主の大森は大阪市北区宗返町宇治川電気株式會社との間に、六千三百五十圓で此土地の収用契約を爲し、借地人の日山は事實此移轉による損失は一萬一千百餘圓に上るといふので、宇治川電氣を相手取り、差額請求訴訟を起し、第一審第二審とも敗訴し、爲に上告に及んだのである。

土地収用に依る借地人の損害請求

東京にも同様の實例があつた

といふのは外でもない、東京市内は頻々たる市區内道路の改正で、詰り道路を擴張する都度、繁昌する店が取拂はれる。家主や地主は之れに對し買収費とか移轉料といふものを貰はれるが、借家人はさうは行かない、僅かに家賃の三四ヶ月分位も負けて貰ふ丈で、其儘他に引越さねばならぬ事になる悲しさ、今迄一生懸命に商ひに精を出し、種々の商略を以てやつと得意を殖やし、信用を賣り込んだと思ふ矢先に、前申す如き事で他に引越さねばならぬ羽目に陥る、夫れも近所に適當な貸家でもあれば、其處へ越して以前の如くに商賣も續けて行けるが、若し適當の家がないとすれば、遠く貸家を探がさねばなるまい、さうなると全く今迄犠牲を拂ふた得意吸収費や、信用は全く盡壁に屬してしまふ、地主や家主は相當の損害賠償を受けた故、夫れで満足も出來ようが、借家人の身に取つては果してどうであらうか、然るに家主は彼れ借家人が突然の立退きに、引越先の家を探がす迄の間、僅かの家賃位を免除して呉れたからとて、おたまりこぼしもあつた譯のものでない、然かも其當時は之れが救済法がなかつたものと見えて、借家人は其儘泣寝入をしてしまつたものである。

さればといつて家主に迫る譯にも行かない、立退かねばならなくなつたのは、家主の所爲ではなくして、其筋が公益上土地を収用したものであるから、其筋が借家人に對する損害に付て、之れを賠償してやらねばならぬ筈で、而して又其損害は顯然として土地家屋の所有者と區別し、之れを賠償すべき筈のものである、勿論其筋に於ても家主と借家人との契約、即ち造作關係などに於ても損害を賠償し得るかにし、以て損害の程度を定むることが至當である、斯くして借家人は之れに依つて損害を補償し得べく、從つて他に移轉して再び營業を繼續し得る譯である。

一一 養子縁組後實子が生れて家内紛擾

「相續權は養子實子何れにあるか」

養子縁組を爲す要件に付て

養子縁組もなかく面倒なもので、年長者を養子に出來ぬこと、法定の推定家督相續人たる男子ある者は、男子を養子と爲し得られぬこと、後見人は被後見人を養子にせられぬこと、配偶者ある者は

養子縁組後實子が生れて家内紛擾

其配偶者と共にするでなければいかぬこと、詰り夫婦者は夫婦養子とすること、養子となるべき者が十五歳未満なるときは、其家に在る父母が代つて縁組の承諾を爲すこと、繼父母又は嫡母が子の縁組を爲すときは、親族會の同意を得ての上で爲すこと、成年の子が養子と爲し、又は満十五歳以上の子が養子と爲るには、其家に在る父母の同意を得ることが必要である、又縁組又は婚姻によりて他家に養子となつた者が、更に養子として他家に入らんとする場合は、實家に在る父母の同意を得ることを要する、尤も妻が夫に随つて共に他家に入るときは、強ち實家の父母の同意は必要としない。

以上は養子縁組に對する心得方の大要だが、長男には他から嫁を貰つたが、其姉妹は他に縁付かせないで、分家でもしてやらうといふ兩親の處存から、姉妹娘に養子を取るといふ場合は、敢て差支はない、即ち女婿とする譯で、決して戸主の跡を相続さす譯ではない、然して届出の形式は一方に養子縁組届を爲し、一方に娘と婚姻届を爲す順序である、處が茲に一つの問題が起つた。

實子が生れて養子の身に不安起る

夫婦の間に勿論子がないから養子を貰つた譯だが、養子を貰うと直ちに縁組届をした、之れで完全

の手續が済んだ、然るに其後六ヶ月目に養親夫婦の間に偶然にも子が生れた、生れて見れば實子の事故如何に可愛い事か、夫れと同時に前申す如き相続問題が起つたのである、兩親は一旦養子に跡を相続さすべく貰ひ受けもし、養子も跡目を相続する積りで養子となつて懸命に兩親の機嫌も取り、且は働いたものであつた、處が兩親に實子が生れて見れば、何れが相続人となるかの疑問は起らざるを得ない、相続人は後日戸主の財産から一切を相続する、さうなると相続人となれぬ何れかと大に不幸の地位に立たねばならぬ、否養子は例へ相続人とはなつても、兩親は實子の方へ力を入れて、財産の大部分を實子に與へるに相違ない、茲に至つて養子の不安は益々つのる許りであつた。

そこで切かに其辯護士を訪問して、之れが鑑定を求めたのであつた、其結果は次の如く鑑定を下した。

妊娠の時期と實際上の注意

養親が養子を貰ふ際に、養母が假に懐妊してゐたならば、胎兒は相続權に付ては既に生れたるものと看做すとの規定が、民法第九百六十八條に規定してある、して見れば、養子縁組をする當時に、最

早胎児は相続権を獲得して居るのである、尤も胎児が死んで生るれば夫れ迄の事ではあるが、無事に
 出産すれば當然相続人となる譯である、従つて養子は茲に推定家督相続人たる権利を失ふてしまふ、
 是等の例は世間に有り勝のことで、兎角妊娠三四ヶ月位では人目にも止まらず、妊婦自身でも感付か
 る事もある、「何うして月經がかう無いかしら」位に思つて居る婦人もあると聞いて居る、之れと反
 對に養子を貰つてから妊娠したのでは、胎児は相続権はない、養子は既に其時に相続権を確定的に得
 たものである、養子を貰つてから三年も過ぎて實子が生れた、両親は養子を排斥して實子を以て家を
 相続させやうとする、家庭はもめるといつた工合で、所謂お家騒動の起つた例もあるが、前申す此場
 合は養子に家督を相続させ、實子は分家でもさせて、財産も六分四分とか七分三分といつたやうに、
 本家相続人に多く、分家者に少なく與へてやるやうにする、夫れも親が生前にちやんと定めて、法律
 上有效の一切の手續を済まして置くに限る、さうでない、一朝戸主でも死亡した場合には、相続人
 は一切の権利義務を獲得して、分家とすべき實子には一文半銭の分前もやらぬ事になるかも知れな
 い。

論より證據で、戸主即ち被相続人は、生前養子や實子にちやんと財産を分けてやることを遠慮して、

容易に決定しないで置くと、いつしか急病に罹つて死んだが最後、茲に財産争ひが起つて、各々味方
 の親族が兩派に分れて紛擾を極めた揚句は、裁判沙汰になるといふ事實も幾多目撃して居る、嘗つて
 著者の本家では嫡子が幼少の爲に姉嬢に婿を取つて家督を相続させた、(民法施行前のこと)そこで嫡
 子には分家させて相続の財産を分けてやつたが、此嫡子奴大の放蕩者で、何回財産を分けて貰つても
 悉く濫費してしまふ、爲に生地にも居られず東京遊學中なる著者の許に流れ込んで来て厄介になつ
 た、著者は當時は新聞雑誌の記者などをして、之れによつて學資を得て居つた、すると偶々本家の戸
 主が病歿し、續いて間もなく其妻(即ち放蕩者の姉)が死亡した、然かも死亡前にちやんと相続人を
 定めて置けばよかつたのに、何の爲めか容易に定めず、死に迫つて秘密遺言證書を作るべく、公證人
 を招いで一切を任せた、其秘密遺言證書には、分家の相続人たる著者の兄を相続人に指定した、話は
 變つて放蕩息子の分家戸主は忽ち野心を起して右の遺言書は無効であると主張し、某辯護士を以て己
 れが相続人たる資格ありとして裁判所に訴へて出た、いよく財産争ひが起つた。

著者の兄は極めて利慾に恬淡の性格で、地方公共の爲に幾多精神物質に貢献する處があつた位故、
 世間から本家の財産を取らうなぞと變な疑ひを受けてはつまらぬ、人格を毀損するといつて彼の思ふ

が儘に任せ、此時著者は大に反対した、何も本家の財産を己れに得んとするのではない、本家を永久に持續するのは分家者の義務で、分家をつぶしても本家を立て行かぬばならぬのである、又本家の財産は保護しても己れに自由處分をする精神がなければ夫れでよい、今彼の放蕩奴に相続させれば、忽ち家産を蕩盡し家名を失つてしまふ、果せる哉彼れが死んだ當時に三つの土蔵の中には、一俵の米だになくして、只有つたものはビールの空罎が無量何千本もあつたのみであつたとは、彼れは其以前に既に準禁治産者としての宣告を受けてゐた身分を、著者は同情に堪へざる餘り彼れの生家に連れ戻つて、他の親族知己と協議の上で準禁治産の取消し方に助力し、亡姉の葬式にもやつとの事で列せしめたにも不拘、其間幾外の恩義を忘却して家督相続の野望を抱き、不法不當にも相続權回復なんぞを主張して、とう／＼亡義兄の跡目を相続して、本家の主人公となつたのはよいが、忽ちにして十萬内外の家屋を遺ひ果してしまつた、然かも彼れが死亡の際に於ける境遇は悲惨極まつたもので、遺つたものは先祖の位牌位のものに過ぎなかつた、先代は斯る者を相続人とする精神は毛頭なかつたのみか、彼れ自身も相続人になれようとは夢想だにしなかつたのである、然るに斯る結果に陥つたのは、之れ全く生前にちやんと血統の續く、そして本家を永久に相続し得べき者を相続人と指定して、後難紛擾

を絶止する方法をば、生前にして置かなかつた不心得である、以上の實例に見ても参考とするに足るであらう。

一二 遊廓吉原で勘定事から大立廻り

「ブツタクリ放題の法外もない代金」

番頭に交渉愈々登樓

今は四月の花盛り、三人の若者は打揃ふて王子は飛鳥山へと花見に出かけた、其歸途ほろ酔ひ機嫌で新吉原へと繰り込んだ、例によつて例の通り揚屋町から江戸町京町と片つ端から素見、何處の店でも番臺に坐つて居る男が登樓の勧誘、若者共は或店に入つて、一々並んである娼妓の寫眞を實驗に及んだ、すると素敵な美人が三人も揃つて寫眞に出て居るので、各自此娼妓は乃公が占領と許りにいよ／＼登樓する事となつたが、イヤ待て己が懐とも相談して見ねばならぬし、又遊興料は何程かもちやんと約束しての上で登樓せぬと、後で失敗しても困るとあつて、傍らの番頭に談判交渉。

番頭曰く只今から明朝の八時迄遊興なすつて、お一人前が三圓でよい、夫れで酒が各自に一本お椀にお肴がついて三四ぼつきりで他に一錢も餘計な散財はさせませぬ、頂戴しないといふ堅い言明、若者は夫れなら登樓しやうが、今の約束は断じて違つてはならぬと夕メを押して登樓した、先づ引つけに通ると遣手婆が来てお馴染の方はと尋ねると、若者は口々に「馴染なんかあるもんか、初會だ〜」と答へる、夫れではお花魁は如何致しませうかと再び尋ねる、若者は、

「オイ婆さん、乃公らが登樓するときにはやんと、寫眞で定めて来たから心配はいらない、何でもよいから、若紫さんと、花鳥さんと、昭和さんの三大大お花魁を頼むぞ」

は却々以て豪勢なものであつた、これから約束の通り酒肴は出たが、それはホンの名目丈で、酒も肴も寸間で盡きでしまつたので、例の遣手婆は客に向つて、

「皆さんこれ丈では餘りに淋しいですから、今三四本もお酒を注文してもよいでせうね〜、夫れにお花魁もお腹が減つて可愛相ですから、彌助(壽司のこと)の少し許りでも取つてやつて頂戴な、お一人前いくらかも御奮發くださらないで済むのですから、どうかさうしてくださいね、さうすればお花魁も皆さんをどの位優遇なすか知れませんよ」

愉快に遊ぶべく登樓したものが、反對に冷遇された日には夫れこそ馬鹿氣話である、遣手婆の要求が茲一つ優待冷遇の岐れ目であるから拒絶は出来ない、若者三人密議に及んだ結果は、據ないから奮發しやうといふことになつた。

途方もない高い勘定に嘆き

遣手婆の要求は即坐に容れられた、更に酒は出る彌助が大きな皿の上に並べられて茶ブ蓋の上に載せられる、これからは飲みや唄へやで騒ぎが大きくなつた、段々酔か廻はつて来ると、遣手婆や花魁共は三人の客に油をかける、表面オダテられて見れば満更悪い心持もしない、處が段々精神も興奮して居るので、前後の思慮もなくなつた、彼等は此機に乗じて客が注文もせぬのに、無暗矢鱈に酒肴を持ち運んで来る、かうして太陽氣に騒ぎ抜いて、いよくお引となつた。

客は何れも酔ひ果て、前後の思慮もなく、大駈を掻いて熟酔した、やがて夜もあけて太陽の光りが窓硝子を照らす、番頭は花魁を通じて勘定書を客の一人に差出す、客は酔も醒めて漸く本心に返つた頃、此勘定書を見て驚くまいものか、總計正に金四拾何圓。

評議の結果不當

代金に異議

先きには一人前三圓といふ約束で登樓した、處が後で酒三本と彌助一皿の注文をよぎなく承知した、此代價は精々四五圓しか出ないと腹の中での豫算を立て、置いた、此位ならば各自の懐の金を集めても間に合ふのであつた、然るに之れ以外に何だかだと幾多の品が加はつて居り、夫れに夜具代とか何とか下



らぬものも書き立てゝある、そこで他の同僚にも其勘定書を見せて、茲に一評議が開かれた。

他の二人の客も件の勘定書を一讀して驚いたは道理、乃公等が承知しない品の代金は、斷然拒絶する事としやう、夫れに斯る金は持合せはない、支拂ふことも出来ぬ、だが乃公等は例へ臨酩して前後不覚とは成たとて、彼等が出した酒肴を食べたに相違ない、食べたとすれば幾分責任のない譯でもあるまい、三度目後持つて來た品が例の壽司ならば、自分等の注文した品と思つて食べたと辨解もつくが、全然違つた品であつたとすれば右の辨解もどんなものかと、種々議論も出て容易に盡きなんだが、何れにせよ此勘定書には抗議を申込む事に一決し、客の一人から番頭に向つて其不當を鳴らして、斯る金は支拂ふ譯に行かぬと言渡した。

番頭の暴言は交番に駆付ける

無論かう出はしまいかと豫測してゐた番頭は、昨日の叩頭的愛嬌は一變して、今度は開き直つた態度で、

『旦那元談言つちやいけませんよ、貴方は散々に騒ぎ散らかして、思ふ存分の愉快をして、其揚句

に勘定を彼是れ仰しやるとは、白バクレた話ではないでせうか、何も貴方が注文しない品を態々持つて来る氣遣はありません、お客様に斷つて特に注文した譯なのです、お酔ひなすつてゐたから、お忘れになつたのでせう、どうしても拂つて戴かなければ困ります、否應はありません、話が分らなければ出る處へ出てお叱度頂戴して見せます」

と威い劍幕、三人の客は此上は暴行にでも出でまじきかと恐怖の念を抱いた、夫れも道理で、豫てから遊廓には例の遊び人なる者や、勘定不足の客の跡始末を引受ける者があつて、愈々以て樓主と客との間に解決が著かねば、此始末屋の方へ引渡してしまふとの話を聞いて居る、だによつて此上は彼等が如何なる處置に出るか知れない、そこで客の一人が某所に用足しに出ると稱して、樓を出て附近の巡查交番所へ訴へ出た。

先づ登樓當初から其時迄の經過を逐一陳述し、約束外に彼等が勝手氣儘の酒肴を持ち運んだが、三人は何れも酒の飲みぬ方とて、忽ち酩酊してしまつた、其酔ひに乗じて彼等はよい加減の事をして、我々三人が注文したから持つて来たなどと嘘言をいつて居る、自分等は約束以上に餘裕の金の持合せはない、勿論斯る豪遊を極めるなぞといふ境遇でもないので、夫れ故幾度か登樓當初より念を押して、

違約してはいかねぞと注意した、夫れにも拘はらず斯る不當の要求を爲すに至つたと、其次第を述べ、然るべく御處置を願ひたいとの嘆願に、巡查も其儘にして置けず、早速其者と同行して件の樓に赴き、番頭から遣手其他關係人にも事情を訊問した、處が彼等は客からの注文故持つて来たと頑張る、客の方ではさうでない主張する、然かも其酒肴は殆んど遣手番頭、花魁等が寄つてたかつて食べてしまつて、客共は何が其處に運ばれたか知らぬ位、始めより約束の揚代位しか無いからと堅く斷つて置いたのに、我等が風装がよい處からまだ金があるだらうと想像し、殊に自分等は登樓も今度で三回丈で、遊廓の事情も能く存じません事から、彼等は私共を脅かして、始末屋の手に引渡さうとの見、どうか宜しくお裁斷を願ひたう存ずとの言譯、警官も茲に至つて何れが是か非かを處置せねばならぬ羽目に陥つた。

警官の裁きによつと解決

著者の見聞する處、兎角遊廓には斯る惡辣の女郎屋がある、夫れに不景氣の昨今、客と見たら約束外に散財させるので、餘程撰擇して登樓せねばならぬ、して又俗に彼等惡辣の貸座敷を『ポリヤ』と

稱へて居る、偶々田舎者とか遊廓の事情を少しも知らぬ客と見れば、必らず懐中の財袋を叩かせた上に、尙勘定が不足の場合には、着て居る羽織でも帯びて居る時計でも、手當り次第に勘定の形に取つてしまふ、嚴重な其筋の取締を巧みに潜つて、斯る悪辣極まる行爲を敢てする、本件の場合も夫れで注文せぬ品を無暗矢鱈に運んで来るといふのは不都合であり、又よしんば客に金があつても前以て約東外には散財はさせぬことと、堅く斷つて置いたならば、其餘の散財はさせぬのが彼等營業者の徳義である、然るを不徳にも斯る事を爲すに至つては、到底其代金を支拂はれる筈のものでない。

警官も豫てから此樓の質の悪い事を聞いて居つた、夫れに三人の客の様子を見ても、決して無錢飲食をするやうな人物ではなし、彼等の陳述に充分信用を置く事が出来るものと認定した、そこで彼は宣告して曰く、

『約束の揚代三人前九圓と、外に特別に注文を承諾した酒三本並に壽司一皿の代金四圓五十錢とやらこれも比較的不當の價格だが、此際の事故貴方は奮發して支拂ふが宜しい、他の酒肴代は勝手に持ち運んだものとして、支拂ふに及ばぬ、早速以上の勘定をして一時も早く家へ歸るがよい、將來も斯ることのないやうに注意すべきだ』

と懇々戒められたが、更に番頭遣手に向つては酷いお叱り、樓主を其場に呼び出して、今後斯る事があれば、營業停止を命ずるによつて左様心得よと、頗る嚴重な警告を加へて、其儘本件は無事に解決したとやら、遊廓遊びの方々には兎角此邊を参考にして置くに限る。

一三 借金通れに財産を處分隠匿した債務者

「詐害行爲で取消された實例」

家財道具其他の隠匿に債権者立腹

或地方の資産家が慾深の餘りに、種々の事業に手を出したが、結局は失敗に終つた、其うちに或債権者から訴へられるも必定と見て取つて、逸早くも己が家財道具の目ぼしいものは、内々で親戚に預けてしまつて、家屋や宅地田畑は或は他人に賣却した如く、又は抵當に入れて金を借りたものゝ如くに装ひ、いつ何時債権者が差押へに來たとて、何一つ差押する物もないやうに始末をつけてしまつた、夫れとは知らぬ債権者は差押手續に及ぶと、何ぞ計らん差押る物もない、家宅田畑迄も他人の名義とな

借金通れに財産を處分隠匿した債務者

つて居るに驚き且憤慨した。

「太い野郎だ、金を借る時には何か抵當でもといったのを、自分の方から夫れには及ばない、君は相當不動産もあるし、信用も十分だによつて無擔保で貸してやらう、其代り間違のないようにと、念を押して貸してやつた、然るを不徳義且不法にも早くも財産を處分したり隠匿するなどは不都合千萬、此上は何程費用が掛つても構はぬ、意地にも彼奴を往生させてやる」と怒氣滿面、之れから頼みつけの辯護士事務所を駆け付けて、貸借關係より今日迄の經過を詳しく物語り、債務者に對し訴を起すべく件の辯護士に一切の權限を委任した。

不動産の處分に詐害行爲としての訴

話は變つて債務者側では、昔に其債權者許りではなく、他にも所々方々に借金がある、何れにしても借金を残らず返済すにあつては、とても自己の財産を全部擲げ出したからとて足りやうもない、さらばといつて残らず擲げ出してしまつたでは、家族共が路頭に迷ふ悲劇を演ずる、そこで財産を隠匿するといふ悪い見になつたものと見える、彼は先づ家財道具文は工合よく隠し切れもしたが、借不

動産は却々さう旨く行くものでない、他人に賣却した如くに見せて所有權を他人名義にしても、或は其儘他人に取られつきりになつてしまはぬとも限らぬといふ懸念がある、大丈夫なのは親戚に賣却した事にするのが一番安全である、良策であると考へたのはまだ法律を辨へぬ悲しさ、債權者側では一々其經過を取調べて見ると、彼が不動産の一部は親戚の某に賣渡した事になつて居り、他は借金の形に土地を以て代償した事になつて居るなど様々であつた、此事實を確めし債權者側の辯護士は、「詐害行爲取消の訴」といふ標題で訴狀を某地方裁判所に提起した。

今其理由を尋ねると、債務者たる某は既に債權者たる原告に、これ／＼の金を借りた後に、其債務を免かれんとするの悪意を以て、己れの所有不動産何々をば、昭和何年月日に親戚なる何府縣郡何町村何番地何の誰に、虚偽の賣買を爲し、以て所有名義を何の誰に變更してあること、又他の不動産の何々をば、何の誰に借金返済の方法として賣買名義で所有權を變更してあること、其他これ／＼然かくと、一々指摘して財産隠匿及び處分の事實を明かにし、是等の行爲は全く債權者が權利の行使を無効たらしめんとするものであるによつて、従つて賣買其他の行爲を取消されたいといつて請求に及んだ、詰り民法の次の條項によつて主張したものである。

第四百二十四條 債權者ハ債務者カ其債權者ヲ害スルコトヲ知リテ爲シタル法律行爲ノ取消ヲ裁判所ニ請求スルコトヲ得但其行爲ニ因リテ利益ヲ受ケタル者又ハ轉得者カ其行爲又ハ轉得ノ當時債權者ヲ害スヘキ事實ヲ知ラサリシトキハ此限ニ在ラス

前項ノ規定ハ財産權ヲ目的トセサル法律行爲ニ之ヲ適用セス

とある、正に右の條文に該當して居る、處で他人にでも相當の價で賣却し、其買つた者が斯る場合即ち賣渡し本人が他に澤山の借金があつて、借金を踏み倒す見で自己の不動産を賣却するといふ事を、知らずに買受けたものなら夫れは善意であるから、之が爲に善意の買受人に損害を掛けることは不衡平である、言を換へて申さば、善意に買受けたにも不拘、其賣買を取消されるものとしたら、一方に所有權は元の賣主に歸し、渡した代金は時に賣人が消費してしまつて、取り返しのつかぬ事も起らう、夫れこそ飛んだ災難である、法律は斯る善意の第三者を無視する譯には行かない、そこで斯る場合は取消の限りにあらずと規定した譯である、處が兎角多くの場合は債務者に其真相を打明けられて、同情して假裝の賣買をしたり、又時には極めて安く買受くる事もある、殊に親戚の者などに賣つたとすれば、夫れは皆虚偽の賣買といつて宜しい、親類の者が借金のあるのを知らぬ筈はない、裁判

所は此點に付て關係者を一々呼出して訊問する、債裁判官の前に行く、さう嘘といふものは吐き通せぬもので、辛辣な取調べに會ふと遂には事實を吐く事になる、例へば買人に對して若し買つたとすれば何程で買つたか、代金の取引は何處で致した、其金は何處から都合して來たか、などと細かく尋ねられる、更に賣人に向つても同様の訊問をする段になると、賣人と買人との答辨が引合はぬ事になる、茲に始めて虚偽である事が暴露されるのである、處が第三者即ち何等の關係ない者が、賣人と債權者側との關係を露知らず、日頃欲しい地所であつたとか、乃至は對安の地所故奮發して買求めようといふので、取引した場合でもあれば、何等の隠す處なく答辨する、之れが賣人側の答辨とスツカリ符合事になるといふ勘定である、さすれば善意の買人の行爲を取消す譯に行かならう。

真相を正せば假裝の賣買

今本件の事實を聞くに、家屋敷は祖先傳來の遺産だとなつて、これを入手に渡した自には家族の住む處もなくなる、親戚の者とも内密に協議を凝らした結果、それなら親戚に賣渡した事にすれば安全だとの早呑込みで、親戚の者に賣渡した事に假裝して所有名義を書替へたのであつた、處が實際假裝

借金通れに財産を處分隠匿した債務者

の賣買であつたから代金の取引はしない、或は致したやうに打合せをして、いよく裁判所に出たらかう答辯して辻褄を命はせる事にと、ちやんと定めて置いたのであるが、前申す通りに嘘といふものは却々吐けぬもので、況して裁判官の前に出ては厳しくそして微細な訊問にとても隠し切れたものでない、何時しか化けの皮が現はれてしまつた。

さあさうなると債権者を害するものとして、件の賣買取引は取消されてしまふ、債権者は其不動産に對して再び斯の如き事をされぬやうに差押手續をする、若し他の債権者があれば、夫れは配當加入をする、債務者は散々に馬鹿な目に遭ふのも、之れ又已れの犯した罪惡の酬みである、寧ろ斯る惡巧みをもせんで、債権者に泣きついて、情状を憫察して貰つて、債権の幾分でも負けて貰ふ方が得策である、古諺にも「鬼の眼にも涙」といふことがある、家族も其家を追ひ出され路頭に迷ふのを知つて、徹底的に苛酷な處置には出られまい、其處に幾分の同情が存する。

雷に夫れ許りではない、時とするとなつて偽證罪に問はれて刑事問題を惹起さぬとも限らぬ、夫れに付て一好實例がある、矢張り本件と同一問題で債務者が偽證した結果、相手方の辯護士は偽證の告訴を爲し、債務者は一時刑務所にブチ込まれた、こは栃木縣の佐野町に於つた事である、親戚の某が法

律も知りもせぬに種々雑多の事を其債務者に教唆して、爲にやつた事が遂に偽證罪となつて、借金處か此處で意外の費用を遣つたのみか、親戚中が大騒ぎをして大迷惑をかけた事を耳にして居る、幸ひに證據不十分で免訴となつたが、刑務所で永らく腐い飯を喰つた丈が損である、其結果は詐害行為として取消されて、何一つ得たものはなかつたといふ話、此一事に對しても呉れくも注意して然るべき事であらう。

一四 私を自由な體にして下さい

「涙ながらに裁判所へ訴へ出た藝者」

實父から六十圓で藝者に賣らる

ちと古と話だが、東京區裁判所の伊藤書記の處へ「私を自由な體にして下さい」と泣きながら口頭で訴へ出たのは、府下龜戸町の藝者山口さと(當時二二)といふ者で、其當時は親許の深川區蛤町一ノ四船頭の大野金五郎方へ逃げ歸つて、勤めを休んで居る。

私を自由な體にして下さい

私を自由な體にして下さい

書記も同情して訊ねて見ると、さとは親の貧しさから、十一の春六十圓借りた抵當に、二十歳までの約束で當時藤澤町の藝者屋山口米吉方へ下地子として奉公した、元より無智な實父が何も知らず印を捺した許りに、本人も親も知らぬ間に十四の時に山口の養女として入籍されてしまひ、其年から客を取らせられた苦しさを、親が借りた六十圓の借金はとうの昔に稼ぎぬけた筈が、年期契約と養父母といふ鎖につながれて、年期明けを待った。

養女に稼がせて贅澤三昧

處が養父母は上京してさといを龜戸町から稼ぎに出し、自分達は贅澤に暮しながら、年期が明けても養女だからとて實家へ歸さぬ、彼女は、『妾は六十圓の借金の爲め一生苦しまなければならぬのでせうか』と泣き崩れた、伊藤書記は此様を見て一層不憫が増したが、彼女をなだめて、『養子縁組は實際の相續人たる場合以外には成立たない大審院の判例があり、貴女の場合は名を養子縁組に藉り、客取りを強ひるのだから、立派に離縁が出来る』

といつて彼女を勵まして、東東地方裁判所に養子縁組無効並に離縁の訴訟を提起することゝなつたとか。

藝者の爲の養子

縁組は效なし

之れより先彼女及び其實親は、養親の山口に向つて、離縁を迫つたが、散々苦しい稼ぎをさせながら、離縁したいなら二千圓出せ、三千圓出せといふので、餘りの没義道に話にはならな

私を自由な體にして下さい



私を自由な體にして下さい

一〇〇

つた、尤も藝者屋の女將が他人の娘を藝妓として仕込むのに、親許へは僅か許りの金を與へて、其子を自分の養子として入籍さす例が多かつた、新橋や赤坂邊の有名の藝者屋でもさうした事を聞いて居り、牛込の神樂坂の某藝者屋でも本件と同様な事で、裁判沙汰にもなつた事があつた、養女に貰ひ受ければ、あとは娘をどうしようとして此方のものだといふ考へを持つて居たのであつた、處が苟も養子とするには、其家督を相続さす精神で縁組をするのでなければならぬ、然るに藝妓とする爲めの養子では、眞に養子縁組の目的精神に反するといふ事で、東京地方裁判所でも、大審院でも之れを無効とした判決を下した例がある。

晉に夫れのみでない、藝者といふ職業は、姪を賣るのが商賣ではない、況して十四五歳の娘をして姪賣を強要せしむるが如きは、許すべからざる事である、此點からしても藝妓稼業での契約に反する、さといふ女の訴は正に前判例によつても勝訴たるは勿論である、否淫賣などを勸めて、之れによりて悪疾でも感染した結果は、疾病療治の費用を始め、精神上苦痛に對する慰安として、之れが慰藉料迄も請求する権利がある、娘を藝者にでも賣らうといふ親は、斯る事は無智であり、寧ろ純朴の者が多いによつて、悪藝者屋によつて勝手の事をされ易い、夫れにしても未來ある娘が僅かの金の爲に一生涯を

誤るに至つては黙視する事は出来まい。

一五 慾張の地主と温厚な隣りの地主の争ひ

「境界きつちりに種々の建設」

雨水が流れたり糞臭紛々

或る地主が飛騨切つて慾張で、慾にかけては義理も人情も顧みない、ソナナ譯で却々算盤高い、自分の地所は一寸でもあけて置ぬといつた風、隣地との境界きつちりに利用する、爲に彼の建てた家の雨水が隣地に流れ出して隣地所有者も非常に困つて居るが、此人は打つて變つた穩かな人物、只心の内に困つたといつた丈で何一つ苦情も言はぬ、そをよき事と思つて慾深の隣地所有者は又候境界に接近して井戸を掘つたり、乃至は其反對側の境界に接続して肥料溜などを作つた、隣地の所有者は雨水に苦められたり、風向の悪いときは糞尿紛々でどの位困るか知れぬ、かう勝手な事をされたのでは如何に正直で温厚の人でも黙つては居られない、何とかして法律の保護を受けて此不徳者を懲めてや

慾張の地主と温厚な隣りの地主の争ひ

一〇一

りたいものだと、一圖に考へ込んだのも無理はなう。

勤忍袋の緒が切れて訴訟沙汰

そこで或日某辯護士を尋ねて鑑定して貰ふと、此事件は屹度當方の勝訴となるとの話に、夫れでは引受けて裁判所に手續をして願ひたいと頼んだ、辯護士も承知して直ちに訴狀を認めて裁判所に差出した、其原因は前にも言つた如くに、兩方の土地の境界を僅かに五寸も離れずに家を建てたので雨だれが原告の土地内に流れて、爲に原告の建物並に土地に損害を與へることと、又一つには例の肥料溜が深く掘つてあつて、隣地迄も崩壞の憂ひがあり、且風向で臭氣甚だしく、衛生上にも害があり日常生活の上に苦痛を感じて居るといふのが要點で、法定の距離迄離れて改築すること、今日迄の損害並に慰料を支拂ふことといふのが、訴求の眼目であつた、此請求通りに判決を言渡されるとすれば、彼れ懸張親爺被告にとつては容易の事ではない、既に裁判沙汰となつて見れば、ウツカリして居られぬので、彼れも禪をみてかゝつた、だが元來の卑吝漢の事とて、辯護士を頼んで謝禮を出す文の奮發心もない、やがて裁判所からは口頭辯論の日が指定されて、原被兩造を呼出すべく通告された。

法文には何とあるか其見解

果して原告主張通りの事實なるや否やは、係判事に現場の臨檢をして貰ふ必要があるによつて、原告辯護士は之れが申請に及んだ、一も二もなく許可された、判事も現場に出張して見ると、成程原告の主張の通りである、そこで更に法律の適用といふ事になつた、今其該當すべき民法々文中には、概要次の如く規定してある。

(一) 建物を築造するには、疆界線より一尺五寸以上の距離を存すること、若し以上の規定に違つて建築を爲さんとする者あるときは、隣地の所有者は其建築を廢止し、又は變更せしむることが出来る、但し建築着手の時から一年を経過し又は其建築が落成した後は、損害賠償の請求のみを爲すことが出来る。

(二) 疆界線より三尺未満の距離に於て、他人の宅地を觀望すべき窓又は椽側を設くるときは、目隠を附することを要する。

(三) 井戸、用水溜、下水溜を穿つには、境界線より六尺以上、池、地畚又は厠坑を穿つには、三尺

以上の距離を存すること。

(四)土地の所有者は直ちに雨水を隣地に注瀉せしむべき屋根、其他の工作物を設けることは出来ぬ。と規定してある、して見れば家を建てるにも隣地より少なくとも一尺五寸の距離を置いてすることで、まだ建ぬ前に其計畫ありとすれば、隣地所有者からは其建築の廢止、又は變更方を請求し得るが、本件の如きは既に建てた後であれば、損害賠償の請求のみを爲す事が出来るに止まる、言を換へて申せば今迄の損害と今後の損害をも見積つて請求し得る譯である、雨樋の如きも一方の地主が少し金を奮發すれば、結構隣地に迄も流れ出させぬやうに出来るので、之れこそ變更した方が却つて先方の利益となる、音に雨だれ許りでなく、接近して家を建てられた許りに思はぬ損害を來さぬとも限らぬ、若し二階建の家でも建てられたら、其家から隣家の坐敷が一眺めに眺められて、爲に家庭の安寧を害する事にもなる、だによつて法は必らず窓又は椽側には目隠を設けて、觀望の出來ぬようにさせた。又如何に自分の地内たからとて、境界きつちに井戸を掘つたり、下水溜なんかを設けてはならぬとしてある、本件肥料溜を設けたのも又違法である、必らず三尺を離れて設けねばならぬによつて、被告が斯る違法の行爲あれば、早速訴によつて被告は之を變更すべく、之れ迄の間に隣地所有者たる原告に向つて、損害をかけて居れば、其損害を賠償せねばならぬのである。

最後の勝利と判断

既に此の如く法が命じてあるからには、懸張親爺の被告も法廷に於てはどうしようもない、大體に於て原告の勝訴に歸する外はない、只原告の訴求主張のうちで、建物の方は取り壊又は變更する事は出来ない、之れは既に建てしまつたからには、取り壊はす如きは經濟上大なる不利を來すので、音に被告一人の不利のみではない、國家經濟にも關係して來る、だによつて單に損害を賠償さす事になる、又肥料溜の如きは僅かな費用で出来るものでもあり、他に變更が出来るので之れも原告の主張が通るであらう、損害賠償といつた處で隣地でも崩壊せぬ限りは取れぬものと知るべく、糞尿の臭氣紛々による苦痛より來る慰藉料も、餘り大袈裟でちと至難しい請求と慰料される、殊に各農家でもあると斯る事は有り勝にも思はれる、併し夫れも程度問題で、如何に注意しても遠慮なく臭氣を放たしむる行爲を取つた事實があれば、此苦痛に對する慰藉料の請求も出來ぬではない、殊に衛生思想の發達せる今日に於ては、決して輕々に觀過するべきものでない、其處が夫れ程度問題によつて判断される

病弱で若隠居をしたい素封家の主人
のである。

一六 病弱で若隠居をしたい素封家の主人

「公務も十分に勤められぬ境遇」

親父に代つて伴が一切の處理

或る素封家の主人公は、俗に子福者と世間から言はれて居る丈に、男子五人女子三人といふ子供を儲けて居る、何れも揃つての秀才、いつも之れが界限の話題に上つて、普く世人から羨慕を受けて居る、處が其主人公は未だ満六十歳にはならぬが、偶々大病を煩ふて全快はしたものの、兎角虚弱勝となつて家政を執るにも困難な状態となつた、況して村の名譽職などもいくつも引受けてゐたが、とても完全に勤める事は出来ない、度々開かれる村會や何かの會議にも殆んど出席する事が出来ぬので、家政は一切長男に任せ、公の席にも本人でなくてはならぬ場合の外は、大抵伴の長男が代つて出席するといつた工合、此上は一日も早く家督を伴長男に譲つて、自分は隠居したいとの心願、夫々親戚の

者を集めて諒解を得たが、只法律では満六十歳以上にならぬと、隠居は許すまいといふことを聞き及んでゐたので、如何にすれば若隠居が出来るかとの内議を凝らした。

法規の上から執るべき手續

成程民法には満六十歳以上にならば隠居は出来ぬのを原則として居るが、併し例外も認めてある、夫れは次の如き條文である。

第七百五十三條 戸主ガ疾病、本家ノ相續又ハ再興其他已ムコトヲ得サル事由ニ因リテ爾後家政ヲ執ルコト能ハサル中ニ至リタルトキハ前條ノ規定ニ拘ハラズ裁判所ノ許可ヲ得テ隠居ヲ爲スコトヲ得但法定ノ推定家督相續人アラサルトキハ家督相續人タルヘキ者ヲ定メ其承認ヲ得ルコトヲ要ス

と規定してある、本件の場合には戸主が病氣の爲に家政を執ることが出来ぬとあれば、よし満六十歳以上にならずとも、當然此事實によつて隠居が出来ると、夫れには醫師の診断書を添へて「隠居許可ノ申請」書を裁判所に差出す、裁判所では本人其他利害關係人をば呼出して、十分に取調べた上で、果

病弱で若隠居をしたい素封家の主人

して家政を執ることの出来ぬやうな、状況にあるや否やを確かめた後、其通りであるとするれば直ちに隠居を許可して呉れる、そして此許可があつてから許可届を添へて、十日以内に町村の戸籍吏の處へ家督相續届を伴から出す事になる。

一七 失業者が交番で査公と一口争

「氣の毒にも留置場に勾留」

巡査の横暴に相手の頑抗

或失業者が毎日、就職口を探すべく所々方々歩き廻はつたが、如何せん不景氣のドン底で、何處の會社や工場、商店でも人減し一方といつた有様、却々以て適當の口は見當らない、某も失望落膽しつゝ、思案に暮れつゝ歸つて来る途端、夫れとなく巡査交番所の前を通り過ぎんとした折、査公其様子を見て何となく怪しい者との嫌疑を抱いたが、突如、「オイこれ待て」

と某を呼び留めた、不意を喰つた某も驚いて二三歩後ずさりをしたが、氣も落付いたと見えて、更に査公の前に進み、

「何か私に尋ねる事でもあるのですか」

と反問した、處が査公怒るまいものか、

「尋ねる筋があるから呼び留めたのだ、一體貴様は何といふ名前で、何を職として居るか、夫れに今何をして来たのか、何處へ歸るのか」

と劍もほろろの尋ね方、これには流石温厚の某も黙つて居られない、忽ち査公に向つて、

「如何に貴方は巡査でも餘りに權柄な口のきゝ方ではないですか、職權上お尋ねになることがあるならば、それは決して彼れ是れは申しませぬが、一體全體人民に向つて突如「オイこれ」とは何といふ亂暴な言葉遣ひではないでせうか、成程私は以前は相當の職に就いてゐたですが、只今は失職致して本日は口を探しに東京に參つたのです、これが毎日の如くであるので、失望して道すがら考へ／＼して来たものですから、貴方の前を通り過ぐるにも一向無關心で通つたのです、夫れに殆んど四月以上も失業して居るので、此通りきたない風装になつてしまつたのですが、貴方にお尋ねを受

けるやうな悪事は致した覚えはない、然るを貴方は只私の風装のみを見て、忽ち輕蔑なされ「オイこれ」なぞといふ亂暴な口をお聞きなさるのですか、人民保護の重任に當る警官としては、今少しく丁寧な親切なお言葉を使つてもよろしいかと思はれます」と切り込んだ、すると査公は負けては居ず、

「オイこれ」といつたのが何が悪いか、尋ねる理由もあり、職權もあるから尋ねるのぢや、先きに質した通り姓名、住所職業を詳しく語れ、夫れに今日何處へ行つて来たのか」と益々横柄な訊問振りに、某も以前は某會社の社員であつたが、妻には長い間病氣であつた上に、己

れは人減しにあつて會社をやめさせられ、又候妻は病死したといつたやうな不運不幸續き、一日も早く就職せねば二人の遺子を教養することが出来ぬといふ悲惨な境遇であつた、爲に毎日職を探し廻はつたが、運の悪い時は際限のないもので、歸宅の途中査公の横柄な訊問振りに一時はグツと憤慨したが、相當の教育もあり常識もあるので、査公の間はるゝ儘に答へると、査公は一段語氣を高めて、「嘘を吐くな、元來貴様は生意氣だ、本職の言葉聲などを捉へて、彼れ是れ言ふなどは以ての外だ、會社の社員でもした者が如何に零落すとも、その様な風装をするか、眞實のことを語れ、嘘を吐く

と本署に引致して留置場にプチ込むぞ」

之れには益々昂憤且呆然たらざるを得ない、某も今や勘忍袋の緒は切れて、巡查も何もあるものか、横暴極まる此行動に對しては、何處迄も抗争して正義の爲に一身の犠牲を顧みないといふ強い決心を抱いた、そこで互に口争を試みたが、其揚句査公は、

「貴様の様な奴は留置場へプチ込んでやるから、本署に來い」

といつて、無理矢理に某を連れ本署に行つた、査公は直ちに上官に報告したかと思ふ間もなく再びやつて来て、某に向ひ、

「何でもよいから此方へ來い」

といつて警察署の奥の方へ連れて行く、某も自分は寸毫拘束を受ける理由はないと抗辯したが、最早其處へ行つては敵すべくもなし、同僚の巡查も居て「マー何でもよいから黙つてゐる」との排言、とう／＼薄暗い留置場へほうり込まれてしまつた。

蚊軍と南京虫に攻めらる

失業者が交番で査公と一口争

一體警察署内の留置場程今に改善されて居らぬものはない、如何な時でも種々の犯人被疑者が少ない時は三十人、多い時には百人も收容して居る、六疊の坐敷に二十人も三十人も詰め込むといふのであるから、彼等が寸間となく吐息が空間に充滿し、一方空気の流通もないので、どの位苦しいことか分らぬ、場前の中央にはちやんと見張りの査公が椅子によりかゝつてゐて、場内の各々に向つて監視の眼を去らない、日中は坐つたきりで横になることも出来ず、互に話をすることも禁じられてあり、大小便にもちやんと時間が定まつてゐて、時間外には決して許さぬといつた鹽梅式、夜は薄い毛布一枚で俗に謂ふごろ寝、夫れに例の南京蟲と蚊に攻め立てられて、寸時も睡眠する事は出来ぬ苦しさ、始めて留置場へプチ込まれた人はどの位苦痛に堪へぬか知れぬ位、三度の食はまづいこと夥しい程で、とても普通の人には口につけられたものでない、某は今でこそ失業の爲に生活に困つて居るが、會社に勤めて居た時分は夫れ相當の生活をして居り、學歴とても中學を卒へた後某私立大學の商科を専攻して居る、彼れ不幸にも妻の重病に永の看護で會社を折々缺勤したのと、其會社が經營難で減資に伴ふ事業の緊縮から、自然社員淘汰の渦中に入つて退職の止むなきに至つた、物の道理は辨へて居り常識に於ても彼れ査公の如きものではない、理か非でもヘイ〜といつて査公の前に頭を垂れて、

哀願的態度を執つて居れば何でもなかつたものを、だが苟くも男子たる以上は、さう人權を蹂躪されても沈黙して居る程の意氣地なしにはなつて居られぬ、そこで彼れ査公と口争したのが、抑も飛んだ災禍を招く一因とはなつた。

やがて一夜は南京蟲と蚊に攻められて一睡も出来ず、翌朝になつて司法主任の呼出しとあつて、留置場を出て主任の室で取調べを受けた、某は率直に前日

失業者が交番で査公と一口争



の出来事の有の儘を答へた、茲でも矢張り脅される、脅かされようが脅かされまいが、事實は事實として答へる外はない、然かも査公が横暴極まる言動に付ては、極力其不法不當を鳴らした、司法主任は通例警部補か當る、警部補にでもなつたら少しは分りさうなものだが、之れが又一向に世路の艱難人情の機微を解しない、巡查を十年餘りも勤めて警部補となり、司法主任となつたのであるから、常に人を見ては泥棒と思ひ主義を固守して居る、交番の査公が得手勝手の手報告を信頼して、某の爲に不利の認定をなすべく意傾に見える、併し査公と口争したからとて、何も暴力を試みたのではないし、官吏の職務執行を妨害したのでもない、却つて査公の警察官としての心得方を誤つて居るので、これが若しも有力なる地位にある人を経て上級監督官廳（通例府縣では府縣知事、東京では警視總監）に上申でもしたならば、時に免職にもならぬ譯のものでない、其處が夫れ低い地位に在る人では斯る傳手を得られぬ、そこで警官の方では斯くも正義呼ばりをして、抗争する某に對して此儘放免するのは、何となく警官としての權威に關はるものと思料したが、有罪として處罰する方法はないかと考へ込んだ揚句の果は、例によつて警察犯處罰令の第三號に該當するものとして、拘留七日に處する旨の即決言渡をした、驚いたのは某、巫戯けた眞似をするなど大聲痛罵したが、如何ともすることは出

來ず、其儘留置場に逆戻りとなつた。

正式裁判の申立に就て

警察犯處罰令の第一條第三號には、「一定ノ住居又ハ生業ヲクシテ諸方ニ徘徊スル者」とある、かういふ人物は三十日未満の拘留に處すと規定してある、警察官の眼より見れば、某は失業者として現在職はない、故に生業なくしてといふ字句に該當すとの見解を有つて居る、勤め口を見付けるのかどうかは知らないが、諸方に徘徊して居る、例へ一定の住居があらうとも、斯る者は正に以上の罪に該當するものとして言渡したのであらう、随分苦しい解釋である、だが夫れは大に間違つて居る、成程現在生業はない、若し夫れ失業者が全國何萬人の多きに達して居る今日、生業がないからといつて處罰するとしたらどんなものか、さらばといつて諸方に徘徊して居るのではない、就職口を探すべく一定の場所に尋ねて行つた歸り途である、決して諸方徘徊してゐたのではない、元來本法の眞の精神は、一定の住居もなく今日は彼處の木賃宿に宿泊し、明日は宿賃がないので其處いらの鐵橋の下に一夜をあかすといつた風に、夜がなければブラ／＼と諸方を歩き廻はつて敢て爲す事もないといふ人のこと

で、斯る人間は往々空巢狙ひをしたり、乃至は放火などをするのが多い、従つて之を取締らなければ頗る危険であるからである、處が單に失業者といふ丈では彼等と違つて、何も斯る取締を爲す要もない、又敢て諸方を徘徊する事もない譯である、然るを廣義に之を解釋して、一時的失業者迄も『生業ナクシテ』云々の文句中に包含せしめんとしたこと、就職口を探し居つたのは當度もなく『諸方ニ徘徊スル者』中に加へたのは、以ての外の見解であり誤見である。

斯る不法失當の言渡に對しては、勢ひ不服を申立てられる、某も相當の教育はあるし、又此位のとて拘留七日の言渡に服従しては居られぬ、そこで早速警察署長に向つて、正式裁判を仰ぐ旨を申述べた、處が兎角警察署などは之が申立を阻止するの傾向がある、正式裁判の申立を爲すには、言渡を受けし日より三日間内に不服申立をせんと、其言渡は確定してしまふ、最早救済の道はない、何も知らぬ者には其儘拘留場にプチ込んで、不服だといつても構はず申立期間を経過させてしまふ、不都合も又甚だしい譯だが、こは萬一本人が不服で正式裁判を仰ぎ、區裁判所で無罪にでもなると、言渡をした警察署長の面目にも關する事になる、爲に斯る處置に出る例があると聞き及んで居る、コンナ事に出會つたら夫れこそ大變だによつて、手許に現金でも持参して居たなら、此金を保證金として納付

すべきだ、正式裁判を仰ぐには是非とも保證金を豫納して始めて一度留置場を出る事が出来る、出来れば何も心配はないが、此保證金を納めねば出場が出来ぬによつて、自然拘留場に入つて居たのでは、保證金の才覚が出来ない譯である、そこで此際は家族なり親戚なり知己に面會する際又は端書一枚でも出して、件の金を都合して貰つて、其金を警察署へ豫納して貰ふか、乃至は辯護士に依頼して萬端の手續を盡して貰ふ、辯護士が警察署に駆け付けければ、警察官も勝手な處置は執れない、若し執つた日には後日の大問題が起る、之を顧慮して本人及び本人の代理人たる辯護士の申出を容れて不服申立の手續を受理し、且放免をして呉れる、して此保證金は一日一圓の割で納付する、例へば七日の拘留なら七圓だが、その内一日でも二日でも言渡後拘留場に居れば、其日の分丈は差引いた残り丈の分を換算して納付すればよいことになる。

處で一旦出した不服申立書は、區裁判所の検事局を経て係判事の許に廻送される、やがて公判開廷の日が辯護士の許に通知して來られる、其日は出廷に及んで堂々と辯論をする、果して前の如き事實ならば、必らずや無罪の言渡を爲すことを斷言して置く。

正式裁判申立書式

先取特権で馬鹿を見た債権者

一一八

何府縣郡市區町村番地 職業

被告人 何ノ 誰

右私儀ニ對シ何々警察署ニ於テ被告ニ何々ノ所爲アリトシ何年月日科料(又ハ拘留等)ニ處スル旨ノ即決言渡有之候處該即決ハ不服ニ付正式裁判ヲ仰キ度此段請求致候也

昭和年月日

右

何ノ 誰 印

何區裁判所 御中

一八 先取特権で馬鹿を見た債権者

「先取權で此方へよこせと配當要求」

信用で金を貸した者の權利は無い

或人に信用で金を貸して居つた處が、期限が來ても却々返済して呉れぬによつて、止むなく貸金請求の訴訟を起し、一方假差押の手續を及んで、債務者の家財道具から商品などを差押へた、やがて裁判も確定し、いよく差押へた物品を競賣に附して、其實得金を以て返済を受ける段になると、計ら

れも幾人もの債権者が現はれて、配當加入の要求をして來た、其債権者中には信用貸もあれば、雇人の給料の請求もあり、家賃米味噌などの賣掛代金もあるといった風であつた、此債権額を合算すると一萬圓にも及んだが、借債務者の財産は僅かに二千圓内外に過ぎなんだ。

して見ると七千圓は不足する、加之に二千圓を各債権額に應じて按分比例で分配するかといへば、其處が夫れ法律上の解釋となる譯である、抑も民法には先取特権といふものが規定されて、他の債権者に先ちて自己の債権を請求し、賣得金から真先に辨濟を受ける權利者がある、其處へ行くと信用で金を貸した者の權利などは、他の債権者に引き比べて極めて薄弱なものである、そこで次の如き優先の順位が法規の上に定められて居る。

先取特権にも一般と特別とある

凡そ先取特権にも一般の先取特権と、特別の先取特権とあつて、(一)共益費用、(二)葬式費用、(三)

先取特権で馬鹿を見た債権者

一一九

雇人の給料、(四)日用品の供給をして爲に生ずる債権が一般の先取特権といふのである、今之を區別して詳細に説明しやう。

一、共益費用の先取特権 此は各債権者の共同利益の爲に於て債務者の財産の保存、清算又は配當に關する費用の支出を爲した場合。

二、葬式費用の先取特権 此は債務者が扶養すべき親族又は家族の身分に應じて出してやつた葬式の費用の場合。

三、雇人給料の先取特権 此は債務者の雇人が、受くべき最後の六ヶ月間の給料で、但し其金額は五十圓を限りとする。

四、日用品供給の先取特権 此は債務者又は其扶養すべき同居の親族並に家族、其僕婢の生活に必要な最後の六ヶ月間の飲食品、及び薪炭油の供給代金の場合。

で特別の先取特権とは、特定不動産及び特定不動産の上に有する権利である、して債務者の不動産の上に有する先取特権の生ずる債権は、

イ、不動産賃貸借の先取特権 此は其不動産の借賃其他賃貸借關係より生じた、賃借人の債務に

付て、賃借人の不動産の上に先取特権を有する。

ロ、旅店宿泊の先取特権 此は旅客其従者及び牛馬の宿泊料並に食料に付て、其旅店に存在する客の荷物の上に存在する。

ハ、旅客又は荷物運輸の先取特権 此は旅客又は荷物の運送賃及び附隨の費用に付て、運送人の手許にある客の荷物の上に存在する。

ニ、公吏の職務上の過失 公吏保證金の先取特権は、保證金を供したる公吏の職務上の過失に因つて、生じた債権に付て其保證金の上に先取特権がある。

ホ、動産保存の先取特権 動産の保存費を支出したる債権者が、其動産の上に先取特権を有する。

ヘ、動産買の先取特権 動産の代價及び其利息に付て、其動産の上に先取特権がある。

ト、種苗又は肥料供給の先取特権 是等種苗又は肥料の代價及び其利息に付て、其種苗又は肥料を用ひたる後、一年内に之を用ひたる土地より生ずる果實の上に先取特権がある。

チ、農工業の勞役の先取特権 農業の勞役者が最後の一年間、工業の勞役者に付ては最後の三ヶ月間の賃金に付て、其勞役によつて生じた果實及び製作物の上に先取特権を有する。

更らに不動産の上に有する先取特権に付ては、次の如く規定してある。
A、不動産の保存 不動産を保存してやつた爲に生じたる費用に付ては、其不動産の上に先取特権がある。

B、不動産の工事 不動産工事の技師とか請負人が、債務者の不動産に關して爲したる工事の費用に付て、先取特権を有する。

C、不動産の賣買 不動産の代價及び其利益に付て、其不動産の上に先取特権がある。

斯く其原因及び目的に依つて、債権者の有する先取特権の上に前後優劣がある、然らば其優劣即ち順位に付て、特権が競合つた場合は、何れが先になるかといふ疑問が起る、即ちこれは次の説明によつて明瞭する。

先取特権が競合つたとき

先取特権の競合に付て、其何れが先順となるかは、次の區別によつて諒解しやう。

一、一般の先取特権の競合つたとき は其優先権の順位は共益費用、葬式の費用、雇人の給料、日用品の供給といふ順序になる。

用品の供給といふ順序になる。

二、一般と特別と競合つたとき 特別の先取特権は一般の先取特権に勝つが、併し共益費用の先取特権は、其利益を受けた總債権者に對して優先する。

三、同一の勇産に付て特別の先取特権が競合つたとき 此場合は其優先の順位はかうである。

第一、不動産賃貸、旅客宿泊及び運輸の先取特権。

第二、動産保有の先取特権、但し數人の保存者ありたるときは、後の保存者は前の保存者に先つ

第三、動産賣買、種苗肥料供給及び農工業勞役の先取特権。

處で第一順位の先取特権者が、債権取得の當時第二又は第三順位の先取特権者あることを知つてゐ

たときは、それに對して優先権を行ふことが出來ぬ、又第一順位者の爲に物を保存した者に對しても

亦同様である、果實に關しては、第一の順位は農業の勞役者に、第二の順位は種苗又は肥料の供給者

に、第三の順位は土地の賃貸人に屬するものとしてある。

四、同一の不動産に付て特別先取権の競合 した場合には、其優先権の順位は不動産の保存費、不

動産の工事費、不動産の賣買代金といふ順位である。

先取特権で馬鹿を見た債権者

先取特権で馬鹿を見た債権者

二四

五、同一の目的物に付て同一順位者のあるとき 此場合は各其債権額の割合に應じて、辨済を受け
る事になる、これは當然の次第である。

本件の場合配當を受ける順位

以上先取特権のあらゆる場合を説明した、然して本問題に付ては債務者の家財道具なり何なり差押
へたとすれば、其配當に付ては先づ家賃の滞納に對する家主の分が一番先きで、次は日用品の供給者
である、是等の債権を差引いた残りが始めて信用貸金を有する者に渡るといつた順序で、若し此間に
前申上げた先取特権者でも出て來ると、信用貸金の本は権利があつても、實は取れなくなつてしま
う事になる。

世間には能くある事で、高利貸が餘り慘酷な處置をするので、債務者の方では腹を立て、何うせ
借金を拂ふならば、家主や米やの方も拂つてやる、よし此上は家主や米屋に右の事情を知らせて、配
當加入をして貰はふといつて、早速通知してやる、家主や米屋も之を聞いて配當要求の手續に及ぶと
いつた風で、流石の高利貸も財産の差押文はしたが、結局一文の配當も受けずしまつたといふ話も聞

いて居る、コナナ事なら始めから酷い目に合はせないで、人情づくでいくらでも取立てへ行つたなら
ば、債務者も義理に責められて成崩して行つたであらうと、後悔しても今は及ばぬ事であつた。

一九 金持老婆の遺産は誰に落ちたか 『奇篤な青年と好運の娘の結婚』

ケチン坊の老婆が孤獨生活の淋しさ

或る老婆の金持があつて、亡夫の遺した財産を澤山所持して、裕福に暮して居る、だが氣の毒な事
には小供がない、これが老婆に取つて何より心淋しく感ぜられるであらう、處が此老婆は今に養子で
も貰つて跡目をつがせる氣も起らない、起らない筈だ性來極のケチン坊で、世間で聞けば老婆の財産
は十萬餘りと評判して居る、夫れだのに碌々旨い物も食はず、きれいな衣類も着ないといつた風であ
る、併し孤獨生活の何かにつけても不便であると思えて、時には人に會ふてもよまいことを言ふ、或
日のこと近所の青年で中學校の四年生、此青年が件の老婆の家に折々遊びに行つては、新聞などを讀

金持老婆の遺産は誰に落ちたか

一一五

んで聞かせたり、家庭内外の事などを手傳つてやるので、老婆も殊の外氣に入つて、「武雄さんく」といつて我子の如くに愛して呉れた、青年も暇さへあれば老婆を尋ねて彼れ是れと慰めてやる、老婆は折々「武雄さん」の親御に向つては、「武雄さん」の様な息子でもあればコンナ嬉しい事はないなぞと、美望の聲を漏らす事があつた、けれども近所での評判の吝嗇な老婆の事故、唯一人養子に呉れようといふ人もない、況して「武雄さん」の親御は倅を大學迄も卒業させて、將來立派な人物に仕立ようといふ心持であるから、斯るケチン坊の老婆の處へなどは養子にやらうなぞとは、夢更考へも起らない、老婆も親御の氣を引いては見るが、親御はいつしか話を他にそらして、之に應じないのであつた。

併し交際は毎日の如くに續けて行つた、「武雄さん」は依然として老婆の面倒を見てやる、殊に老婆が病氣で床にふせつて居る時などは、恰かも實親の如くに看病もしてやるので、老婆は或日武雄さんは勿論親御に向つて、

「武雄さんは眞實に可愛くてならぬのです、夫れに此老婆を能く面倒見てくださるので、其禮として何れは之れ／＼の品を差上げる積りです、書付けや何かをお渡しせなくとも大丈夫ですから、安心してゐてください」

と、事明細に贈與の品を表示した、「武雄さん」始め親御もまだ貰はぬ先に、どうも御親切は有難う存じますといつて、厚くお禮を述べて置いた。

病床に藏した風呂敷に巨額の財産

かうなつて見ると人情は又格別なもので、老婆の方も斯る誠意の存するからには、「武雄さん」も益々其老婆に親切を盡さざるを得ないのが當然である、そこで一層老婆の面倒を見たので、老婆も暇さゝいあれば折に觸れて、「これは武雄さんに差上げる品ですよ」なぞといつて吹聴する、處が老婆が風邪に罹つたのが原因で、僅か二三日位しか病床に就かなんだが、とう／＼死んでしまつた、近所の者が集つて老婆の親戚などに知らせる、親戚知己は何れも駆け付けて来て、これから葬式萬端の用意に取りかゝつた、其際何か遺言書見たやうなものもあるかと思つて、處々を探して見たが、夫れらしいものは何一つ見當らない、只一包みの風呂敷が老婆の敷いて置いた布団の下から現はれた、親戚の面々立會の上で開いて見ると、處々方々に貸した金の證文やら、國庫債券やら多數の外に、いつの間

にか日本銀行へ行つて取り換へて来たものか、五圓十圓二十圓と三種の金貨と五百圓、百圓紙幣と約一萬圓もあつた、これには一同も意外なのに驚いた。

葬式を済まして後に茲に遺産相続の問題やら、例の「武雄さん」への贈與品の問題が起つたのも道理である、あれ程毎日の如くに武雄さんを可愛がり、「武雄さん」には何々を差上げるなど、耳に聒のよる程に聞き飽きてゐるにも拘はらず、何等の遺言書だにないのは不思議も不思議、困つた事には親戚の者は「武雄さん」への贈與契約の話は聞いて居らぬ、やがて遺産相続で親戚の者共も各々に怨心が起きた、老婆の遺産は何の誰が近親だから、相続する権利があるとか、無いとかいつて、財産争ひが起つたが、此結末はどうつくか。

親族會て相続人に選ばれし福運娘

第一跡目相続人を定めなければならぬ、夫れが定まつて「武雄さん」への贈與問題が定まる、老婆が誰々を相続人にするでも遺言してあれば、夫れに越しての事はなかつたが、死ぬ迄財産がおしめてたまらなかつた老婆は、遂ぞ相続人を定められなんだ、そこでいよく親族會議が開かれる順序

となる、親族の者は裁判所に親族會員の選定を仰いで、茲に法規の親族會員が定まる、此親族會員は

三名以上で、第一回は裁判所に招集され、第二回後は老婆の宅なり乃至は親族の何れの宅でも招集して、會議を開く事が出来る、かふして親族會員が相続人を定める譯だが、皆相続法の上からすれば、法定又は指定の家督相続人なき老婆のあとは、

第一、配偶者 但し家女なるとき

第二、兄弟

第三、姉妹

第四、第一號に該當せざる配偶者

第五、兄弟姉妹の直系卑屬

といつた順序だが、老婆に兄弟あれば兄弟、之が無ければ姉妹あれば姉妹は妹、これもなければ兄弟姉妹の子供といつた順位になる、聞けば老婆の兄弟姉妹も悉く死亡して、末の妹の子がある、處が親族の多くは常に老婆の家に餘り出入せなかつた、老婆が世間稀れに見るケチン坊で、是等血族との間柄も仲がよくなかつた、同胞の間故折々會つては老婆の平常に付て注意はしたが、却つて夫れ

金持老婆の遺産は誰に落ちたか

が老婆の心證感情を害して、

「お前達は妾の財産が欲しいからさういふのだらう、妾は妾の考へがあるから誰に世話にならんでも差支はない、だによつて妾の處へは來ないでおくれ」

といったやうな挨拶、流石の兄弟姉妹もあきれ返り、且は立腹の餘り殆んど出入をせなかつたとの話、然るに此ヶチン坊の老婆はあり餘る財産を遺して其儘最後を遂げてしまつた、そして死蔵された此十餘萬圓のお寶は、親族會の選定によつて、老婆の末の妹子の「美恵子さん」の手に歸した。

日頃老婆の愛せし武雄さん問題

美恵子さんは一人娘で、兄は家督を相續して某會社に勤めて居る、美恵子さんは目下某女學校に通學し、明年三月を期して卒業する都合で、成績も常に優等であり美容でもあつて、近邊での評判娘と言はれて居る、話は變つて「武雄さん」の方は老婆が贈與も話許りで文面での證據はなかつた、けれども老婆が贈與するといふ口辭は、本人及び親御さんは確かに承知して居るのみか、嘗つて老婆が出入の寺僧に同様の物語りをした一節が、此寺僧の證言によつて現はれた、寺僧は何よりの活證人で

ある、親族會員共は一概に之を否認し得られなんだ、成程民法には、

第五百五十條 書面ニ依ラサル贈與ハ各當事者之ヲ取消スコトヲ得但履行ノ終テオル部分ニ付テハ

此限ニ在ラス

と規定してある、老婆が生きてゐて、「武雄さん」には一旦呉れるといつたが、之は取消すともいつたならまだしも、死する間際迄は聞き飽きる程聞かされた、既にお禮迄も述べて居り、既に活證人のある以上は、如何に親族の者共も拒否は出來まい、尤も「武雄さん」の親御達は相當身代もあり地位も名譽もあることとて、ヶチン坊老婆の財産などは欲しいとは思はぬ、折角呉れるといふから有り難うといつてお受けをした譯である、加之に老婆の親族共とも親しい間柄であるのと、界限きつての「武雄さん」の評判はよろしいので、然かも老婆生前に彼れ是れと面倒を見てやつた事も認められて居る、そこに親族會員の一人から持ち出した提案が意外も意外、果して之は何事であらうか。

美恵子嬢の婿殿に武雄さんの配合

親族會員の一人の提案とは、先づ老婆配偶から同家の家系に説き及ぼして、我々親族會員は何れも

金持老婆の遺産は誰に落ちたか

同家の分家又は類家である、従つて本家たる同家を盛り立て、行くのが我々の第一の義務である、今茲に家督相續人は定まつたが、借夫れは遺憾ながら女子である、殊に明年三月は女學校をも卒業する都合で、然る上は他から相當の婿を取らねばならない、さあ其婿を取つたのはよいが、之れが此家に不孝をするやうな婿であつたならば、此家は忽ち亡びてしまうのみか、相續人はか弱き婦女子であれば、どの位不幸を見るか知らぬ、そこで一つ先方へは無理かは知らぬ、御承知になつて呉れぬか知らぬが、其處は我々親族一同が七つの膝を八重に曲げて、此本家が立つか立たぬかといふ場合故、強つてもお願をして婿養子に承知して貰ふ事にしてはどうかとの提議であつた。

一同の者は聞いてこは成程結構な話だ、實に名案だが、婿養子にするといふ目的の人物が名指されないで、他の親族會員から反問を試みた、「夫れなら婿養子にするといふ先方の人物は」と、こは當然出づべき質問であつたのである、そこで右の反問に對して彼は躊躇なく答へた、

「夫れは老婆が生前愛して居り、又老婆のことを朝夕となく面倒見て呉れたといふ『川上武雄』さんの事である、元來此家と川上さんの家とは、系圖に於ても世の信望に於ても、雲泥の相違がある、川上家は資産こそ遠く此家に及ばないが、併し川上家は代々人格者を出だして居る、夫れに本人の

「武雄」さんは學校の方も成績はよし、確とした人物の様に誰れしも思はれて居り、明年は中學校を卒業して、親御達は追つて大學にも入學させて、立派な學士さんに迄もするといふ決心であると聞き及んで居る、目下は修學の中途であるによつて、恰度兩人が明年卒業をした上で、茲に目出度結婚式を挙げ、本人は尙希望に任せて一二年も家政學や其他實際を修業させる事とし、「武雄」さんの方には本家に有り餘る財産中から學資を買ぐ事としたならば、寧ろ先きに老婆が「武雄」さんに僅か許りの物を贈與するよりは、双方の爲でもあり、第一此配偶に付ても決して非難の打處はないと思ふが、皆さんは如何で御座るか」

と切り出した、一同何の異議こそあらう、だが如何に此方が望んでも、川上家で承知するか否や、一應當つて見なければならぬ、否現下の状態上否應なく承知して貰はねばならぬとの一同の堅き決意を以て、其日は以上の如く決議し、翌日一同は揃つて川上家に赴き「武雄」さんの兩親に面會の上親しく老婆死後の跡始末の一條を物語り、是非共「武雄」さんを婿養子にと懇願に及んだ、昔から小糠三升持つたら養子に行くなどの諺言もあり、川上家とても「武雄」さんを養子に呉れなくとも、大學迄卒業させて獨立せしむる資金位はどうか出来るので、一應は謝絶したが、一同が川上家で承知

運轉手を電柱に縛り自動車を奪ふ

一三四

して呉れねば故人に對しても相濟まぬといつたやうな理屈をつけて、容易に其場を立退かぬといふ頑強振り、流石の川上親御も一同の熱誠にほだされたが、兎角倅が不在故倅の歸宅を待つて、倅の意見を質した上で一兩日中に挨拶する旨を答へた、一同は止むなく川上家を辭して歸宅し、一日千秋の思をして待つてゐた二日目に、再び川上家へ赴いて返事を求めた、川上親御も折角の思召に任せて、養子たることを快よく承知するとの返事に、一同は喜んで急ぎ親戚の者にも以上の報告に及んだ、斯くして老婆の遺産は選定家督相續人たる美恵子の相續する處となり、美恵子は戸主とはなつたが、後日改めて『武雄』さんが入婿となり、茲に目出度盛大なる結婚式は行はれ、『武雄』さんは妻美恵子の跡を承繼して戸主となり、全財産は武雄さんの有に歸したといふ實話を、此儘茲に紹介する。

二〇 運轉手を電柱に縛り自動車を奪ふ

『横濱に現はれた二人組の強盜』

暗がり自動車と現金を奪はる

近頃の話、午後の十一時十分頃、横濱市中區長者町三の六、山野タクシー方自動車運轉手中山長久(二三)が、中區曙町電車停留場附近から、二名の客を乗せて同區永田町切通しの暗がり差しかゝると、停車を命じ運轉手を引下ろしナイフを示して、

「騒ぐとバラすぞ」

と脅かし現金八圓と本人の運轉手免状を強奪した上、運轉手を電柱に縛りつけ、運轉手の襟巻で猿ぐつわを締め、乗つて來た水色塗り新フォード箱型七九七號を犯人が運轉し、東京方面に逃走した。

被害當時の状況を語る

中山運轉手は猿轡がゆるんだので、漸く救ひを求めた、之を知つた通りかゝりの人は、早速井戸ヶ谷交番に急報して助け出し、大岡署に連行した、同署でも横濱で初めての自動車強盜なので、直ちに非常線を張つたが逮捕されない、犯人は車中で、『横濱も三年前と違つて大分よくなつたね』と話し合つてゐた點から推察して、東京から入り込んだ失業運轉手に見込みをつけてをる、被害者中山は大岡署で語る。

運轉手を電柱に縛り自動車を奪ふ

一三五

運轉手を電柱に縛り自動車を奪ふ

「初めは何とも思つてゐなかつたんですが、暗がりでは止めろといはれてこいつは危いと思ひました、ナイフを出して脅されてから無我夢中でした、今考へて見ると運轉手免状迄取られてゐました、車は十月買つて四千四百マイルしか走つてゐないので、棄て値に賣つても千圓位には賣れます」

どの位の懲役を

受けるか



其後件の自動車は市中の某所に乗り棄てゝあつた事が分かつた、處が之れに似寄つた犯行が東京市外にもあつたので、其筋では同一犯人と見られて居る、時代の推移と共に斯る犯行を頻發するに至つては十二分に警戒を要すべきであるが、然らば以上の犯罪は刑法の何れの條項によつて處罰されるべきものか、申す迄もなく、刑法には、

第二百三十六條 暴行又は脅迫ヲ以テ他人ノ財物を強取シタル者ハ強盜ノ罪ト爲シ五年以上ノ有期

懲役ニ處ス

と規定してある、ナイフを示して、「騒ぐとバラすぞ」は詰り脅迫で、電柱に縛りつけしは正に之れ暴行である、而して彼れは現金は勿論自動車迄も奪ひ取つて、乗り逃げしてしまつたのである、然して刑罰の適用は五年以上の懲役とあるによつて、少なくとも五年以下の刑に處せられる事はない、然かも此種の犯行は普通人の家に入つて金品を強奪するのとは違つて、犯し易くもあり、又社會の恐怖心は一層甚だしい、此點からしても重く罰すべきであらう。

運轉手を電柱に縛り自動車を奪ふ

二二 貸金も打棄て、置くとき時効に罹る

「時効に罹る年限と罹らぬ算段」

賣掛代金請求の訴を起した

如何に債権があらうとも、永久迄も打ち棄て置くとき、時効といふものに罹つて権利が消滅してしまふ、あとに残るは徳義上の債務で、先方が薄情に出て返済さぬといへば、夫れつきりの話である、昔は人皆徳義を重んじて、法律上の制裁も徳義上の制裁も、同じ苦痛を感じ居つたが、近頃は徳義を無視する者が多くなつたのは甚だ以て遺憾である、借夫れに付て面白い實例といふのは、金を借りて先方が寛大にして居るのを却つて利用し、何年経つたからと時効を楯に取つて此借金は拂ふ義務はないと法廷で公言した者もあり、又白米始め炭薪を買つたのが、押しくに代金が滞つて、遂には商人の方でも取引を中止してしまつた、之を根に取つて如何に借金があらうとも、突然日常生活品の供給を差止るとは不都合千萬と、飛んだ理屈をつけて例の滞納代金を支拂はなくなつた、然かも商人

の方では主人又は店員をして折々督促に出かけたが、今日は主人が留守だとか、乃至は都合が悪いから、晦日に來て呉れとか、種々と遁辭を設けて支拂はぬ算段をする、商人の方でも根氣がつきて其儘放つて置いた、すると一年経つ二年経つで兎角時日が経過する、そのうちに債務者の方では大分財政も裕かになつたと見えて、家財道具なんかもチョイ／＼求めて、日用品は他の店から現金で威張つて取引する、件の商店の前を平氣で往復して知らぬ顔を装ふて居るのに、店主も之れには立腹せざるを得なかつた。

「何だ巫戯けた事をしやがる、毎日生命を糶ぐ米や味噌醬油を買つて代金を拂はぬ癖に、平氣で自分の前を通つても一言も挨拶はしない、加之に近頃大分工合がよくなつたので、自店の仇敵同様の同業店からわざと取引をするなどは、随分當方を馬鹿にして居る、此上は裁判所に訴へて前の取引代金を請求してやらさならぬ、今となつては損得の問題ではない、意地張りづくだ」

と許りに大の立腹、其翌日區裁判所へ行つて所内の代書人に認めて貰つて、出したのが「賣掛代金請求の訴」と題する訴狀。

被告は何處迄も時効を楯に取る

間もなく被告の處へ訴状と共に呼出の通知が郵送されて来た、被告は此位のことにはあるべきものと豫てから覺悟はしてゐたので、少しも驚く氣色はなく、よし公判日には裁判所で原告を反對にやつてやると意氣込んでゐた、やがて其日は到来した、原被告兩造は取調を受け、原告から夫々證據物を出して請求權を主張すると、一方被告の答辯は意外も意外、次の如くであつた。

「成程原告の主張通り原告と被告は永年取引を爲し、米味噌の代金未拂の分が何程位あるに相違ない、此點は之を認めるが、併し原告と取引をやめてから最早二年と二ヶ月に當る、して見ると既に此債權は時効に罹つて居る、いつも晦日に支拂ふ約束となつて居るが、何年何月三十日から起算して、既述の如く時効に罹つて居る故、被告に支拂の義務はない、依つて被告は民法第四百五條を援用して、此主張を爲すと同時に「原告の請求を棄却す、訴訟費用は原告の負擔たるべき」様の御判決を願ひたい」と答辯した。

さあ之れには原告も面喰つた、被告は借金があるが今日となつては返済する義務がないと主張する、成程貸した時から起算すれば二年二ヶ月も経過して居るが、此間内金も入つて居る、幾度も催促に行つた時、晦日に拂ふとか、一日に拂ふとかいつて一時通れをして今日に及んだので、決して原告は其儘に放つて置いた譯ではないと主張したが、被告もさる者で、原告は催促に來たかは知らぬが、いつも家内は不在勝が多いのと、時偶原告方の店員が來ても「何か御用は」といつた切りで、代金の請求はした事はない、彼様な譯で内金などは其後一文も入れたことはない、其入れぬといふのは少し理由があります、どうも原告は愆張で永年取引して居る得意の被告等に向つても、近所の他の同業者よりは必らず一二割から三割方も高い、被告は少し高いぞといつて注意してやると、今度は品質を落したり、量を減らす、實に不徳極まる處から感情づくとなつて遂ぞ延滞した譯です、原告も斯る弱點があるので、少し許りの延滞金は請求の出來た譯でもない、従つて二年二ヶ月餘も放つて置いて其儘にした譯なので、内金を被告が拂つたなんかの夫れとも確たる證據はあるか、あるならば見せて欲しいと、かう敢然として抗辯した、其結果如何に判決されるか。

時効で失権する債権の年限

一體全體此問題に付ては、債権消滅時効の年限を承知して置く必要がある、兎角法律に通じない方は此時効といふものを深く注意しない、之れが抑も債権を失ふ原因である、今民法第六十七條以下の規定によれば、

- (一) 貸金其他の普通債権 返済期限又は請求し得べき時から十年間内に、法律上有效の請求方法を執らぬと、時効に罹つてしまふ。
- (二) 家賃地代の如きもの 即ち年又は之れより短き時期を以て定めた、金銭其他の物の給付を目的とする債権は、請求し得る時から五ヶ年内に請求方法を執らぬと失権する。
- (三) 醫師の薬價、診察料、技師、棟梁及び請負人の工事に關する債権 は、三年間内に請求せんと時効に罹る。
- (四) 卸小賣商人の賣掛代金 生産者から問屋に、卸商人から小賣商人に、小賣商人から普通の家に賣つた産物、商品の代金の如きは、請求し得べき時から僅かに二年を経過すれば時効に罹る、

此外。

居職人及び製造人の仕事に關する債権、學生の月謝、止宿の代料に關する校主、塾主、教師及び師匠の債権の如きも二年時効となつて居る。

(五) 僅かに一年で時効に罹るもの 此は月又は之れより短い時期を定めた雇人の給料、勞力者及び藝人の賃金、竝に其供給したる物の代價、運送賃、旅店、料理店、貸席及び娯遊場の宿泊料、飲食料、席料、木戸錢、消費物代價並に其立替金の如き、又動産の損料も一年經つと、請求しても先方が時効を主張すれば、權利がなくなる。

先づかういつた譯で、徳義上から見れば、借金は何年經つても借金だが、先方が不徳義にも時効を楯に取つて支拂ふ義務なしとすれば、夫れは請求權はなくなつてしまふ筋合になる、殊に賣掛代金や飲食代金、遊興費の如きは知らぬ間に時効に罹る故、決して油断してはいかぬ、尤も事情によつてはさう厳しく催促も出来ないし、又催促しても財政不如意で支拂はれぬ事もある、此場合暫くの間は猶豫してやらねばなるまい、其猶豫してやる間に時効に罹らぬ事もない、折角親切に待つてやつたが、夫れが爲に時効を楯に取られて、反對に支拂ふ義務がないなぞと主張する不徳義漢もある、だによつ

貸金も打棄つて置くとき時効に罹る

貸金も打棄つて置くとき時効に罹る

て一方に猶豫はするが、他の一方には永久迄も権利を失はぬ算残をするが必要である、夫れには次の手続を執らねばならぬ。

時効に罹らぬ算残をする

どんな事をすればよいのか、夫れは前に説明した各債権の時効年限中に、公然と請求をする、主人や店員が行つて催促したとて、後日其證據が残らぬ事が多い、先方は催促を受けた覚えはないと抗辯したなら、夫れつきりの話である、だによつて此請求は債務者に支拂命令の送達を爲すべく裁判所に申出るか、賣掛代金請求の訴を起すといつた風、若し裁判所の請求ならば、内容証明の郵便で請求をする、之れなら先方へ請求したといふ證據が残る、特に此時配達證明を郵便局から取つて置く、此外に假差押又は假處分をするなり、先方が此債務は何日に支拂うといつたやうな承認書を取つて置くのもよい、只茲に心得て置いてほしいのは、内容証明での催告は、催告後六ヶ月内に裁判上の請求、又は和解の申立、假差押假處分といつたやうな、裁判上の手続をせぬと、前に出した内容証明の催告が效力を失ふてしまうので、始めから催告せぬと同じことになる、素人は一度内容証明でも出せば夫

れで安全と思つて居るが、これが大なる間違である。

假りに賣掛代金の請求ならば、其代金を請求し得べき時から二年経たぬうちに、早くも念の爲に前の有効な手続を執る、さすれば時効は中断されて、其時から新たに時効が進行する、言を換へて申さば、更に賣掛代金は二年、飲食代は一年を経過せねば時効に罹らなくなる、殊に裁判中は時効の進行を停止してしまふ、そのうちに何とか裁判は確定する、確定すれば夫れで永久に債権は認められて、債務者が餘裕の出来た頃に、財産の差押でも何でも出来る事になる、近頃は人情が輕薄になつて、借金なんかを尻とも思はぬ人が多によつて、呉れくも注意せねばなるまい。

時効で敗訴した一例

以上の説明で原被兩造の勝敗も御諒解になるであらう、原告たる債権者はよむ其債権を認められても、執るべき手続を執らなんだ爲に、可惜時効に罹つてしまつたのである、被告は徳義上は何年経つても支拂ふべき義務がある、けれども徳義を無視して出た日には、法律上賣掛代金であらうが、家賃であらうが、時に時効を楯に取つて、最早支拂ひ義務なしと主張し、原告の請求を突つ放す事が將來

貸金も打棄つて置くとき時効に罹る

る、かうして本件も被告が突つ放した、裁判官は其真相が心中では分つてゐても、證據がなくては被告に敗訴を言渡す事は出来ない、然かも一方原告は時効に罹るまで權利の上に眠つてゐた、此一事に徴して一方の主張が時効を援用したからには、法律上如何とも致し様はない、茲に始めて原告の請求は之を棄却し、訴訟費用は原告の負擔たるべしとの、被告の要求通りに判決が言渡された事がある、かうなつては最早控訴上告をした處で、原告に恢復の途はないのである。

二二 前住者の電燈料滞納と現住者

『現住者は支拂ふ義務あるか』

むさしやの主人が社長以下を訴ふ

東京は麹町區富士見町四ノ八四、四谷むさしや營業主鈴木吉祐氏は、東京電燈會社を長郷誠之助副社長小林一三、當時營業部長秋原泰吉、西部營業部長福島宜剛、前料金課長熊谷健藏、集金掛安田孫市の六名を對手取つて詐欺恐喝業務妨害罪で、二十五日（昭和六年三月廿五日のこと）東京地方検

事局に告訴を提起したとか。

其理由を聞くに、原告鈴木氏は去る三年十二月十七日破産した、舊武藏屋吳服店の商品設備一切と、建物使用權を東京區裁判所で管財人から競落して開業したか、被告訴人等は歳末繁忙の際奮むさしや吳服店が未納になつてゐる、電燈料金千二百十五圓二十七錢の支拂方を告訴人に請求し、告訴人が之に應ぜざれば直ちに送電を中止すべく斷線すると、多數の工夫を店内に派遣して脅迫した、當時店内は顧客の爲に混雜して居り、消燈されては多大の損害を蒙るのみならず、信用を毀損されることを虞れ、再三店員を會社側に派して、前住者の電燈料を後住者が支拂ふ義務なきことを力説して、其不當をなじつたが、被告訴人等は頑として聽き容れず、直ちに消燈手段に出づべき態度を示したので、止むなく前記千二百餘圓を納入した、其後會社側から請求して來る毎月の電燈料金三十回中二十二回迄請求過大で、合計四百八十圓餘を不當に請求した、然かも前住者の未納を後住者が支拂ふ義務は、法律的に何等根據がなく、是等は獨占會社たる被告會社が、從來多數需用者に對する常套の不正手段であるから、一般の爲に告訴を提起したものである』といふので、其結果は大に注目されてゐる。

現住者に拂はせたり量器計算の胡麻化し

むさしやの志田事務は語る、「先住者の滞納料金は、後住者から取立てることは、何としても不當です、現在のむさしやは前の武藏屋とは全然別個のもので、無関係なのだから前武藏屋の滞納料金は、破産管財人から取つて貰ひたいと理を盡して説明しても、會費では背かないのです、此實例は私個人の場合も府下に借家した際、先住者が滞納して行つたのを支拂はないといふので、家は借りたが三日間電燈をつけて貰はれなかつたことがあつた、毎月の請求書もメートルの計算が素人では容易に判らないので、私共が専門家に頼んで、苦心して計算した處、三十ヶ月の間に二十二ヶ月は胡麻化して過大請求をしてゐたのです、私共の微々たる聲が一般の反省になればと思つてゐます」と。

東電の所長の言ひ分は

此方は東電の岩田所長の語る處によると、前住者の滞納を後住者から頂くことは、しばくあることで、兩者繼續の場合には後住者から納めて頂くことになつて居る、むさしやさんの場合には先方と

話し合ひの上で頂戴したと思つてゐる、計算書の間違ひも前に差上げた計算書と、後に差上げた計算書と喰違つてゐたといふやうなことです、後から差上げた分は係りの者が非公式に差上げたもので、果して間違ひであるか否か、未だ判らない」といふことである。

聞かれよ著者の處信

前住居人が電燈料を滞納した儘、何れにか引越してしまつたとすれば、夫れは後の住居人には何等の責任はない、斯る責任を負はす事は法律上全く不法である、電燈會社がソンの規則みたいの事を作つて、之を使用者に履行させやうとしても、夫れは不法の契約で全然無効である、獨占的經營事業の強味につけ込んで、現住居人に拂はせるとは論外である、實際拂つた者は點火が出来なければ一夜でも困るから、争ふても面倒故支拂つてやる文の話である、電燈會社は家主と借家人とを連帶義務者とさせる事に、豫め方法を講じて置くが適策である、借家人から點火を申込んだ際に、そは家主が承知したかどうか、家主に會社の規定を示して、點火を承知するからには、滞納料金に付ては連帶義務であることを明示し、承諾の上で調印させ、其上で點火の設備をするがよいではないか、元々家主の家

屋に點火し設備するので、家主にも利害關係を持つて居る、處が現住者には新たに契約する譯で、前任者の契約に拘束される理由はないと信する、従つて現住者に對し前任者の滞納料金を請求し、之に應じなければといつて脅迫染みた事をするのは、正に之れ社會の公安を害し秩序を紊るものであると思ふ、理屈上より申さば會社の直接關係人は是等に對して、刑事上の責任は免かれまい、併しそこが夫れ程度問題と、其當時の意思によつて解釋もされる。

次にメートルの計算の誤算は、電燈會社許りでない、瓦斯會社などにも往々あるのは立證に難くない、彼等は圖々しくも係り員が勝手口からのこゝと入つて来て、不可解にメートルを見て之れを記帳し、其儘歸つて會社に報告し、會社も夫れによつて料金を集金人に依つて取立る、此方が思つたよりも殆んど三倍位の料金を請求する事があるのに驚く、これは全く係りの者の誤算である、各個人の家庭では誤算を主張する特別の智識経験もないので、其儘泣寝入をするが、實は不都合の甚だしきものであることを認めて居る、従つて此場合は係りの者が計量針を見に来た際に、親しく立會つて家人も針の指す處を詳しく誤らず記帳して、且例月の夫れと比較し、料金が間違つて居ると見たら、直ぐに會社の方へ電話なり、乃至は書面で認めて再調査をして貰ふがよい、獨占經營の會社文に黙つて居ると

勝手な事をされ易い、長い月日にはどの位損するか知れぬのを思へば、決して放任して置けぬ損失である。

二三 うば櫻が結納金を詐取

「華族の令嬢と稱して三萬圓を」

結婚して間もなく姿を隠す

東京は四谷署で、海軍將校やら代議士さては札幌商業會議所役員其他著名の士を召喚し、極秘に取調中であつたが、夫れは市外大久保百人町一六八土木請負業の小坂吉保方、濱田とく（當時三八）が昨年から結婚媒介所に、資産五十萬圓ある代議士未亡人又は華族の娘なりなぞと申込み、結納金や手切金一時金を詐取したる關係人として取調べをした、一體此とくといふうば櫻は、昨年一月七日日本所二葉町資産家山口直吉（當時五六）と結婚する事となり、結納金二百圓を詐取し、日比谷大神宮で結婚式を擧げて二日間同棲した後、郷里の父が鐘詰工場を持つて居るので、一寸行つて來るとて外

うば櫻が結納金を詐取

出した儘姿を隠し、其後某所技師で某大學の教授有本岩藏（當時四八）から代議士の未亡人と稱して結納金三百圓を詐取し、之れ又一ヶ月間も同様してゐたが、例の如く有本の宅を飛び出して所在を暗まし、今度は四谷愛住町の海軍少佐松島順次郎（當時五八）と結婚し、結納金三百圓を詐取したもので、此外に同様手段で札幌商業會議所役員某其他實業家や著名の士三十餘名から、約三萬圓餘を詐取した事が判明した。

時に結婚媒介所も共謀

右様な例は時偶あることで、時には結婚媒介所と共謀して其處彼處と結婚の約束をしては、例の結納金を詐取したり、乃至は家人の隙をねらつて俗にお目見得泥棒を働いたり、いつかな難題を持ちかけて別れ話に手切金を取つたりする毒婦を見受ける、こは一には其婦人の身元を詳しく取調べての上でせぬ輕卒のそしりも免かれぬし、又一方悪結婚媒介所の巧妙な口車に乗せられて、ウかと約束する事もある、又斯る毒婦は美貌でもあり口前も上手であり、一見して男の方で魅せられる、果して彼れは華族の令嬢であるか乃至知名の士の未亡人であつたかは、男の方に取つては一生の大事である。

によつて、十二分に調査して見るが當然であるにも拘はらず、見合をすると忽ち其美容にほれ込んでしまつて、他を調べもせないのが何よりの失態である。

毒婦の處分と被害者の主張

處で右のうば櫻は如何なる罪によつて處分されるか、申す迄もなく詐欺の罪に該當る、華族の令嬢だとか、某大家の未亡人などと出任の事をいつて、相手方を欺罔して結納金を詐取した、従つて正に刑法の第二百四十六條に該當する、若し媒介人が共謀しての上の事ならば所謂詐欺の共犯であり、よし媒介人が規則相當の周旋料文を受けてやつた事でも、華族の令嬢でもなければ、大家の未亡人でもない婦人を、彼れの言ふに任せて己れも又斯く觸れ込み、結納金を取らせるに至つては、他人をして之を得せしめたる者云々の所爲に當るを以て、同じく詐欺の罪に問はれる。

更に被害者側では先きに渡した結納金の取戻しを請求する権利は勿論、結婚の爲に要したる諸般の費用に付ても、之れが損害賠償を請求する権利がある、だが斯る悪事を巧む婦人は、他に碌な事もして居らぬによつて、折角詐取した金をいつ迄も持つて居る氣支はない筈で、私訴を起した處で實際は

花合せの最中不意の夜嵐
賠償を受けられまいと思はれる。

二四 花合せの最中不意の夜嵐し

『何んな場合に有罪無罪か』

刑事に踏込まれて珠數繋ぎ

兎角人には何等かの道樂がある、其うちでも酒と女と賭博の三拍子揃った日には、決して其身が立ちやうもなければ、一家の幸福な生計も全うし得られない、殊に賭博は法の禁する處で、決してやつてはならぬ譯のものであるが、夫れをちやんと心得て居ながら、儲やつて見ると面白くてたまらない、或夜のこと五六人の同志が集つて、例の花合せをオツ始めた、夫れがほんの樂みがてらに、敗けた者に菓子でもおごらせる約束で（菓子を買つて置いて）花合せをやるといふならまだしも、さうでなくして單に金錢の取りやりに過ぎなかつたのと、其夜許りでなく、毎夜の如くに花合せをするのでいつしか警官の耳に入つた。

刑事殿は今晚こそは踏み込んで珠數つなぎにしてやらうと身構ひをして居るのを、神ならぬ彼等は夜の十二時過迄も盛んにバチリくとやり居つた、刑事殿數名は其家の周圍に手を分けて様子を窺ひつゝ、いざ鎌倉といふ寸間に其家に飛び込んだから堪らない、一同且驚き且狼狽て込んで便所に隠れるやら、二階から隣り家の家根傳へに轉がり落ちて腰を抜かすやら、一時は大騒ぎを演じたが、既に四方

花合せの最中不意の夜嵐



に手が廻はつて居るので、とても助かる筈はない、一同は勿ち刑事殿の繩目にかゝつて珠數繫ぎ、現場にあつた黒赤一組の花合せや布團の下に置いた各自の現金などは、證據物として押收され、一同警察署に護送、例によつて例の如く留置場に放り込まれてしまつた。

身柄引請て一時出場を許さる

彼等各自の家族共はどうなることかと、心配の餘りに親戚や知己の許に駆け付ける、偶々其町の幾多名譽職にあつた著者の處へもやつて来て、泣いて何とか心配して貰ひたいと訴へた、之は罪を犯せし彼等の事として、十分に彼等を憐愍して眞面目に本業に精を出させたいのが著者の眞意だが、併し又其中には突然其家に遊びに行つて、交際にと勤められて止むなく仲間に加はつた者もあれば、明日にも縁がなければ妻子の生活にも困る者もあるといった風で、殊に彼等の中には著者の人格學識を慕ふて、いつも選挙の際には貴重の一票を候補者たりし著者に投じた事もあり、斯る次第で黙つて居る譯にも行かず、止むなく警察署に赴いて事實の眞相を聞き正し、取調済の後には身柄引受の上、一時出場を差許され度旨を願出に及んだ。

話は變つて警察署の方では、翌日早々係主任が被告人各々を呼出して一切の取調べを爲し、聴取書を作つて聴み聞かせ、各被告人に署名捺印をさせる、前申した通りに、餅菓子やせんべいでも賭けたなら、刑法は第八十五條の但書に「但一時ノ娛樂ニ供スル物ヲ賭シタル者ハ此限ニ在ラス」とあるので處罰されないが、現金を取引したり、乃至は石や紙札で現金に換へて置いて、後に現金と交換計算するが如き場合は、決して其罪は免かれない、殊に困つた事には、仲間のうちに前に賭博の前科者もあつた、彼等と共に花合せの賭けごとでもすると、重く見られて到底罰せられぬ譯には行かない、之れに反して仲間の何れもが嘗つて賭博罪などで罰せられたこともなく、よしんば現金の取引をする約束でやつても、其場に現金でもなかつたならば、實は蕎麥のおごりをやつたのである位の申條で、其筋でも微罪不檢舉として將來を戒飾して、其儘放免して呉れるかも知れまいが、さうでない限りは決して不問に付さぬ、聴取書に署長の意見書を添へて、事件を區裁判所の検事局に送る、被告人等は親戚の者か何かの願出によつて一先身柄引受をさせて留置場から出して歸宅を許すのが常である、然るに彼等の中には前科者もあつたので、著者の熱心なる願出文は署長の容るる處となつて、身柄引受書を出して本人等は一旦歸宅をば許されたが、其後數日を経て検事局から呼出があり、被告等は出廷

して茲に公判は開かれ、前科者たりし被告は罰金五十圓也に、其他の者は二十圓の罰金を言渡された、刑法の條文には第百八十五條に千圓以下の罰金又は科料に處すと規定してあり、之れが常習としてやつた者は三年以下の懲役に處すとあるから、十分に注意せねばならぬ、近頃流行る富籤即ちチイハの如きは、發賣者は二年以下の懲役又は三千圓以下の罰金に處せらるべく、富籤發賣の取次をした者は、一年以下の懲役又は二千圓以下の罰金に處せられる、此外富籤を授受した者も三百圓以下の罰金又は科料に處すとあるが故に、例へ十錢二十錢のチイハを買つた者でも、其何十倍何百倍の罰金に處せられるかも知れない、詰らぬ事はせぬに限るのである。

一人は其場を逃走他は判決を言渡さる

處が前記賭博者のうちで、逸早くも其場を逃げ出し逮捕を免かれた一人は、其後己が宅へも寄り付かぬ様子、さりとして何處へ行つたか分らない、よし家族が所在を知つてゐたからといつて、夫れを警官に自白することも無いのは人情の常である、後にて聞けば彼は埼玉縣の知己を尋ねて、事情を明かして其人から旅費を借受け、新潟縣下に赴いて鐵道工夫の入夫に雇はれて毎日稼いだ、直接妻子の許

に發信すれば何時しか處在を其筋に嗅き出されると見たか、離れた知己の處へ手紙を出して妻子への音信やら、生活費の幾分宛を送り越した、かうして彼は滿三ヶ年以上も眞面目に稼いで、漸く妻子の許に歸つて來た時は、既に刑の時効に罹つて最早法律は處罰する事が出来なくなつた、といふのは、此賭博の罪を犯した者が、三年未滿の懲役を言渡されたときは五年、罰金を言渡されたときは三年間逮捕されずに居れば、時効といふものによつて其刑の執行を免かれる、罰金位ならばまだしも懲役では例へ一年半歳でも、刑務所へ行つて勞役に従事する事は辛い、一層のこと何れかに逃げ匿れて時効の恩典に浴するの外はないと決心する者もないではない、處が賭博の罪を犯したが、仲間の者が六人の處を五人しか其處に居らなかつたとしても申述べて、其一人を助けてやつたとすれば、結局五人しか賭博をした者はないといふ事になるかも知れぬ、(六人が犯したといふ事實が明瞭せぬ場合)併し實際は六人で其一人は前の如く何れにか逃うせた、そこで裁判所は五人の被告に判決を言渡し、一人文は判決に漏れたとして、彼は其後一年を経て家に歸つた場合は、檢事が公訴を起さざりし故に、其犯した日から六ヶ月を経過すれば、所謂公訴の時効に罹つて罪を受けんで済む、被告人には極めてありがたい規則だが、併し時効といふものは公益の爲に設けたので、決して被告一人の利益の爲に設けた譯

ものでない、いつ迄も形が付かずに置いては證據も湮滅すれば、犯人も刑の制裁を受けぬとしても、受けた以上苦痛を感じつゝ世を送つた、夫やこれやで公訴の時効とか刑の時効といふ制度が設けられたのである、夫れにしてもつまらぬ事で自身は勿論、妻子や親族の者に心配やら、迷惑をかけるのは、蓋し將來の大不利益である。

二五 買戻しの特約と登記せなんだ失態

『地方の名望家が千慮の一失』

買戻す積りて低價に賣渡した

或地方の名望家が區長や村長などになつて、郷地の爲に貢獻した、昔から町長や村長などに推し擧げられると、屹度身代を潰すと迄言はれて居るが、本題の主人も其例に漏れず、徐々と身代を減らして其處彼處と借金が出來た、やがて期限が來て借金を返済すには不動産でも處分せねばならぬ破目に陥つた、祖先傳來の土地建物を賣拂ふのは身を切られるよりも辛い事ではあるが、併し賣らねば借

財が拂へない、止むなく或人に賣渡す事にはなつたが、そのうちに賣拂金額位の金は都合も出來よう、節約を守つて家事に勵んだならば、多少の貯金も出來るであらうし、又足りない處は親戚にも心配して貰はれよう、此場合に買戻をして元の如く自分の所有と爲し、祖先へもお詫が出來るとかう首肯して、買人に向つて三年間内に賣つた價格で買戻を承知して呉れる事に約束を定めて、比較的安く賣渡した、夫れも買戻を爲す際に、少しでも金額の少ない方が骨が折れぬといふ所存であつた譯である。

買戻しの口約はしたが立證に困つた

勿論當事者の間柄は平素至極懇親であつた、夫れ故賣渡の爲に名義變更の登記を済まして、買人の所有とはしたが買戻條件のことは單に口頭丈に止まつてゐた、件の賣人も買人もまさか口約を反古にする様な人物でないと堅く信じてゐたのと、又一つには買戻條件を登記することを忘れてゐたので、遂ぞ其儘になつたのが、抑も大なる失敗紛擾を招ぐ種とはなつた。

元來買戻の期間は十年を超ゆることを得ざるものとしてある、(民法第五百八十條參照)若し之れ

買戻しの特約を特記せなんだ失態

より長い期間を約束しても夫れは當然十年と看做される、又買戻の期間を定めなるときは、五年間を期限としてある、そして買買と同時に買戻特約を登記して置かぬと、若し其間に第三者にても其地の所有権が再び移轉した日には、先きの最初の賣主は買戻の特約があるからと故障を言つたとて、通らぬものとなつて居る、處で最初の賣主は買戻の特約があるからと故障を言つたとて、記もせず、さりとて當事者の間で秘密裡に買買契約及び登記を済ましたので、他に買買した事さへ其當時は唯一人知らなんだ、況して買戻の特約をしたなぞといふ事は知る筈はない、然るに其買人は二年後に突然腦溢血で死亡し、長男が其家督を相續した、やがて三年といふ期限も切迫したので、賣人は買人の相續人に向つて、貴殿の親父とは自分が先きに賣渡した地所に就て、三年間に買戻を爲し得ることの特約があつた、日頃親しい間柄故口約で相互に信用しあつた譯である、だによつて買戻しをしたいによつて御承知を願ひたいと申出た、此時彼れ相續人は何と答へたか。

亡父のしたことと一向知らぬとの答辯

成程賣人は地方の名望家であり、村長さん迄勤めたといふ人物、又一方買人は極々の堅人で常に賣

人の某と親しく、指導を受けてゐた仲であつた、處が其伴といふのは親に似ぬ大の好物で、家業の農事に勵んだならば何不自由なく暮して行ける境遇であつた、加之に現金も相當に親譲りをされて居る、普通ならば村の長にでも推されて村民の尊敬を受ける身分であるにも拘はらず、兎角つまらぬ社會と交際し、三百代言などを致して、外出するにも紋付羽織に袴の扮装で押し出すといつた風、利慾にかけては義理も人情もあらばこそ、コンナ性格であるによつて、賣人が買戻しの申出に對し、

「左様で御座いますか、親爺のした事で何が何だか一向に承知して居らぬのです、夫れ故能く書類を取調べた上で何分の御挨拶を致すことにしませう」

といつた様を返答であつた、何ぞ計らん彼は疾の昔に是等の書類は調べ抜いて居り、いざといふ場合には債務者の家財道具でも何でも不意に差押へしかねまじき人物、だによつて其後一兩日經つと彼は債務者に對して、書類取調べの結果と其意見とを次の如く申述べた。

「日外の地所の一件ですが、あれは書類を取調べました結果、單に賣渡したある丈のことで、別に何等の特約とか條件は附いて居らぬのです、御高見の通り御家に取つて大切の地所ならば、買戻しの特約が證文なりさては登記になり明記してある筈です、又さうなさるべきが當然かと思はれます、

買戻しの特約を特記せなんだ失態

如何に御懇意の間柄でも、何事當事者の一方又は双方が期間中に死亡して、あと子孫の代になつた時でもゴタ／＼の出来ぬやうに、萬端證書に明記して置くのが當然かと思はれます、然るに此事が少しも立證出来ぬので、夫れに親爺は金なんかは貸したことはなし、餘裕があれば地面を買ふといふのが唯一の遺業でしたので、折角買ったはいが、三年経つて取戻されるなどといふ契約は、どう見てもしたとは思はれませぬ、だによつて其儀は平にお断りを致します」

との挨拶であつた、成程表面は誠に情理を盡してあるが、彼れの腹の底ではちやんと民法の條文を讀んで覺えて居る、夫れに今日とは違つて其當時は地所が非常に騰貴して、買受けし當時より五割以上も高價になつて居る、夫れを賣つた時の値で取戻されるとあつては、算盤上引合はぬとの損益勘定からのみ打算して、毫も義理人情を顧みない、賣人側では右の挨拶に接して驚くまいものか、あれ程に彼の親爺と堅く約束をしてあつたにも拘はらず、俸の代になつては無情にも利慾の爲に斯る挨拶、三百代言の惡風を看做ふて、義理も人情も無視し、郷黨の排斥を受けるだに敢て構はぬといふ奸人物、此上は法廷に於て黑白を決する外はないと、嘗つて怒つたことのないといふ某も、此時許りは満面朱の如く立腹した。

惡奸暴怒に罹り被告にしてやらる

やがては之れが裁判所に持ち出されて、何月の何日に口頭辯論は開かれた、原被兩造は出廷に及んで原告の主張に對する被告の抗辯型の如くあつて、夫々證人も法廷に現はれて陳述したが、何を申すも買戻しの特約を本人の前で直接聞いた者はない、之れが原告側に取つての大なる落度であつた。

被告買受人側では只證文にもなし、又登記もしてないので、如何に大目に見ても買戻しの特約をしたといふ事實を推測だにする事は出来ないとの一點張りで争つた、裁判官の方では和解を勧めたが、被告は頑としてそれに應ぜぬ、應じたならば少しでも不利を招ぐものとの感じを抱いて居るからである、そこで原告主張の證據を絶対に否認した、一方證人も只傳聞した事實を證言したのみで極めて證據力としては薄弱である、此點から見ると遺憾ながら原告の主張は通らずして、彼れ惡奸暴怒の被告の勝訴に歸してしまつたのである。

此一實例に徴しても買戻の特約は、必らず之を賣渡登記に附記して置く、若しさうでないといふ買受人が更に他に轉賣でもすると、夫れつきりの話である、成程賣渡證書に買戻の特約が明記してあつ